323
638

始

漢文新釋

木村郁三著

學而不思則罔
思而不學則殆（孔子）

東京
修文館藏版

大正
14.9.1
内交

目次

解釋篇……一

第一編 小學選

一 學則……一
二 人子之禮……三
三 愼終如始……四
四 三遷之敎……五
五 伯兪篤孝……六
六 不以闇昧廢禮……八
七 虞芮之爭……一〇
八 言不忠信下等人也……一二
九 馬援戒兄子……一四
一〇 成立之難如升天……一七
一一 恭敬……一八
一二 欲相下不倦……一九
一三 聖希天……二〇
一四 令名無窮……二二
一五 范忠宣公戒子弟……二三
一六 愛書之道……二四
一七 社稷之臣……二六
一八 人皆可以爲堯舜……二七
一九 第五倫無私……二九
二〇 茅容奇行……三一
二一 范文正公大節……三二
二二 張公尙儉……三四

第二編 言志四錄選

一——三一〇

一 實際學問……三八
二 砥礪切磋……三九
三 惜陰……四〇
四 責善……四一
五 自彊不息……四三
六 人涉世如行旅……四四
七 簡牘……四六
八 人做事……四八
九 行百里者半九十……四七
一〇 宜知醫人之良否……四九
一一 爲學之初……五〇
一二 飲食之欲……五一
一三 聖賢胸中……五三
一四 居敬之功……五四
一五 人自侮而後人侮之……五五
一六 患生於易心……五八
一七 他山之石……五七
一八 師友……五八
一九 毀譽……五九
二〇 宜及時勉强……六〇

第三編 蒙求選

一 孔明臥龍……六三
二 匡衡鑿壁……六四
三 子路負米……六六
四 不疑誣金……六七
五 子罕辭寶……六九
六 雷義送金……七〇
七 孔伋縕袍……七一
八 馮異大樹……七三
九 管仲隨馬……七五
一〇 陳寔遺盜……七七
一一 董遇三餘……七九

一二 周舍鄂々……八〇

第四編 論語選

一 三省吾身……八二
二 食無求飽……八三
三 患不知人……八四
四 學干祿……八五
五 林放問禮之本……八五
六 富與貴……八七
七 恥躬之不逮也……八八
八 訥於言……八九
九 女與回也孰愈……八九
一〇 宰予晝寢……九一
一一 弟子孰爲好學……九二
一二 賢哉回也……九三
一三 是吾憂也……九四
一四 用之則行……九五
一五 曾子有疾……九七
一六 六尺之孤……九八
一七 士不可以不弘毅……九九
一八 譬如爲山……一〇〇
一九 後生可畏……一〇一
二〇 司馬牛問君子……一〇三
二一 君君臣臣……一〇三
二二 政者正也……一〇五
二三 君子之德風也……一〇一
二四 知者不失人……一〇六
二五 吾末如之何已矣……一〇七
二六 君子病無能……一〇八
二七 其恕乎……一〇九
二八 不如學也……一〇九
二九 割雞焉用牛刀……一一〇
三〇 鄙夫可與事君也與哉……一一一

三一 女子與小人……一二三
三二 君子不施其親……一二三
三三 見危致命……一二四
三四 日知其所亡……一二五

第五編 孟子選

一 何必曰利……一二六
二 以五十步笑百步……一二八
三 不知夫苗乎……一三〇
四 不爲也非不能也……一三一
五 無恒產者無恒心……一三二
六 得道者多助……一三四
七 此則寡人之罪也……一三七
八 古之君子過則改之……一三八
九 大丈夫……一三一
一〇 何待來年……一三一
一一 不仁者可與言哉……一三三
一二 桀紂之失天下也……一三四
一三 自暴自棄……一三五
一四 誠者天之道也……一三六
一五 莫良於眸子……一三八
一六 事孰爲大……一三九
一七 中也養不中……一四〇
一八 水哉水哉……一四一
一九 無或乎王之不智……一四三
二〇 魚我所欲也……一四五
二一 簞食一豆羹……一四八
二二 仁人心也……一五一
二三 無名之指……一五一
二四 有天爵者……一五三
二五 生於憂患而死於安樂……一五四
二六 舜之居深山之中……一五七
二七 孳孳爲善……一五八

第六編 十八史略選

一 老子……一六〇
二 田單火牛……一六三
三 爲鷄口無爲牛後……二六四
四 蘇秦幷相六國……一六六
五 管鮑之交……一七
六 刎頸之交……一六九
七 漂母飯韓信……一七四
八 燕雀安知鴻鵠之志哉……一七六
九 學萬人敵……一七七
一〇 沐猴而冠……一七九
一一 發縱指示……一八〇
一二 黯之戇也……一八一
一三 多多益辦……一八四
一四 三傑……一八六
一五 敵國破謀臣亡……一八八
一六 馬革裹屍……一九〇
一七 髀肉之嘆……一九一
一八 不效書生尋章摘句……一九三
一九 五柳先生……一九四
二〇 口有蜜……一九五
二一 創業守成……一九七
二二 以至誠治天下……一九九
二三 聖人之學……二〇一
二四 興一利不若除一害……二〇三
二五 留取丹心照汗青……二〇五

第七編 日本外史

一 天不必勦絕其後……二〇八
二 鎧袖一觸……二一〇
三 牛若……二一二
四 斗量帚掃不足數耳……二一三
五 野猪而介者……二一五

六　那須宗高……二一七
七　豈死將軍乎……二一八
八　在人不在器……二二〇
九　以赤手障江河……二二一
一〇　舉一門之肝腦而竭諸國家之難……二二二
一一　開五世之基……二二四
一二　勇悍趫捷之俗……二二六
一三　再造土室……二二七
一四　若我友也……二二九
一五　徒手奮起……二三〇
一六　不齎糧而行焉則誰之力邪……二三三

第八編　日本政記選

一　神武帝論　その一……二三六
二　神武帝論　その二……二三七
三　道一而已……二三八
四　仁德帝論……二四〇
五　和氣清麿論……二四二
六　宇多帝論……二四三
七　兵食論……二四四
八　大江廣元論……二四六
九　足利尊氏論……二五〇
一〇　豐臣秀吉論……二六八

第九編　八家文選

一　古之學者必有師……二五六
二　釋老馬而隨之……二五八
三　窮居而間處……二五九
四　士窮乃見節義……二六一
五　凡吏於土者……二六五
六　事欲知利害權重輕……二六八
七　事不患於不成……二七七
八　豹死留皮……六六七
九　自顧也愈重……二一〇

一〇　人之好生也甚於逸……二七一
一一　定一代所尚……二七二
一二　其志常在千里……二七四
一三　捷如影響……二七五
一四　不忍人之政……二七六
一五　得之艱難則失之不易……二一八
一六　使其四體狃於寒暑之變……二七九
一七　理之所在則成……二八一
一八　一薰一蕕十年尚有臭……二八二
一九　慈故能勇……二八三
二〇　矯枉者欲其直也……二八五

第十編　雜

一　文天祥……二八七
二　眇然小丈夫……二八八
三　大阪百貨之府……二九〇
四　學泗……二九一
五　宋有富人……二九二
六　君子聞譽……二九三
七　上峽之舟……二九四
八　天智帝……二九六
九　積金以遺子孫……二九七
一〇　孔子見齊景公……二九八
一一　非巧遲則不能也……一九九
一二　方孝儒不屈於燕國……三〇〇
一三　何必楚也……三〇一
一四　兵貴神速……三〇三
一五　志不立無可成之事……三〇四
一六　人非聖人誰無過……三〇五
一七　不知孰甚焉……三〇七
一八　不遇盤根錯節無足以別利器也……三〇八
一九　豐太閤似石勒……三〇九
二〇　安得以此二將逐概天下之才哉……三一〇

323-638

目次

熟語篇……三一——三三五
語法篇……三三六——三四五
語句索引……三四六——三六〇

緒言

一、本書は主として中等學校上級生の復習用、又は高等學校并に高等專門學校の入學試驗に應せんとするものの參考用として編述したものであるが、更に又一般漢文研究者の參考書としても相應に役立つことと信ずるのである。

一、本書の材料は最近の高等學校并に高等專門學校入學試驗問題の傾向を考察して最も適當なるもの十篇を選んだ。これ實に著者の最も苦心したところである。

解釋篇には一文毎に白文・訓點文・通釋・語釋を記し、又必要に應じて參考・注意等の條を設けて詳細に說明し、徹底的に理解せしめんことを努めたのである。

熟語篇は大正元年から十四年まで十四ヶ年間に高等學校并に高等專門學校の入學試驗問題となつたものを網羅したもので、一種の故事熟語辭典ともいふべきものである。

語法篇は漢文讀解上最も必要な語法を簡明に說明したものである。解釋篇中の注意の條と併せ研究せられんことを切望する。本書にはこの種參考書が常に分り切つた返り點のつけ方や、送假名の送り方などをくだ〳〵しく說明するやうな煩はしい事は一切省略した。讀者諸君の諄察を乞ふ次第である。

語句索引は本文中の重要なる語句を檢索する便利上添へたのである。之を利用して適宜に檢索し本文の實例について徹底的にその意義用法を知ることに努められたい。

一、本書について研究せられるには、最初に白文を讀み、次に訓點文に及び、再び白文を讀むやうにせられたい。かくして漸次白文讀解に熟達するやうに努められんことを希望する次第である。

大正十四年六月中澣

著者　木村郁三識す

漢文新釋

解釋篇

第一編　小學選

小學、六卷、宋の朱子の撰にして、分ちて內外二篇となし、內篇は立敎、明敎、敬身稽古の四目に、外篇は嘉言、善行の二目に分つ。童蒙講習の用に供せんがために蒐輯せるものなり。

一　學則

先生施敎弟子是則溫恭自虛所受是極見善從之聞義則服溫柔孝弟毋驕恃力志毋虛邪行必正直游居有常必就有德顏色整齊中心必式夙興夜寢衣帶必飭朝益暮習小心翼翼一此不懈是謂

則　法也。先生の敎へられる所に從ひならふこと。

•溫恭
溫和恭敬。
•自虛
心中に雜念を挾まぬこと。
•所受是極
先生から敎へられた所を十分に研究すること。
•服
行ふこと。
•孝弟
よく父母に事へよく兄や長上に事へること。
•驕
己の才にたかぶつて人を侮ること。
•恃力
自分の勇力を恃んで人を侮ること。
•虛邪
虛僞、邪僻(よこしま)なこと。
•遊居有常
外に出て遊ぶにも、內に居るにも、必ずきまりがあつて猥りに惡い所などには立入らぬこと。
•就有德
有德者に近づき親むこと。
•整齊
とゝのへること
•式
ゐゝしむ。
•夙興夜寢

學則

訓點 先生施敎、弟子是則。溫恭自虛、所受是極。見善從之、聞義則服。溫柔孝弟、毋驕恃力。志毋虛邪、行必正直。游居有常、必就有德。顏色整齊、中心必式。夙興夜寢、衣帶必飭。朝益暮習、小心翼翼。一此不懈、是謂學則。

通釋 先生が敎を施されたら、弟子はそれを法として從ひ倣はねばならぬ。さうして敎を受ける時には溫和恭敬にして、自ら心を虛しうして敎へられる所を十分に研究せなければならぬ。又人の善を見ては之れに從ひ、人の義を聞いては之れに服するやうにし、おとなしくやさしくして父母や長上によく事へ、決して己れの力におごり高ぶつたり、己れの勇力を恃んだりして人を侮るやうなことがあつてはならぬ。志にはいつはりやよこしまな所がなく、行は必ず正直にする。遊ぶにも居るにも一定のきまりがあり、必ず有德の人に親み近づくやうにし、顏色をよくとゝのへ、心は必ずつゝしみ、朝は早く起き、夜はおそく寢ね、衣服は必ずとゝのへ、朝には

まだ知らない所を學び、暮には既に學んだ所を復習し、注意深くつゝしんで學んだ所を忘れないやうにする。以上のことを專一にして怠らないやうにするのを學則(修學の法)といふのである。

注意 朝益暮習。かういふやうな句法を互文法といふのである。即ち對句で組立てられたもので、その兩句は一つの句として取扱はねばならぬ性質のものである。まだ知らないことを學ぶのは朝に限つた譯でもなく、復習するのは暮に限つた譯でもなく、只朝夕に學び習ふことである。

二　人子之禮

凡爲人子之禮、冬溫而夏凊、昏定而晨省、出必告、反必面、所遊必有常、所習必有業、恒言不稱老。

訓點 凡爲人子之禮、冬溫而夏凊、昏定而晨省、出必告、反必面。所遊必有常。所習必有業。恒言不稱老。

朝早く起き夜おそくれること。
•飭　とゝのふ。
•朝益暮習　益すとはまだ知らないことを學ぶこと。習ふとは既に學んだところを復習すること。
•小心翼々　用心深くつゝしむ。
•一此　上に云ふ所を專一に守ること。

語釋
•冬溫云々　冬は父母を溫にし、夏は涼しくし、日暮には寢處を定め、朝には御機嫌伺をすること。
•面　面會すること。
•恒言　常に用ふる言葉

語釋
•宦　仕官すること。
•愈　イユと訓む、癒ゆること。

語釋
•孟軻　周末の儒者。孟子七篇を著した

通釋　凡そ人の子たる者の禮は、冬は父母を溫にし、夏は涼しくし、夕方には父母の寢處を定め、朝には安否をたづねるやうにする。又外出する時には必ず父母にそのことを告げ、歸宅した時には、必ず面會する。遊ぶには定つた友があつて濫りに交ることをせず、習ふ所には必ず一定の業がある。父母の前では、平常の言葉にも自分の年のよつたことを云はない。これは父母に心配させない爲である。

注意　定省溫凊といふ熟語はこれから出たのである。よく記憶しおくべきである。又凊と清とを混じないやうにせねばならぬ。

三　慎終如始

官怠於宦成病怠於少愈禍生於懈惰孝衰於妻子察此四者慎終如始詩曰靡不有初鮮克有終

訓點　官怠於宦成病怠於少愈禍生於懈惰孝衰於妻子察此四者慎終如始詩曰靡不有初鮮克有終

通釋　官職の怠りは仕官の目的を成し遂げたといふ安心から起り、病氣養生の怠りは病氣が少しく快くなつたといふ安心から起り、禍は怠りなまける所から起り、孝行は妻子の愛著から衰へ始まるものである。此の四つのものをよく考へ察して、怠り易い終を慎むこと、始めを慎むやうにしなければならぬ。詩經にも初をつゝしまないものはないが、よく終りまでつゝしみをつゞけるものは少ないといつてある。

注意　有終之美といふ語を知るべし。

四　三遷之教

孟軻之母、其舍近墓、孟子之少也嬉戲爲墓間之事踊躍築埋孟母曰此非所以居子也乃徙舍市其嬉戲爲賈衒孟母曰此非所以居子也乃徙舍學宮之旁其嬉戲乃設俎豆揖讓進退孟母曰此眞可以居子矣遂居之

●舍 家。
●踊躍 をどり上ること（死者を哭する狀）
●築埋 墓を築き、死者を埋めること。
●居 オクと訓む。
●賈衒 坐して賣るを賈といひ、行きて賣るを衒といふ
●學宮 學校。
●組豆 共に祭器。
●揖讓 手を拱き禮をして謙遜すること

訓點 孟軻之母、其舍近墓。孟子之少也、嬉戲爲墓間之事、踊躍築埋。孟母曰、此非所以居子也。乃徙舍學宮之旁。其嬉戲乃設組豆揖讓進退。孟母曰、此眞可以居子矣。遂居之。

通釋 孟子の母の家は墓に近かつた。孟子の幼い時、あそび戯れるのに、をどり上つて死者を哭したり、土を築いて死者を埋めるやうな墓場で行ふ眞似をした。孟子の母はこれを見て、「こんな處は子を住ますべき場所でない。」といつて、そこで市中に移つた。ところが、今度は商賈の眞似事をして遊ぶやうになつたので母は「こゝも亦子を住ますべき所でない。」といつて、學校の傍に轉宅した。すると今度は俎豆をならべたり、禮儀作法の眞似事などをして遊ぶやうになつた。そこで母は「こゝこそ眞に子を住ますべきよい處である。」といつて、つひにそこに住居を定めた。

五 伯兪篤孝

●伯兪 姓は韓、名は兪、周の人。
●他日 前日の義。
●子 お前。
●是以 是故に。
●故曰 說苑作者劉向の說。
●作 起す。
●笞 むちうつと訓む

訓點 伯兪有過、其母笞之、泣。其母曰、他日笞子、未嘗泣。今泣何也。對曰、兪得罪、笞常痛。今母之力不能使痛、是以泣。故曰、父母怒之不作於意見於色、深受其罪、使可哀憐、上也。父母怒之不作於意、見於色、下也。

通釋 ある時伯兪に過があつて、其母が之れをむちうつたのに、伯兪は泣いた。そこで母が怪んで「これまでお前を笞つても、まだ嘗て泣いたことがなかつたのに、今泣くのは、どういふ譯であるか。」と尋ねたところ、伯兪は「私はこれまで罪を得

て笞たれるといつも痛かつた。しかるに今日痛みを感ずることがないのは、母上の力の衰へさせ給へるためであると思ふと悲しくなつて泣いたのです。」と答へた。

故に自分（劉向）は思ふに、父母が其の子を怒つても、子は少しも忿りの念を起さず怒りの顔色をあらはさず、深く其の罪をうけて、父母に不憫の情を起させるのは、父母に事へる道の上の部に屬するものである。父母が怒つても、忿りの念を起さず怒りの顔色をあらはさないのは、その次に位するものである。父母が怒るに當り、忿りの念を起し、怒りの色をあらはすのは下等なるものであつて、不孝の甚しいものである。

語釋
- 轔々　車の轟く音。
- 閾　君の門。

六　不以闇昧廢禮

衛靈公與夫人夜坐聞車聲轔轔至閾而止過閾復有聲公問夫人曰知此爲誰夫人曰此蘧伯玉也公曰何以知之夫人曰妾聞禮下公門式路馬所以廣敬也夫忠臣與孝子不爲昭昭信節不爲冥冥惰行蘧伯玉衛賢大夫也仁而有智敬於事上此其人必不以闇昧廢禮是以知之公使人視之果伯玉也

（三九、陸士、大正四、廣島高師）

- 蘧伯玉（キヨハクギヨク）　名は瑗、衛の大夫。
- 禮　禮記。
- 公門　君門。
- 式馬路　車上で人に敬禮の意を表す時は軾（車前の横木）によつて俯すのである。式と軾とは同意。路馬は天子諸侯の車馬、路は大の意、美稱。
- 不爲昭々信節　昭々は明かなる義、衆人の見てある處。人目に明に見えるがために殊更に行を

訓點　衛靈公、與夫人夜坐、聞車聲轔轔至閾而止、過閾復有聲。公問夫人曰、知此爲誰。夫人曰、此蘧伯玉也。公曰、何以知之。夫人曰、妾聞、禮、下公門、式路馬。所以廣敬也。夫忠臣與孝子、不爲昭昭信節、不爲冥冥惰行。蘧伯玉、衛賢大夫也。而仁、有智、敬於事上。此其人必不以闇昧廢禮。是以知之。公使人視之、果伯玉也。

通釋　衛の靈公が、ある夜夫人と坐して、居られたとき車の音が轔々として聞えて來たが、君門の前に至つて止み、門前を通りすぎて、復音のするのを聞いて、夫人に向つて、「あの車に乘つてゐるのは誰れであるかを知つてゐるか。」と問はれた。す

十分に表し行ふことをせないこと。
●不爲冥々惰行　冥々は暗い義、人の見ない處。人目に觸れないがために、己れの行を惰るやうなことはせないこと。

ると夫人は「あれは蘧伯玉でありませう。」と答へた。靈公は「どうしてそれが分るか。」と問はれた。すると夫人は「妾は禮に君門の前では車を下りてそこを通り、君の馬に出逢つた時には軾によつて禮をするとあるのは君を敬ふ心を推し廣めるわけであると聞いて居ります。一體、忠臣と孝子とは人の見てゐる所であるからと申して、殊更に行を十分に表し行ふこともせず、又人が見てゐないからとて、己れの行を惰るやうなこともせない。蘧伯玉は衞の賢大夫で、仁にして且つ智があり、上に事へるのにうや〳〵しくあります。でありますからその人は暗くて誰れも人が見てゐないからとて決して禮儀を怠るやうなことをせないでせう、左樣なわけで、蘧伯玉であるといふことを知つたのです。」と答へた。そこで公は人をやつて見させたところ果して伯玉であつたといふことである。

注意　「曰」とか「聞」とかいふ語があるときは、下文には必ず「ト」といふ助詞を入れて結びを明にすることを忘れぬやうにすべきである。

七　虞芮之爭

語釋
●虞芮（ゲイ）　共に國名。
●西伯　周の文王のこと
●仁人　仁德ある人。
●賓　たゞすと訓む。
●朝　參朝すること。
●邑　城下。
●男女異路　男は右を行き、女は左を行く。
●班白者　ごましほ頭の者
●提挈（テイケツ）　五十位のもの。

虞芮之君相與爭田久而不平乃相謂曰西伯仁人也盍往質焉乃相與朝周入其境則耕者讓畔行者讓路入其邑男女異路班白者不提挈入其朝士讓爲大夫大夫讓爲卿二國之君感相謂曰我等小人不可以履君子之庭乃相讓以其所爭田爲間田而退天下聞之而歸之者四十餘國

（大正五、上田蠶絲）

訓點　虞芮之君、相與爭田、久而不平。乃相謂曰、西伯仁人也、盍往質焉。乃相與朝周。入其境、則耕者讓畔、行者讓路。入其邑、男女異路、班白者不提挈。入其朝、士讓爲大夫、大夫讓爲卿。二國之君感相謂曰、我等小人、不可以履君子之庭。乃相讓、以其所爭田爲間田而退。天下聞之而歸之者、四十餘國。

通釋　虞と芮との二國の君が相ともに田地の所有權を爭つて、その爭が長い間、平

重い物を提げ挙へること。
●朝　朝廷。
●庭　朝廷。
●間田　どちらのものともつかぬ共同の田。

がなかつた。そこで互に相談して「西伯文王は仁者であるから、往つてその裁斷を仰がうではないか。」と、いつて、そこで一緒に周に朝しようとして、其國境内に入ると、農夫は互に田の畔を譲り合ひし、道行く人は互に道を譲つてゐる。それからその城下に入ると、男と女とは路を異にし、年とつたものは重い物を提けてゐるものはない。更にその朝廷に入ると、士は自ら大夫となることを他に譲り、大夫は卿となることを譲つてゐる。二國の君はこの樣を見て深く相感じ、我等の如き小人は君子たる西伯の朝廷は履まれないとて、そこで互に譲り合ひ、其の爭うてゐた田地を間田として、各その國に歸つた。天下の人はこの事を傳へ聞いて西伯の國に歸服するものが四十餘國の多きに及んだといふことである。

注意　「盍」は「何」と「不」との合字であるから、必ず「何ぞ……ざる。」と讀まねばならぬ。盍ゾ二勉強セザル一の類である。

八　言不忠信下等人也

言不忠信下等人也行不篤敬下等人也過而不知悔下等人也悔而不知改下等人也聞下等之語爲下等之事譬如坐於房舍之中四面皆牆壁也雖欲開明不可得矣

訓點　言不レ忠信ニ下等ノ人也。行不レ篤敬ナ下等ノ人也。過テ而不レ知ラ悔ヒ下等ノ人也。悔テ而不レ知ラ改ムル下等ノ人也。聞キ下等之語ヲ爲スハ下等之事ヲ譬ヘバ如シ坐シテ於ニ房舍之中一、四面皆牆壁ナルガ也。雖モ欲スト開明ナラ不レ可カラ得矣。

通釋　言語の忠信でないのは下等の人である。行の篤敬でないのは下等の人である。過ちて悔いることを知らないのは下等の人である。悔いて改めることを知らないのは下等の人である。下等の語を聞き、下等の事をなすのは、譬へば部屋の中に坐つて四方が皆壁で塗りまはしてあるやうなもので、開明ならんことを希望しても得られるものでない。

參考　論語、衛靈公篇に「言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣」とある。

語釋
●忠信　忠は心の誠を盡すこと。信は言葉にいつはりのないこと。
●篤敬　行てあつくつゝしみ深いこと。
●房舍　へや。
●牆壁　牆は土の垣。

語釈
●馬援　馬は姓、援は名、後漢の光武帝に仕へて伏波將軍となる。
●議議　そしり非難すること。
●通　交りを結ぶ。
●輕俠客　輕薄で俠氣ある人。
●汝曹　汝等の義。
●父母之名　子はその父母の名を忌みて言ふべきでない、故に人の言ふのは聞くけれども口に出しては言はぬこと。
●長短　優劣。
●是非　批評。
●龍伯高　龍は姓、伯高は字。
●敦厚　人情のあついこと。
●周愼　つゝしみ深いこと。
●無擇言　言ふ言葉が皆善くて、擇んでする言葉がない
●謙約

九　馬援戒兄子

馬援兄子嚴敦並喜議議而通輕俠客援在交趾還書誡之曰吾欲汝曹聞人過失如聞父母之名耳可得聞口不可得言也好議論人長短妄是非政法此吾所大惡也寧死不願聞子孫有此行也龍伯高敦厚周愼口無擇言謙約節儉廉公有威吾愛之重之願汝曹效之杜季良豪俠好義憂人之憂樂人之樂清濁無所失父喪致客數郡畢至吾愛之重之不願汝曹效也效伯高不得猶爲謹敕士所謂刻鵠不成尙類鶩者也效季良不得陷爲天下輕薄士所謂畫虎不成反類狗者也

（三八、山口高商・三九、岡山醫專）

訓讀點　馬援兄子嚴敦並喜議議而通輕俠客援在交趾還書誡之曰吾欲汝曹聞人過失如聞父母之名耳可得聞口不可得言也好議論人長短妄是非政法此吾所大惡也寧死不願聞子孫有此行也龍伯高敦厚周愼口無擇言謙約節儉廉公有威吾愛之重之願汝曹效之杜季良豪俠好義憂人之憂樂人之樂清濁無所失父喪致客數郡畢至吾愛之重之不願汝曹效也效伯高不得猶爲謹敕士所謂刻鵠不成尙類鶩者也效季良不得陷爲天下輕薄士所謂畫虎不成反類狗者也

通釋　馬援の兄の子、嚴と敦とは、二人とも他人をそしり非難することを好んで、輕俠の客と交際してゐた。叔父の援は交趾に在つて手紙を送つて、二人の者を誡めて言ふには「自分はお前等が他人の過失を聞くことは、父母の名を聞くがやうで、耳では聞くことが出來るが、口では言ふことが出來ないやうにしてほしいものであ

議遜で、行をつゝましやかにして人に高ぶらぬこと。
●廉公　廉潔公平。
●效　ならふ。
●杜季良　杜は姓、季良は字。
●淸濁無所失　賢愚を擇ばず廣く交際すること
●謹敕　つゝしみ深いこと。
●鵠　おほとり。
●鶩　あひる。

る。好んで人の優劣を議論し、妄に政治や法律を批評することは、自分の大いに惡む所である。寧ろ死んでも子孫にかやうな行のあるのを聞くことを願はない。龍伯高は人情が敦厚で行がつゝしみ深く、言ふ言葉は皆善いことのみであつて、擇び捨てるやうな惡い言葉はなく、謙約、節儉、廉潔、公平で威光のある人である。自分はこの人を愛重してゐる。お前等がこの人にならつて身を修めるやうにすることを願ふのである。杜季良は豪俠で義を好み、他人の憂を自分の憂のやうにして憂へ、他人の樂しみを自分の樂しみのやうにして樂しみ、賢愚となく廣く交つてゐる。父の喪に客を招いたところ數郡の人が悉く集つた。自分はこの人を愛重してゐるが、お前等の效ふことを願はない。なぜなれば伯高に效つて修養して伯高ほどの人物となれなくても、猶謹敕の士となることが出來る。所謂鵠を刻んで、よしその出來がわるくても鶩に似てゐるといふやうに、大體似よつた者になれるが、季良に效つて季良程の者になれない時には、墮落して天下の輕薄な人間となる。所謂虎を畫いて成功せず、反つて似てもにつかない狗に類するやうなものである。」といつて二人の甥を戒めた。

語釋
●名門右族　名ある家柄と大家。古人は右を尊しとしたから右族といふ語があるのだ。又「その右に出づるものなし」とかいふのも同じ義から出たのである
●頑率　頑固輕率。
●刻骨　肝に銘ずなどといふに同じ。

一〇　成立之難如升天

余見名門右族莫不由祖先忠孝勤儉以成立之莫不由子孫頑率奢傲以覆墜之成立之難如升天覆墜之易如燎毛言之痛心爾宜刻骨

（三八、山口高商）

訓點　余見名門右族、莫不由祖先忠孝勤儉以成立之、莫不由子孫頑率奢傲、以覆墜之。成立之難如升天、覆墜之易如燎毛。言之痛心。爾宜刻骨。

通釋　自分（唐の柳玭）は古來の名門右族を見るのに、祖先の忠孝勤儉によつて家を興さないものはなく、子孫の頑固、輕卒、奢侈、驕傲によつて家を亡ぼさないものはない。家を興すことの困難なことは天に升るがやうで、家を亡ぼすことの容易な

ことは毛を燎くがやうである。かやうなことを言ふだけでも心を痛ましめるほどである。お前等はよく肝に銘して忘れぬやうにせよ。

一一　恭敬

伊川先生曰近世淺薄以相歡狎爲相與以無圭角爲相歡愛如此者安能久若要久須是恭敬君臣朋友皆當以敬爲主也

語釋
- 淺薄　人情の輕薄なること。
- 歡狎　したしみなれあふ。
- 與　交ること。
- 圭角　言論や行爲のかどばつてゐること。
- 要　望みもとめる。

訓點　伊川先生曰、近世淺薄以相歡狎爲相與以無圭角爲相歡愛。如此者、安能久。若要久、須是恭敬。君臣朋友、皆當以敬爲主也。

通釋　程伊川先生が言はれるには「近頃の世の中の一々は人情が輕薄で、互にしたしみなれあふことを以て、相交るものとなし、その言行にかどがないのを以て互にしたしみ愛しあつてゐるとしてゐる。かやうな交際がどうして永續しようか、決して永續するものでない。故にもし久しく交ることを望むならば宜しく恭敬でなければならぬ。君臣朋友の間は皆、恭敬を以て主とすべきである」と。

語釋
- 横渠先生　姓は張、名は載、横渠は其の號。
- 善柔　こびへつらふことが上手で、誠實の心のないこと。
- 拍肩執袂　狎れ親むさま。
- 氣合　意氣投合。
- 朋友之際　朋友の交際。
- 下

一二　欲相下不倦

横渠先生曰今之朋友擇其善柔以相與拍肩執袂以爲氣合一言不合怒氣相加朋友之際欲其相下不倦故於朋友之間主其敬者日相親與得效最速

（大正五、高校）

訓點　横渠先生曰。今之朋友、擇其善柔以相與、拍肩執袂以爲氣合。一言不合、怒氣相加。朋友之際、欲其相下不倦。故於朋友之間、主其敬者。日相親與、得效最速。

通釋　横渠先生がいはれるには「今の世の朋友といふものは、へつらひ上手なものを擇んで交際し、互に肩をうち袂をとつてなれ〳〵しくすることを以て、意氣投合したやうに思つてゐる。そのくせ一言でも意見の合はないことがあると、互に怒氣

を加へ合ふ。すべて朋友の交際は互に謙遜しあつて倦まないやうにしたいものである。それ故、朋友の間に於て敬を主とするものは、日に〳〵其の親しみを増し、忠告善導の效をうることが最も速かである。」と。

一三　聖希天

濂溪周先生曰聖希天賢希聖士希賢伊尹顔淵大賢也伊尹恥其君不爲堯舜一夫不得其所若撻於市顔淵不遷怒不貳過三月不違仁志伊尹之所志學顔淵之所學過則聖及則賢不及則亦不失於令名

訓點　濂溪周先生曰、聖希天、賢希聖、士希賢。伊尹顔淵、大賢也。伊尹恥其君不爲堯舜、一夫不得其所、若撻於市。顔淵不遷怒、不貳過、三月不違仁。志伊尹之所志、學顔淵之所學、過則聖、及則賢、不及則亦不失於令名。

通釋　濂溪先生がいはれるには聖人はその德の天の如くならんことを希ひ、賢人はその德の聖人の如くならんことを希ひ、士人はその德の賢人の如くならんことを希望する。古の伊尹や顔淵は共に大賢人である。伊尹は自分の仕へてゐる君が堯舜の如く聖天子とならず、又一人の民でもその所をえずして安堵することの出來ないもののあるのを恥ぢることは、丁度市でむちうたれるがやうに深く自ら恥ぢた。又顔淵は決してヤツアタリをせず、同じ過を再び繰り返すことなく、久しい間、仁道に違ふことがなかつた。この伊尹の志したことを志し、顔淵の學んだ所を學んで、伊尹、顔淵以上になつたならば聖人となり、伊尹、顔淵の程度になりえたならば賢人となり、たとひ二人に及ばないでも令名を失ふことはないのである。」と。

參考　論語、雍也篇に「哀公問、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顔回者好學、不遷怒、不貳過。不幸短命死矣。今也則亡未聞好學者也。」

同篇に「子曰、回也、其心三月不違仁。其餘則日月至焉已矣。」

語釋

- 濂溪周先生　周敦頤、宋の大儒、字は茂叔、濂溪（地名）先生と稱す。
- 伊尹　殷の湯王に事へた賢臣。
- 顔淵　孔子の高弟。名は回、字は子淵。
- 撻于市　市は商人の物を交易し、賣買する所。最も恥づべきないふ。
- 不遷怒　甲に怒りたる所を乙に遷さないこと。「ヤツアタリ」をせないこと。
- 不貳過　過「貳」は「フタヽビス」と訓ず。一度した過をくりかへさぬこと
- 三月　久しい間といふ意。
- 令名　「令」は善の意。
- 犂下すること。
- 效　忠告善導の益。

美名。
●不違仁　違はなり、其の心常に仁に依つて違ひ去らないこと。

話釋
●仲由　孔子の弟子、字は子路。
●喜聞過　孟子、公孫丑上篇に「子路、人告レ之、以レ有レ過則喜。」とある。
●規　「タヾス」と訓むたゞしいさめること。
●噫　ア、

一四　令名無窮

濂溪周先生曰仲由喜聞過令名無窮焉今人有過不喜人規如護疾而忌醫寧滅其身而無悟也噫

訓點　濂溪周先生曰、仲由喜聞過令名無窮焉、今人有過不喜人規、如護疾而忌醫寧滅其身而無悟也。噫。

通釋　周濂溪曰く、仲由は自分の過を聞くことを喜んだのでその令名はきはまりがない。しかるに今の人は過があつても、人が正しいさめるのを喜ばないのは、丁度疾をかばつて醫者に診てもらふことを忌み嫌ふやうなものである。寧ろ其の身を滅すとも悟る所がない。あゝ嘆ずべきことである。

注意　「寧ロ……トモ」の呼應に注意すべきである。

一五　范忠宣公戒子弟

話釋
●范忠宣公　名は純仁、忠宣はその謚號。
●恕　ゆるす。
●昏　「クラシ」と訓む
●曹　輩に同じ。

范忠宣公戒子弟曰人雖至愚責人則明雖有聰明恕己則昏爾曹但常以責人之心責己以恕己之心恕人不患不到聖賢之地位也

（大正五、高等學校大正一〇名古屋高工）

訓點　范忠宣公戒子弟曰、人雖至愚、責人則明、雖有聰明、恕己則昏。爾曹但常以責人之心責己、以恕己之心恕人、不患不到聖賢之地位也。

通釋　范忠宣公が子弟を戒しめて云ふには「人は至つて愚かであつても、人の惡を責めることに於ては明かであつて、少しも見のがすやうなことはないが、聰明であつても、自分の非をゆるすことに於ては昏くて、少しも自ら責めようとはしない。汝等はたゞ常に他人を責める心を以て、自分を責め、自分をゆるす心を以て他人をゆるしたならば、聖人や賢人の地位に到達しないことを患へないであらう。必ず到達しうるであらう。」と。

語釋
●典籍　書籍。
●愛護　大切にすること
●缺壞　破損。
●補治　修繕すること。
●濟陽　縣名。
●江祿　江は姓、祿は名、字は彦遐。
●竟　チフと訓む。
●卷束　卷帙。
●狼藉　とりちらす。
●几案　つくゑ。

一六　愛書之道

顏氏家訓曰借人典籍皆須愛護先有缺壞就爲補治此亦士大夫百行之一也濟陽江祿讀書未竟雖有急速必待卷束整齊然後得起故無損敗人不厭其求假焉或有狼藉几案分散部帙多爲童幼婢妾所點汚風雨蟲鼠所毀傷實爲累德吾每讀聖人書未嘗不肅敬對之其故紙有五經詞義及聖賢姓名不敢他用也

訓點　顏氏家訓曰、借人典籍、皆須愛護。先有缺壞、就爲補治。此亦士大夫百行之一也。濟陽江祿、讀書未竟、雖有急速、必待卷束整齊、然後得起。故無損敗。人不厭其求假焉。或有狼藉几案、分散部帙、多爲童幼婢妾所點汚、風雨蟲鼠所毀傷。實爲累德。吾每讀聖人書、未嘗不肅敬對之。其故紙有五經詞義及聖賢姓名、不敢他用也。

語釋　顏氏家訓に云へるには「人の書籍を借りたならば、皆これを大切にしなければならぬ。もし借りた時から破損した所があつたならば、それについて修繕をせよ。これも亦士大夫の百行中の一つである。濟陽の江祿は書を讀んで、まだそれを讀みをへない中は、どんな急ぎの用件が起つても、必ず卷帙を整へてからでなければ、決して起ち上ることはなかつた。それ故に書物の損ずることがなく、從つて人も江祿の求め借ることを厭はなかつた。

或は机上にとりちらしたり、部帙をばら〳〵にしたりなどする時は、多く子供や女中などに汚されたり、風雨虫鼠に毀されたりするものであつて、實に德をけがすことになるのである。自分は聖人の書物を讀む時には、まだこれ迄一度もつゝしんで之れに向はないことはない。又其の反故に五經の文詞、意義や聖人賢人の姓名が書いてあつたならば決してこれを他のことに用ひたことはない。」と。

注意　「爲所」は受身の助動詞であるから「風雨虫鼠に毀傷セラル」と訓むべきであ

●累德　德をけがすこと
●肅敬　つゝしむ。
●故紙　ほご紙。
●五經　詩經・書經・禮記・易經・春秋。

るが、反點の都合上多く「爲風雨虫鼠所毀傷。」と訓んでゐる。

一七　社稷之臣

黯多病病且滿三月上常賜告者數終不癒最後嚴助爲請告上曰汲黯何如人也曰使黯任職居官亡以踰人然至其輔少主守成雖自謂賁育弗能奪也上曰然古有社稷之臣至如汲黯近之矣

訓點　黯多病。病且滿三月。上常賜告者數。終不癒。最後嚴助爲請告。上曰、汲黯何如人也。曰、使黯任職居官亡以踰人。然至其輔少主守成、雖自謂賁育弗能奪也。上曰、然。古有社稷之臣、至如汲黯近之矣。

通釋　漢の法では官吏の病氣が三ケ月に及ぶと官を免ぜられる定めであつた。汲黯は病身で病氣が三ケ月にも滿たうとすることが度々あつた。武帝はその時にはいつ

語釋
- ●黯　姓は汲、字は長孺、漢の濮陽の人、漢の景帝・武帝に仕へた人
- ●告　休暇。
- ●數　シバシバとよむ。
- ●嚴助　武帝の近臣。
- ●亡　「ナシ」と訓む。
- ●踰人　人よりまさりこえること。
- ●守成　已に成就せる事業を守ること。創業に對す。
- ●賁育　孟賁・夏育の二人で古の勇者である。
- ●弗能奪　大節に臨んで奪ふ可からざること。
- ●社稷之臣　社は土地の神、稷は五穀の神、因つて國家の義とする。社稷之臣とは國家と休戚（よろこびとかなしみ）を同じうする臣。

も休暇を賜ふやうにせられたが、黯の病氣は遂になほらなかつた。最後に嚴助といふ人が黯のために休暇を請つた。その時、帝は汲黯といふ男は一體どんな男かと尋ねられた。嚴助は對へていふには「汲黯を官職に居らしめたならば人よりまさりこえた所はありません。しかし幼少の君主を輔佐し、已になれる先帝の業を守ることに至つては、自ら古の勇者である孟賁、夏育を以て任じて居る人でも、彼れの節操をかへさせることは出來ないやうな人物であります。」と。すると、帝がいはれるには「さうだ。古、社稷の臣といふものがあつたが、汲黯のやうなのはそれに近い臣といつてもよいであらう。」と。

參考　弗能奪也。論語、泰伯篇に、曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與、君子人也。とあるが如く、凜乎たる其の節操は利害のために移し奪ふべからざることである。

一八　人皆可以爲堯舜

語釋
- 包孝肅公　包は姓、名は拯、字は希仁、孝肅はその謚號である。
- 尹　知事。
- 寄　託する意。
- 呂滎公　呂は姓、名は希哲、洛陽の人であるから滎陽公といひ、又滎公といふ。
- 無好人　善人なし、世には惡人ばかり居るといふ意。
- 賊　害ふこと。
- 古人　孟子をさす。
- 堯舜　古の聖天子。

訓點　包孝肅公、尹ニ京ニ時、民ニ有リテ自ラ言フ以テ白金百兩ヲ寄セシニ我ニ者死セリ。予ニ其ノ子ニ不ル肯テ受ケハクハシテ願ハクハシテ召シテ其ノ子ニ予ヘラレヨトナ之ニ。尹召シテ其ノ子ニ。辭シテ曰ク、亡父未ダ嘗テ以テ白金ヲ委ネ人ニ也ト。呂滎公聞キテ之ニ曰ク、世人喜ブ言フ無好人ノ三字ヲ者、可シ謂フ自賊スル者ト矣。古人言フ人皆ナ可シトス以テ爲ル堯舜ニ。蓋シ觀テ於此ニ而知ルト之ニ。

通釋　包孝肅公が京都の知事であつた時、そのところの人民の中に、次のやうなことを願ひ出た者があつた。「私に白金百兩を託した人が死んだ。でその子に返さうとするけれども、どうしてもその子を召出してこの金を返し與へて下さい。」といつた。そこで知事はその子を召して、そのことを話したが、その人はそれを辭退して、私の亡き父はまだ嘗て白金を人に託したことはない。といつてどうしても受取らず、二人のものは久しい間、互に讓り合ひをしてゐた。呂滎公が之れを聞いて、「世の中の人は好んで『好人無し』といふ三字を口にしたがるが、それは自ら自身をそこなふものである。孟子が『人は誰れでも堯・舜のやうな聖人になれる』といつてゐるが、この兩人相讓ることを觀てこの言のほんたうであることを知る。」といはれた。

一九　第五倫無私

語釋
- 第五倫　第五は姓、倫は名、字は伯魚、漢の人、仕へて司空となつた。
- 私　私事。

或問第五倫曰公有私乎對曰昔人有與吾千里馬者吾雖不受每三公有所選舉心不能忘而亦終不用也吾兄子嘗病一夜十往退而安寢吾子有疾雖不省視而竟夕不眠若是者豈可謂無私乎

訓點　或ハ問テ第五倫ニ曰ク、公有ル私乎ト。對ヘテ曰ク、昔ノ人有リ與フル吾ニ千里ノ馬ノ者ヲ。吾雖モ

私の心。
●昔　サキニと訓む。
●千里馬　一日によく千里を走る馬。
●三公　東漢には太尉司徒司空を三公とした。第五倫は司空で三公の一人であつた。
●省視　看護する。
●竟夕　竟は終の意で、終夜のこと。

不受、毎三公有所選舉、心不能忘。而亦終不用也。吾兄子嘗病。一夜十往、退而安寢。吾千有疾。雖不省視、而竟夕不眠。若是者、豈可謂無私乎。

通釋　或人が第五倫に向つて「あなたにも私の心がありますか。」と問うた。倫は之れに對へて「先年、自分に千里の馬を贈つたものがあつた。自分はそれを受けなかつたけれども、三公のものが集つて、人を選擧して官吏に登庸するやうなことがある度毎に、心にその人(馬を贈つて來た人)を忘れることが出來なかつたが、しかし終にその人を用ひなかつた。
又、嘗て吾が兄の子が病に罹つた時、一夜に十遍も見舞つたが、退いて我家に歸ると安眠することができた。がしかし吾が子が病氣になつた時には、看護はせなかつたが、夜通し眠ることが出來なかつた。このやうなことは、どうして私の心がないといふことが出來ようか。」といはれた。

二〇　茅容奇行

茅容與等輩避雨樹下。衆皆夷踞相對。容獨危坐愈恭。郭林宗行見之而奇其異。遂與共言。因請寓宿。旦日容殺雞爲饌。林宗謂爲己設。既而供其母。自以草蔬與客同飯。林宗起拜之曰。卿賢乎哉。因勸令學。卒以成德。

訓點　茅容與等輩、避雨樹下。衆皆夷踞相對。容獨危坐、愈恭。郭林宗行、見之、而奇其異、遂與共言、因請寓宿。旦日、容殺雞爲饌。林宗謂爲己設、既而供其母、自以草蔬與客同飯。林宗起拜之曰、卿賢乎哉。因勸令學、卒以成德。

語釋
●茅容　茅は姓、容は名、漢代の人。
●等輩　同輩に同じい。
●夷踞　うづくまる。
●危坐　正坐する。
●郭林宗　郭は姓、林宗は字、名は泰。
●旦日　翌日。
●草蔬　野菜。
●客

通釋　茅容あるとき、同輩と樹の下で雨をよけてゐた。他の多くの者は皆、不行儀

郭林宗をさす。
●卿　あなた。

語釋
●范文正公　范は姓、名は仲淹、文正は謚號宋の吳縣の人。

にうづくまつて相對してゐたが、容だけは正坐していよ〳〵恭しくしてゐた。その時、郭林宗は、そこを通りかゝつて、茅容が他のものとちがつて非常に行儀正しいのを見て、遂に之れと共に話し合ひ、因つて請うて容の家にとめてもらつた。翌日林宗は容が鷄を殺して御馳走の用意をしてゐるのを見て、これはきつと自分のために、用意をしてくれるのであらうと思つてゐた。ところがその御馳走は母親にさし上げて、自分は野菜を以て客と一緒に食事をした。そこで林宗は起つて之を拜し、「あなたは實に賢人であるよ。」といつて、學問をすることを勸めたが、果して茅容は卒によく德を成就した。

二一　范文正公大節

范文正公少有大節其於富貴貧賤毀譽歡戚不一動其心而慨然有志於天下常自誦曰士當先天下之憂而憂後天下之樂而樂也其事上遇人一以自信不擇利害爲趨捨其有所爲必盡其方曰爲之自我者當如是其成與否有不在我者雖聖賢不能必吾豈苟哉

（大正二、高校・大正五、廣島高師）

●歡戚、歡は喜ぶ、戚はかなしむ。
●士當先天下云々　この句は范公の「岳陽樓記」の中に見えてゐる有名な句である。
●事上　天子につかへる
●擇利害云々　利を擇んでこれに趨き、害を計つてこれを捨てる。
●方　道。
●不在我者　天命をいふ。

訓讀點
范文正公、少有大節。其於富貴・貧賤・毀譽・歡戚、不一動其心。而慨然有志於天下。常自誦曰、士當先天下之憂而憂、後天下之樂而樂也。其事上遇人、一以自信、不擇利害、爲趨捨。其有所爲、必盡其方曰、爲之自我者、當如是。其成與否、有不在我者、雖聖賢不能必、吾豈苟哉。

通釋
范文正公は年の若い時から大きな節操があつて、富貴貧賤毀譽歡戚などによつて、その心を惑し動かすことがなかつた。そして慨然として天下國家のことを憂へてゐた。公は常に自ら口ずさんでいつて居つた。「士は當に天下の憂に先だつて憂へ、天下の樂に後れて樂しむべきである。」と。
公は上、天子に事へるにも、下、人に接するにも、ひたすら自ら正しいと信ずる道

を以てし、決して利を擇んでその方に趨いたり、害を計つて當然なすべき事をもすてゝしないといふやうなことはなかつた。そして公が何事かなす所のことがあると必ずその最善の道を盡していふには、「自分としてなさねばならぬことは、利にも趨かず、害をも避けず、全力を盡すべきである。しかしその事の成功とか失敗とかといふことは天命であつて、自分のどうともすることの出來ないものがあり、聖人や賢人でも、たしかにきめることは出來ないである。であるから自分はどうして僥倖によつて成功するといふやうなことみ求めようか、決してさやうなことはしない。」と。

二二 張公尚儉

張文節公爲相自奉如河陽掌書記時所親或規之曰今公受俸不少而自奉如此雖自信清約外人頗有公孫布被之譏公宜少從衆公歎曰吾今日之俸雖擧家錦衣玉食何患不能顧人之常情由儉入奢易由奢入儉難吾今日之俸豈能常有身豈能常存一旦異於今日家人習奢已久不能頓儉必至失所豈若吾居位亡身存身亡如一日乎

語釋
●張文節公　張は姓、名は知白、文節は謚である。

訓點　張文節公爲相、自奉如河陽掌書記時。所親或規之曰、今公受俸不少而自奉如此。雖自信清約、外人頗有公孫布被之譏。公宜少從衆。公歎曰、吾今日之俸雖擧家錦衣玉食、何患不能顧人之常情、由儉入奢易、由奢入儉難。吾今日之俸、豈能常有。身豈能常存。一旦異於今日、家人習奢已久、不能頓儉、必至失所。豈若吾居位去位、身存身亡、如一日乎。

通釋　張文節公は宰相となつてからも、衣食などの身のあてがひが、河陽で書記をして居た頃とかはりがない程儉約であつた。それ故、ある時、親しい人が忠告をし

●自奉　自ら身にあてがふ衣食のたぐひ
●掌書記　府の佐官で文書を掌る。
●所親　親しい者。
●規　タダス　忠告する。
●清約　欲少く、奢をせぬこと。
●外人　世間の人。
●公孫布被之譏　漢の丞相公孫弘が評判をとらんがために、身丞相の官にありな

て「今あなたの受けて居られる俸給は少くはありませぬ。それに身のあてがひが余りに質素であります。あなたは清約であると信じてして居られるであらうけれども世の中の人は昔、公孫弘が名をえんがためにわざと布の着物を着てゐたと同じやうに、あなたも亦名を求めんがために詐つてせられるのであると譏つてゐます。であなたも少しは衆人の意見に從はれるがよいでせう。」といつた。すると公は歎じて曰はれるには、「自分の今日受けてゐる俸給は一家中の者が皆美衣をまとひ、美食をしたからといつて、それが出來ないといふ心配はない。しかし考へて見るに、人情の常として、儉約から贅澤に入るのは易いが、贅澤をしてゐたものが儉約をするのはむづかしいものである。私の今日うけてゐる俸給はどうしていつも受けられるものであらうか、決して受けられるものではない。又吾が身はいつまでも生存せられるものであらうか、決していつまでも生存しえられるものでない。もし一度今日の境遇と異なつた境遇に陷つたならば、家人は久しく贅澤な生活になれてゐて、急に質素な生活をすることが出來ず、きつと立場を失ふやうな目にあふであらう。なんと自分が位に居ても、位を去つても、身が存してゐても、死んでも一日の如くに變がら、布の被(服)を着た、汲黯がそれを見て之を責めて、公孫が布の服を着るのは詐であるといつたが、今君がかく儉約をするのもやはり名を求めんがためにするのであるとそしる。

●稟家　一家中。

●錦衣玉食　美衣美食。

●所　立場。

ないのに及ぶことがあらうか。」と答へられた。

注意　「常有」と「有常」とを區別せよ。「常有」は「常ニ有リ」と訓んで「常ニ」は副詞で副詞的修飾語となつてゐる。「有常」は「常有リ」と訓んで「常」は名詞で主語となつてゐる。

第二編　言志四錄選

言志四錄は全部四卷、幕府の鴻儒佐藤一齋の著にして、學理學則を說きて修身成道の要を述べたるなり。一齋、名は坦、字は大道、捨藏と柄し、一齋また愛日樓と號す。安政六年、八十八歲にて歿せり。

一　實際學問

登山嶽涉川海走數十百里有時乎露宿不寐有時乎飢不食寒不衣此是多少實際學問若夫徒爾明窓淨几焚香讀書恐少得力處

（四五、秋田鐵幽）

訓點　登山嶽涉川海走數十百里。有時乎露宿不寐、有時乎飢不食寒不衣。此是多少實際學問。若夫徒爾明窓淨几、焚香讀書、恐少得力處。

語釋
- 數十百里　數十里乃至百里の事。數十百人などいふも皆同じ用ひ方である
- 露宿　露はあらはる、屋外に泊ること
- 寒　コヾユと訓む。
- 多少　「少」は客字として用ひたのである。「多く」の義。
- 明窓淨几　明かな窓、淸きつくゑ几、は机と同じ。

通釋　山に登つたり、川や海をわたつたりして、數十百里の遠くまでも走る。時には野宿して熟睡しないこともあり、時には飢ゑても食はないこともあり、寒く凍えても着物を着ないこともある。これ等は皆多くの實際上の學問といふものである。かの徒に明かな窓の室にありて、淸らかな机に向ひ、香をたいて本を讀むやうなことでは、恐らく眞の力を得ることが少からう。

注意　「多少」の「少」の字は添へたまでで意味はない。「一旦緩急アレバ」の「緩」の字も同じ用法である。

「恐ラクハ」に對しては推量の語を以て結ぶことを忘れてはならぬ。すべて漢文でも國語でも呼應といふことに注意せねばならぬ。

二　砥礪切磋

凡所遭患難變故屈辱讒謗拂逆之事皆天之所以老吾才莫非砥

●變故　變事。故は事の義。
●屈辱　自己の意を屈して、他から辱をうけること。
●讒謗　讒言しそしること。
●拂逆　自己の意に逆つて思ふやうにならぬこと。
●老　老熟すること。
●砥礪切磋　才德をみがくこと。

礪切磋之地君子當慮所以處之欲徒免之不可（大正七、海兵）

訓點　凡所遭患難變故屈辱讒謗拂逆之事皆天之所以老吾才莫非砥礪切磋之地君子當慮所以處之欲徒免之不可。

通釋　すべて人の遭ふ所の難儀なことや、變つたことや、人から辱められることや讒言せられたり、そしられることや、又自分の意に逆つて思ふやうにならぬことなどは天が自分の才を老熟せしめるわけであつて、わが才德をとぎみがく（修養する）場合でないことはない。君子はこれ等の場合に遇うたならば、當然、これを處理することを考へねばならぬ。徒にこれを免れようとするのはよくないことである。

注意　「非」は「ニアラズ」と訓む。「……デナイ」の意である。

三　惜陰

人方少時不知惜陰雖知不至太惜過四十已後始知惜陰既知之時精力漸耗故人爲學須要及時立志勉勵不則百悔亦竟無益

●已後　以後に同じ。
●耗　減ずること。
●及時　勉強すべき時に當つて、
●不則　不然則の略。
●太　ハナハダと訓む

訓點　人方少時不知惜陰雖知不至太惜過四十已後始知惜陰既知之時精力漸耗故人爲學須要及時立志勉勵不則百悔亦竟無益。

通釋　人は年若い時に當つては、光陰を惜むことを知らない。よしそれを知つても大層惜むといふ迄には至らない。四十才をすぎてから、始めて時間の大切なことを知るのである。がしかしそれを知つた時には、もはや精力はだんだん減じてゐるのである。それ故に人が學問をするには、必ず學問すべき時に當つて、志を立てて勉強せなければならぬ。さうでなかつたならば、幾度後悔しても結局何の益もないであらう。

注意　「不至太惜。」と「太不至惜」とを區別せよ。「不至太惜」は「そんなに惜むには至らない」の意で、

「太不至惜」は「大層惜むに至らない」といふ意である。
「不至太惜」は「惜ムコトヲハナハダシクスルニ至ラズ」と訓み、「太不至惜」は「惜ムニ至ラザルコトヲハナハダシクス」と訓めばその意義の相違が明かになる。
「不レ欲ニ甚入一」は「そんなにはひりたくはない」の意で、
「甚不レ欲レ入」は「大層はひりたくない」の意である。

語釋
●責善　友に善行をせよとすゝめせめること。
●懇到切至　ねんごろ親切に行届くこと。
●資口舌　口や舌をとり用ひること。口舌によること。
●博　廣むること。

四　責　善

責善朋友之道也只須懇到切至以告之不然徒資口舌以博責善之名渠不以爲德卻以爲仇無益也

（大正九、高校）

訓點　責レ善朋友之道也。只須懇到切至、以告之。不然、徒資口舌以博責善之名、渠不以爲德、卻以爲仇。無益也。

通釋　善行をせよとすゝめせめることは朋友に對する道である。だから只宜しくねんごろに親切に忠告すべきである。さうでなくて徒に口さきだけで、善を責めるといふ虚名を廣め取るだけであるならば、渠（忠告された友人）はそれを恩德と思はないで、却つて仇とするであらう。そのやうなことは何の益もないことである。

語釋
●自彊不レ息　自ら強めてやまないこと。
●所以也　スル所也と訓む
●虞舜　帝舜のこと。
●孳々　孜々と同じくつとめること。
●大禹　夏の禹王。

五　自　彊　不　息

自彊不息天道也君子所以也如虞舜孳孳爲善大禹思日孜孜成湯苟日新文王不遑暇周公坐以待旦孔子發憤忘食皆是也彼徒事靜養瞑坐而已則與此學派背馳

訓點　自彊不レ息、天道也。君子所以也。如虞舜孳孳爲善、大禹思日孜孜、成湯苟日新、文王不遑暇、周公坐以待旦、孔子發憤忘食、皆是也。彼徒事靜養瞑坐而已、則與此學派背馳。

通釋　自らつとめてやまないのは天の道である。君子のする所である。（君子のなす所は天道のやうに休息することがない。）かの帝舜がつとめ〳〵て善行をなせるが如

●成湯　殷の湯王。
●苟　マコトニと訓む
●文王　周の文王。
●遑暇　ひま、いとま。
●靜養瞑坐　靜坐して精神を修養し、目を閉ぢて邪念を去ること。
●背馳　そむくこと。

き、大禹が日につとめて善をなさんことを思へるが如き、殷の湯王が日々にその德を新にせんといへるが如き、文王の善をなす外には少しのひまのなかつたが如き、周公の大道を思うて、正坐して夜の明けるのを待てるが如き、孔子の發憤して食を忘れて勉强したやうなことは皆天の道に從つたものである。彼の徒に靜養瞑坐を事とするだけであるならば、此の聖人の流派とは背いてゐるのである。

參考　孟子に「雞鳴而起、孳々爲善者、舜之徒也。」尙書に「我思日孜々。」大學に「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新。」孟子に「周公思兼三王以施四事。其有不合者、仰而思之、夜以繼日。幸而得之、坐以待旦。」論語に「汝奚不曰其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。」

六　人涉世如行旅

語釋
●行旅　旅行。
●險易　けはしい處と、平坦な處。
●畢竟　つまり。
●猶豫　ぐづ〳〵すること。

人涉世如行旅然途有險易日有晴雨畢竟不得避只宜隨處隨時相緩急勿欲速以取災勿猶豫以後期是處旅之道卽涉世之道也

（大正二、高校）

訓點　人涉レ世、如行旅ノ然。途有險易、日有晴雨、畢竟不得避。只宜隨レ處隨レ時相緩急。勿欲レ速以取レ災。勿猶豫以後期。是處レ旅之道、卽涉レ世之道也。

通釋　人が世わたりをするのは、ちやうど旅行するやうなものである。旅行する途中には險岨な處もあれば、平坦なところもある。又日には晴天もあれば、雨天もある。つまりこれ等はどうしてもさけることは出來ない。であるから旅行者は只險易の處に隨ひ、晴雨の時に從つて、或はゆるやかにし、或は急いだりすべきである。餘り早く行きたいと思つて災にかゝつてはならぬし、又ぐづぐづして時期におくれてはならぬ。是れが旅に處する方法であつて、即ち世渡りの方法である。

語釋
●簡牘　てがみ。
●應酬　返事。
●苟且　さにあはせ。かりそめ。
●硯蓋銘　硯の蓋の銘、銘は器にしるして自ら警め、言葉

七簡牘

行遠傳後莫如簡牘雖一時應酬文字必須慎重不可苟且寫訖審讀一過而後封完余嘗爲人作硯蓋銘曰言語或愆猶無形跡簡牘弗慎追悔難革謂此意也

（北海道大學豫科專檢）

訓點　行遠傳後莫如簡牘雖一時應酬文字必須慎重不可苟且寫訖審讀一過而後封完余嘗爲人作硯蓋銘曰言語或愆猶無形跡簡牘弗慎追悔難革謂此意也

通釋　遠方にやり、後の世に傳へるものは手紙に及ぶものはない。それだからその時限りの返事の文でも、きつと、つゝしんで書いて、まにあはせに書いてはならぬ。書いてしまつたならば、一遍よく〳〵讀みなほしてみてから封をすべきである。自分は嘗て人の爲に硯蓋の銘を作つた。その銘に「言語はひよつとしてあやまつことがあつてもあとかたがない。手紙はつゝしんで書かないと、後から悔んでもおつつかない。」と書いたが、それは前に述べた趣意をいつたものである。

語釋
●做　作に同じ、ナスと訓む。
●揆　ハカルと訓む。
●把　トルと訓む。
●妄意　みだりに。

八人做事

人做事須就其事自揆我量與才與力之可及又把事之緩急與齡之老壯相比照而後做起不然妄意下手殆不免狼狽

訓點　人做事須就其事自揆我量與才與力之可及又把事之緩急與齡之老壯相比照而後做起不然妄意下手殆不免狼狽

通釋　人が事をなすにはその事について、先づ自分の度量と才能と力量とが、どの程度まで及ぶことが出來るかをはかり、又その事の急にすべき事か、緩かにすべき事かといふことと、自分の齡の老壯とを互に比較し、てらし合せてから爲し始めるべきである。さうでなくて只みだりにその事を爲し始めたなら、殆どうろたへあわ

てることを免れないであらう。

九　行百里者半九十

余少壯時氣鋭視此學謂容易可做至晩年蹉跎不能如意譬如登山自麓至中腹易中腹至絶頂難凡晩年所爲皆收結事也古語行百里者半九十信然

訓點　余少壯ノ時氣鋭ナリテ視テ此學ヲ謂ヘリ容易シトス可ク做ス。至リテ晩年ニ蹉跎シテ不能ハ如クナルノ意ヲ。譬ヘバ如シ登ルガ山ニ。自リ麓ルニ至ルハ中腹ニ易ク。中腹ヨリ至ルハ絶頂ニ難シ。凡ソ晩年所ハ爲ス皆収結ノ事也。古語ニ、行ク百里ノ者ハ半ニ九十ニ。信ニ然リ。

通釋　余は年の若い時は元氣が鋭かつた。この聖人の學問を視て、たやすくなすことが出來ると思うた。しかるに晩年に至つては、つまづいて思ふやうに進むことが出來なくなつた。譬へて見ると山に登るやうなものである。麓から中腹に至るのは易いが、中腹から絶頂に至るのは困難である。すべて晩年になす所は、皆一生のくくりをつけることであつて最も大切なことである。古語に「百里を行く者は九十里を半とす。」といつてあるのは信に尤もなことである。

語釋
- ●蹉跎（サダ）　つまづきて進まぬこと。
- ●收結事　くくりをつけること。
- ●行百里者半九十　路行く困難は前の九十里と後の十里と匹敵すと云ふ意。即ち事をなすに、始は易く終の難きに喩へたのである。戰國策「行百里者半九十里、於此言末路之難。」

一〇　宜知醫人之良否

事親者宜知醫人之良否以托之至親歿之後己體亦匪輕宜亦知醫人以自托若己劣涉醫事知醫方卻怕或自誤可慎

訓點　事ヘ親ニ者ハ、宜シク知リテ醫人之良否ヲ以托ス之ニ。至リテハ親歿之後ノ、己ノ體亦匪ズ輕ニ。宜シク亦知リテ醫人ヲ以テ自ラ托ス。若シ己ガ劣リ涉リ醫事ニ、知ラバ醫方ヲ、卻テ怕ルハ或ハ自誤ラントコトヲ。可シ慎ム。

通釋　親に事へる者は醫者のよしあしを知つて、よい醫者に親を託するやうにせね

ばならぬ。親が歿してからは、自分の身體も亦大切なものであるから、亦宜しく醫者の良否を知つて、自分の身體を托せねばならぬ。もし自分が少しく醫術を知つて居たならば、却つて自ら我が身を誤るやうなことがあらうかをおそれる。愼むべきことである。

一一 爲學之初

凡爲學之初必立欲爲大人之志然後書可讀也不然徒貪聞見而已則或恐長傲飾非所謂假寇兵資盜糧也可虞

（四・四、醫・專・大・正・六、高・校）

訓點 凡爲學之初、必立欲爲大人之志、然後書可讀也。不然、徒貪聞見而已、則或恐長傲飾非。所謂假寇兵資盜糧也可虞。

通釋 すべて學問をなす初にあたつては、必ず大人物とならうと思ふ志を立ててから後に、書物は讀むべきである。さうでなくて只むやみに、聞いたり、見たりすることを貪るだけであつたならば、ひよつとすると傲慢心を增長し、自分のわるいことをいつはり飾るやうにならうかといふことを心配する。これは世にいふ所の、自分に寇するものに兵器をかし與へ、盜人に食糧をもつていつてやるやうなものである。誠におそるべきことである。（即ち初めに立派な志を立てなければ、學問智識を惡用する心配のあることを云つたのである。）

語釋
- 長傲飾非　傲慢な心を增長し、己の非をいつはり飾る。
- 假寇兵　自分の仇敵に兵器をかし與へる
- 資盜糧　盜人に食物を與へること。資はモタラスこと。

一二 飲食之欲

人欲中以飲食爲尤甚余觀賤役庶徒居隘巷衣襤褸唯於飲食則都爲過分所得錢貨付之飲食每輒至典衣以代酒食況乎貴介人飲食尤爲豐鮮故聖人以簞食瓢飲稱顏子以菲飲食稱大禹其非易事可推也

語釋
- 賤役　いやしい勞働者
- 庶徒（ショト）　もろ〳〵のしもべ。

二 飲食之欲

●隘巷（アイカウ）
せまいちまた。直にして廣き道筋を街といひ、曲りて狹き道筋を巷といふ。

●襤褸（ランル）
ぼろ。

●都
スベテと訓む。

●過分
身分不相應。

●錢賃
賃錢。

●典（シテ）
質に入れる。

●貴介人（トカイノヒト）
貴人の弟をいふこゝは貴人の義に用ひたものである。

●豐鮮
ゆたかで新しいこと。

●簞食瓢飲（タンシ）
簞は飯をもる器食は飯。瓢は飲物を入れる器。

●顏子
孔子の高弟顏淵

●菲飲食
飲食物を質素にする。菲は薄クスと訓む。

●大禹
夏の禹王。

●易事
たやすい事。

語釋

●灑落（サイラク）

訓點 人欲中以飲食爲尤甚。余觀賤役庶徒居隘巷衣襤褸唯於飲食則都爲過分。所得錢賃付之飲食。每輒至典衣以代酒食。況乎貴介人、飲食尤爲豐鮮。故聖人以簞食瓢飲稱顏子以菲飲食稱大禹。其非易事可推也。

通釋 人の慾の中で飲食が最も甚だしいものである。自分はかの賤役庶徒の生活振を觀察するに、せまいきたない小路に住んで、身にはぼろをまとうてゐるが、只飲食物だけはすべて身分不相應の贅澤をしてゐる。そしてまうけえた所の賃錢は之れを飲食物に費してしまふ。又いつも〳〵着物を質に入れて酒食に代へるやうになる。まして貴い人々の飲食物は尤も豐富で新鮮である。故に聖人（孔子をさす）は質素な生活で滿足してゐたといふ點で顏淵をほめたゝへ、飲食物を菲薄にしたといふので禹王をほめられた。これに因つて見ても飲食の慾をつゝしむことの容易のことでないことが推して知られる。

參考 論語雍也篇に「子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。」
論語泰伯篇に「子曰、禹吾無間然矣。菲飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。」

●間然（非難すること）　●致孝乎鬼神（祖先の祭に供物などを十分にすること）

●衣服（平常の衣服）　●黻冕（祭服）　●溝洫（田間の水道）

一三 聖賢胸中

聖賢胸中灑落不著一點汚穢何語尤能形容之曰江漢以濯之秋陽以暴之皜々乎不可尙已此語近之

訓點 聖賢、胸中、灑落不著一點汚穢。何語尤能形容之。曰江漢以濯之、秋陽以暴之、皜々乎不可尙已。此語近之。

通釋 聖賢の胸中はさつぱりとして俗氣なく、少しのけがれもつけてゐない。何の

さつぱりして俗氣のないこと。

●汚穢（オイ）　きたなくけがらはしいこと。

●江漢　江水と漢水。

●秋陽　秋の日、孟子の注に「周の秋は夏の五六月なり盛陽なり。」とある。暴音「ボク」さらすと訓む。

●皜々乎（カウ）　白い貌。

語釋

●尙　加ふ。

●愼獨

語が一番よくこの聖賢の胸中を形容してゐるかといふに、かの孟子の中に見えてゐる曾子が孔夫子を稱贊した語に「孔夫子の人格を物に譬へると、ちやうど江水漢水の水で布を濯ひすゝいでこれを秋の陽でさらしたやうなもので、その潔白なことは何物もこれにまさることはできない。」といつてゐるが、この語が一番これに近い。

參考　孟子、滕文公章句上に「他日子夏子張子遊、以有若似聖人、欲以所事孔子事之、彊曾子。曾子曰、江漢云々。」

一四　居敬之功

居敬之功最在愼獨以有人而敬之則無人時不敬無人時自敬則有人時尤敬故古人不愧屋漏不欺闇室皆謂愼獨也

訓點　居敬之功、最在愼獨。以有人而敬之、則無人時不敬。無人時自敬、則有人時尤敬。故古人不愧屋漏、不欺闇室、皆謂愼獨也。

通釋　敬に居る工夫は、最も獨を愼むといふことに在る。（獨を愼みさへすれば敬獨り居る時も行をつゝしむこと。大學に「君子愼其獨。」とある。

●不愧屋漏（クロウ）　屋漏は室の西北隅で、一室中尤も幽暗な所であるから、幽暗で人の居ない所でも愧つべき行のないこと。詩經に「君子尙不愧屋漏」

●不欺闇室　闇室は人の見ない所であるから惡事を爲し易いものであるが、

に居ることが出來る。人が居るからといふので、敬するならば、人の居ない時には敬せないであらう。人の居ない時に自ら敬するならば、人の居る時は尤も敬するであらう。であるから古人が屋漏に愧ぢずとか、闇室に欺かずとか云つたのは、皆愼獨といふことをいつたのである。

一五　人自侮而後人侮之

牧豎折腰不得不頷乳童拱手亦不可戲君子以恭敬爲甲冑以遜讓爲干櫓誰敢以非禮加之故曰人自侮而後人侮之　（專檢）

訓點　牧豎折腰、不得不頷。乳童拱手、亦不可戲。君子以恭敬爲甲冑、以遜讓爲干櫓、誰敢以非禮加之。故曰、人自侮、而後人侮之。

通釋　牛飼童が腰をまげて禮をすれば、首を下げて答禮しないわけにはいかない。乳のみ子が手を拱いて禮をすれば、亦戲れることは出來ない。牧豎や乳童でも恭しくすれば、これに戲れかゝることは出來ないのであるから、まして君子が恭敬を以

その中にあつても自ら欺かないのである。

語釋
- ●牧豎　牛かひわらべ。
- ●頷　ウナヅクと訓む
- ●拱レ手　人を敬ふ禮。禮記「正立拱レ手」とある。
- ●甲冑　よろひかぶと。
- ●干櫓　干も櫓も共にたて。
- ●非禮　無禮。

て身を護る甲冑とし、遜讓を以て楯としたならば、誰れか敢て非禮を加へるものがあらうか。故に古人は「人は一體、自分で自分を侮つて、然る後に他人がその人を侮るのである。」といつてゐる。

參考　孟子離婁章句上に「夫人必自侮、然後人侮之。家必自毀、然後人毀之。國必自伐、然後人伐之。」とある。

一六　患生於易心

騎不レ踣於登山而躓於下阪舟不レ覆於逆浪而漂於順風凡患生於易心不可不慎

訓點　騎不レ踣於登山而躓於下阪舟不レ覆於逆浪而漂於順風凡患生於易心不可不慎

通釋　騎は登山にはたふれないで、却つて下り坂の時につまづくものである。舟はさかまく大波の時にはくつがへらないで、却つて順風の時に漂ふものである。すべて人生の患は物をあなどり油斷する心から生ずるものである。慎まねばならぬ。

語釋
- ●踣　タフルと訓む。
- ●易心　あなどる心。

語釋
- ●他山之石云々　石は粗惡のものであるが、玉を磨くの具となるやうに、君子も小人に侵されて却つて德を成すこと。他を參考として己を戒める料とする譬。
- ●太　ハナハダと訓む。

一七　他山之石

人有同於我者可與交而其受益不太多有不同於我者亦可與交而其益則匪尠他山之石可以磨玉即是

訓點　人有同於我者可與交而其受益不太多有不同於我者亦可與交而其益則匪尠他山之石可以磨玉即是

通釋　人の自分と趣味を同じうしてゐる者は、與に交つてもよいが、そのために受ける利益はそんなに多くはない。又、自分と同じくない者がある。このやうな人も亦與に交るべきであつて、その人と交るために得る利益は却つて少くない。「他山の石以て玉を磨くべし。」といふのは、是れを謂ふのである。

參考 詩經の鶴鳴篇に「他山之石可以攻玉」とある。攻は磨く意。程子曰く「玉は天下の至美なり、石は天下の至惡なり。然れども玉は石を以て之を磨き、器を成す。猶ほ君子と小人と處るが如し。心を動かし性を忍べば、義理生じ、道德成る。」と。

注意 「不二太多一」そんなに多くはない。「太不レ多」非常に少ない。

一八 師友

徒譽我者不足喜徒毀我者不足怒譽而當者我友也宜勗以求其實毀而當者我師也宜敬以從其訓

訓點 徒譽レ我者、不レ足レ喜。徒毀レ我者、不レ足レ怒。譽而當レ者我友也宜二勗一以求二其實一。毀而當レ者我師也。宜二敬一以從二其訓一。

通釋 徒に我れをほめる者があつても、喜ぶには足らない。徒に我れをそしる者があつても、怒るには足らない。譽めてそれが當つてゐるものは、我が友である。その時には十分努力して、譽められるだけの實を求めるべきである。又我れをそしつてそれが當つてゐるものは、我が師である。宜しくつゝしんでその敎に從ふべきである。

語釋
- ●毀 ソシルと訓む。
- ●勗 ツトムと訓む。

一九 毀譽

聞人之毀譽人大抵聞其半可也。劉向謂譽人不增其義則聞者不快於心毀人不益其惡則聽者不滿於耳此言可謂盡人情矣

訓點 聞二人之毀譽一人、大抵聞二其半一可也。劉向謂、譽レ人不レ增二其義一、則聞者不レ快二於心一。毀レ人不レ益二其惡一、則聽者不レ滿二於耳一。此言可レ謂二盡二人情一矣。

通釋 人が人を毀つたり、ほめたりするのを聞く時には、大抵其の話の半分だけが

語釋
- ●劉向（リウキヤウ） 前漢の學者。

事實であると思つて聞けばよろしい。（俗に「話半分」といふこと）前漢の劉向といふ人が「人を譽めるのにそのよい點を增して話さないと聞く者が心に快しとしない。又人を毀るのにその惡い點を增して話さないと聽く者が耳に滿足しない。」といつたのは、誠によく人情を盡してゐる言葉といつてよろしい。

二〇　宜及時勉強

人生二十至三十如方出之日四十至六十如日中之日盛德大業在此時候七十八十則衰頹蹉跎如將落之日無能爲耳少壯者宜及時勉强以成大業罔或遲暮之嘆可也

語釋
- 衰頹　おとろへること
- 蹉跎　つまづくこと。
- 罔　ナシと訓む。
- 或　有りと訓む。
- 遲暮之嘆　年よつたといふなげき。

訓讀點　人生二十至三十、如方出之日。四十至六十、如日中之日。盛德大業、在此時候。七十八十、則衰頹蹉跎、如將落之日、無能爲耳。少壯者、宜及時勉强、以成大業。罔或遲暮之嘆可也、

通釋　人の一生中、二十から三十までは、今ちやうど上らうとする太陽のやうなものである。四十から六十までは日中の太陽のやうなものである。盛んなる德や大なる事業はこの時に成るのである。七十・八十になると、もはやおとろへつまづいて、西の山に入らうとする落日のやうなもので、何事もなすことが出來ない。であるから年若い人は宜しく勉强すべき時によく勉めて、さうして大業をなさねばならぬ。あゝ何もせない間に年をとつてしまつたといふやうな嘆息を洩すことがなければ結構である。

第三編 蒙求 選

蒙求、三卷、唐の李瀚の撰にして、經史中より事實相類するものをとり、兩々相比し四字句の韻語となし以て童蒙の教科書となしたるもの也。蒙求の名は易蒙卦の童蒙求我に取れり。

一 孔明臥龍

蜀志諸葛亮字孔明琅邪陽都人躬耕隴畝好爲梁父吟每自比管仲樂毅時人莫之許惟崔州平徐庶與亮友善謂爲信然時先主屯新野徐庶見之謂曰諸葛孔明臥龍也將軍豈願見之乎此人可就見不可屈致宜枉駕顧之先主遂詣亮凡三往乃見因屏人與計事善之於是情好日密關羽張飛等不悅先主曰孤之有孔明猶魚之

語釋

- 蜀志　三國中の蜀の歷史。
- 琅邪陽都　琅邪郡陽都縣　支那では郡が縣より大きい。
- 隴畝　田のうね。轉じて田舍。
- 梁父吟　孔明の作つた詩　齊の景公の臣公孫捷・田開彊・顧冶子の三人の勇士があつて、共に君に忠を盡したけれども、終に讒言に遭うて自殺したことを詠んだものである。
- 管仲　齊の桓公を輔けて霸業をなした人。
- 樂毅　燕の昭王に事へ

有水也願勿復言

訓讀點　蜀志、諸葛亮、字孔明、琅邪陽都人、躬耕隴畝、好爲梁父吟。毎自比管仲・樂毅。時人莫之許。惟崔州平・徐庶與亮友善。謂爲信然。時先主屯新野。徐庶見之謂曰、諸葛孔明臥龍也。將軍豈願見之乎。此人可就見。不可屈致。宜枉駕顧之。先主遂詣亮。凡三往乃見。因屏人與計事。善之。於是情好日密。關羽・張飛等不悅。先主曰、孤之有孔明、猶魚之有水也。願勿復言。

（時先主以下、大正六、高校）

通釋　蜀志に諸葛亮は字は孔明といつて、琅邪郡陽都縣の人である。自ら田畠を耕し、好んで梁父吟を歌つてゐた。さうして常に自分を管仲や、樂毅にくらべてゐたが、當時の人は、諸葛亮はとても管仲や樂毅には及ばないと思つてゐた。たゞ崔州平と徐庶の二人だけは亮と親友であつて、信に諸葛亮は管仲や樂毅に比して決して劣らない人物であると謂つてゐた。時に蜀の先主劉備は新野に陣してゐた。そこで

て齊の七十餘城を落した名將。
○先主　蜀の前主劉備。
○屯　陣す。
○新野　地名。
○臥龍　伏龍に同じ、英雄の未だ用ひられないで潛んで居るのに譬へたのである。
○就見　こちらから行つてあふこと。
○屈致　自分の方に屈げて來させること。
○枉駕　車をわざ〳〵立

徐庶は劉備に向つて「諸葛亮は臥龍である。あなたはなんと之れに會ひたいとは思ひませんか。此の人(亮)はこちらから行つて會ふべき人で、こちらへ屈して來させることは出來ない。であなたは自ら車をまげて尋ねられるがよろしい。」といつたので、先主は遂に亮の處へ行つた。三度行つてはじめて會つた。よつて人をしりぞけて、與に天下を定めることを計り、亮の謀を善しとした。そこで二人のよしみは日に〳〵親密になつた。時に劉備の臣の關羽や張飛等は二人の親密になるのを悅ばなかつたので、劉備は「自分と孔明との間柄は魚と水とのやうに親しいのである。どうぞ二度と孔明のことをかれこれといつてくれるな。」といつた。

注意　「莫之許」の句に於て、客語「之」が代名詞で、「莫」といふ打消の語が用ひてある句であるから、說明語「許」と客語「之」との位置を變へたのである。
「勿復言」は「言ふことを復ぴする勿れ」といふ義であつて、「もう二度」といつてくれるな。」と譯しておく。

二　匡衡鑿壁

○寄らせること。
●情好　よしみ。したしみ。
○關羽張飛　共に劉備の臣。
●孤　王侯の自稱。

語釋
○鄰舍　鄰家。
○逮　及ぶ。
○大姓　豪家。
○客作　人にやとはれて仕事をする。
○償　報酬。
○資給　供給。
○大學　大儒。

衡勤學無燭鄰舍有燭而不逮衡穿壁引其光而讀之邑大姓文不識名家富多書衡乃與其客作而不求償願得書遍讀之主人感歎資給以書遂成大學

訓點　衡勤學無燭。鄰舍有燭而不逮。衡乃穿壁、引其光而讀之。邑大姓文不識、名家富多書。衡乃與其客作而不求償願得書遍讀之。主人感歎、資給以書、遂成大學。

通釋　衡(前漢の人、匡衡字は稚圭といふ人)は學問を勤める時、燈火がなかつた。隣家に燈火があつたが、其の光がとゞかなかつた。衡はそこで壁に穴をあけてその光を引いて書物を讀んだ。村の豪家の文不識といふ人は家が富んで書物を多く持つてゐるといふので名高かつた。衡はそこでその人のためにやとはれたが賃錢を求めず、その代りに書物を借りてすべてそれを讀みたいと思つた。主人は深く感心して書物を供給してやつたので、衡は悉くそれを讀破して遂に大學者となつた。

語釋
○家語　書名。
○藜藿（レイクワク）　藜はあかざ。藿はまめのは。粗末なたべもの。
○鍾　六石四斗。
○莔　しとね。
○從車　ともぐるま。

三子路負米（ツカモト）

家語仲由字子路。見孔子曰負重涉遠不擇地而休。家貧親老不擇祿而仕。昔由事二親之時常食藜藿之實爲親負米百里之外。親沒之後南遊於楚從車百乘積粟萬鍾累茵而坐列鼎而食願欲食藜藿爲親負米不可得也子曰由也事親可謂生事盡力死事盡思者也

訓點
家語、仲由字子路。見孔子曰、負重涉遠、不擇地而休。家貧親老、不擇祿而仕。昔由事二親之時、常食藜藿之實、爲親負米百里之外。親沒之後、南遊於楚。從車百乘、積粟萬鍾、累茵而坐、列鼎而食、願欲食藜藿、爲親負米、不可得也。子曰、由也事親、可謂生事盡力、死事盡思者也。

通釋
家語といふ書の中に次のやうなことがのつてゐる。仲由（字は子路）嘗て、孔子に見えて「重い荷物を負うて遠方へ行き、疲れた時には地を擇ばずどこにでも休憩するし、家が貧乏で親が老いてゐる時には、祿の多少を擇ばずして仕へるといふ語がありますが私のもとの身の上もさうでありました。昔、私が兩親に事へてゐた時には、貧乏でいつも藜藿の實を食ひ、百里の遠方へ米を負ひなどして親を養つてゐました。ところが親が死んでから後、南の方、楚の國に仕へ、從車が百乘もあり、倉に積みかさねた米は万鍾もあり、蒲團をかさねて坐し、鼎を列ねて山海の珍味を食ふやうな身分となりました。もう一度藜藿を食ひ親のために米を負ひたいと願ふけれども出來ないのであります。」と申した。其の時、孔子が「由は親に事へるのに、親の生きてゐる時には力を盡し、親が死んでからは追慕の情を盡す者といつてよろしい。」と申された。と

四　不疑　誣金（ヅ）

前漢直不疑南陽人。爲郎事文帝。其同舍有告歸。誤持其同舍郎金去。已而同舍郎覺亡(意)不疑。不疑謝有之。買金償。後告歸者至而歸金。亡金郎大慙。以此稱爲長者。稍遷中大夫。（大正九、上田竄絲）

訓點 前漢直不疑南陽人爲郎事文帝其同舍有告歸誤持其同舍郎金去已而同舍郎覺亡意不疑不疑謝有之買金償後告歸者至而歸金亡金郎大慙以此稱爲長者稍遷中大夫（大正、三米澤高工）

語釋
- 郎　官名。
- 告歸　告は休暇の義。休暇を得て歸省すること。
- 買金　物を賣つて金をとゝのへること。
- 長者　有德の人。

通釋 前漢の直不疑は南陽の人である。郎となつて文帝に事へて居た時、同じ宿舍に居るもので、休暇をえて歸國するものが、歸る際に誤つて其の同舍の郎の金を自分の金だと思つて持つて歸つてしまつた。已にして同舍の郎は自分の金のないのに氣がついて、不疑が盜んだのであらうと疑つた。そこで不疑は自分がわるかつたのだとあやまつて、物を賣つて金をとゝのへて辨償した。後、歸國してゐた郎が歸つて來て、自分が誤つて持つて歸つたのだと詫びて金を返したので、金を紛失した郎は大に慙ぢた。かういふことがあつたので、皆のものは不疑を長者とした。不疑はそれからだん〳〵と立身して中大夫となつた。

五　子罕辭寶

左傳曰宋人得玉獻諸司城子罕。子罕弗受。獻玉者曰以示玉人。玉人以爲寶。故獻之。子罕曰我以不貪爲寶。爾以玉爲寶。若以與我。皆喪寶也。不若人有其寶。（大正、三米澤高工）

訓點 左傳曰宋人得玉獻諸司城子罕子罕弗受獻玉者曰以示玉人玉人以爲寶故獻之子罕曰我以不貪爲寶爾以玉爲寶若以與我皆喪寶也不若人有其寶

語釋
- 司城　官名。
- 玉人　玉工。
- 人　人々と訓む。

通釋 左傳に云ふには、宋の人が玉を得てこれを司城の子罕に獻じたところが子罕はそれをうけない。そこで玉を獻じたものは「この玉を玉みがきに見せたところが、

これは實に立派な寶玉であるといつたので、これをあなたに獻ずるのであります。」といふと、子罕は自分は財寶を貪らないことを以て寶としてゐる。もしおまへがこの玉を自分にくれると、おまへも我も寶を失ふことになる。であるからおまへはこの玉を寶として持つて居り、我はこの玉をうけないで、二人共にその寶を全うするのが一番よい。」といつたといふことである。

注意　「諸」は「之乎」の合字である。「獻二之乎司城子罕一」といふに同じい。

六　雷義送金

後漢雷義字仲公豫章鄱陽人初爲郡功曹擢舉善人不伐其功義嘗濟人死罪罪者後以金二斤謝不受金主伺義不在默投金於承塵上後葺理屋宇乃得之金主已死無所復還乃以付縣曹後拜侍御史除南頓令

訓點　後漢ノ雷義字ハ仲公、豫章鄱陽ノ人。初メ郡ノ功曹ト擢シテ舉善人ニ不ハコラ

語釋
- 功曹（コウサウ）　郡の記錄を司る官。
- 擢舉（タクキヨ）　引きあげること。
- 承塵（ショウヂン）　なげし。
- 葺理　ふきかへる。
- 縣曹　縣に在る代官所。
- 付　送り遣すこと。
- 除（デヨ）す　前の官を去りて新官に任ずる義

其功。義嘗濟人死罪。罪者後以金二斤謝。不受。金主伺義不在、默投金於承塵上。後葺理屋宇、乃得之。金主已死、無所復還。乃以付縣曹。後拜侍御史、徐南頓令。

通釋　後漢の雷義は字を仲公といつて、豫章縣鄱陽の人である。初め郡の記錄官となり、適任者を引きあげ用ひたけれども、少しも其の功にほこらない。義は嘗て死罪に當つてゐる人を助けてやつたことがあつた。その時その罪人は御禮として金二斤を持つて來たが、義はこれを受取らない。そこでその人は義の不在の時をうかゞつて、義には何も云はないで、だまつて金をなげしの上においた。後日、屋根をふきかへた時にその金が出て來たが、その時、金主は已に死んでゐたから、もはやこれを還す所がない。そこで縣の代官所に送りとゞけた。後に侍御史に拜せられ、又南頓令に遷された。

七　孔伋縕袍

語釋
●子思　孔子の孫、中庸を作る。
縕袍（ウンパウ）　布子の古いものどてら。
狐白裘（コハクキウ）　狐の腋の下の白毛で作つた皮衣古來支那で珍重してゐるもの。
假　貸す。
伋　子思の名。
溝壑（ガク）　どぶ。

子思居於衞。縕袍無表。二旬九食。田子方聞之。使人遺狐白裘。恐其不受。因謂之曰。吾假人遂忘之。吾與人如棄之。子思辭而不受。子方曰。我有子無。何故不受。子思曰。伋聞之。妄與不如遺棄物於溝壑。伋雖貧。不忍以身爲溝壑。是以不敢當。

訓點
子思居ル於衞ニ。縕袍無ク表ヲ、二旬ニ九食。田子方聞キ之ヲ、使ム人ヲシテ遺ス狐白裘ヲ。恐レノ其ノ不ラ受ケ、因テ謂ヒテ之ニ曰ク、吾レ假サバ人ニ遂ニ忘ルル之ヲ。吾レ與フレバ人ニシテ如シ棄ツルガ之ヲ。子思辭シテ而シテ不ラ受ケ。子方曰ク、我ハ有リ子ハ無シ。何ニ故ニ不ルト受ケ。子思曰ク、伋聞キ之ヲ、妄リニ與フルハ不ルト如カ遺ス棄物ヲ於溝壑ニ。伋雖ドモ貧ナリト、不ラ忍ビ以テ身ヲ爲スニ溝壑ニ。是以テ不ラ敢テ當ラ。

通釋
孔子の孫、子思が衞の國に居た時、身に着けてゐるどてらは着古してしまつて、もはや表がなく裏ばかりになつてゐた。さうして二十日間に漸く九回食事をするといふ程の貧しい暮しをしてゐた。田子方といふ人が之れを聞いて氣の毒に思ひ、人をやつて狐白裘を送り届けさせたが、子思は之れをうけとるまいと氣遣つて、それで使者に云ひつけて、「自分は人に物を貸すと、それなりそれを忘れてしまつて、それを返して貰ふとは思ひません。又人に物を與へると之れを棄ててしまふと同じで、少しもこれを恩にきせることをしないから、どうか受け取つて下さい。」と云つたところが、子思は案の如く辭して受取らない。そこで子方は又「私にはこの物が有つて、あなたはお持ちでない。それになぜあなたはこれを受取りなさらぬか。」と使者に云はせた。すると子思は「私は何のわけもなく人に物を與へるのは、物をどぶの中に捨てる方がましであると聞いてゐる。自分は貧乏ではあるが、我が身をどぶとするには忍びませぬ。それ故におうけすることは出來ませぬ。」と答へた。

注意
「我有子無」に於て「我ハ、子ハ」といふやうに、區別する助詞「ハ」を送ることを忘れてはならぬ。
「伋聞之」とあるから「遺棄するに如かずと。」といふやうにとをそへることを忘れてはならぬ。

八　馮異大樹

●潁川（エイセン） 郡名。
●父城 縣名。
●左氏春秋 春秋左氏傳。左丘明の著。
●孫子 名は武、吳王闔閭の將で、兵法の書十三篇を作る。
●伐 「ほこる」と訓む
●進止皆有表識 進んで行く時も退き止まる時も旗指物を立て、行列を正しくすること。
●整齊

後漢馮異字公孫潁川父城人。好讀書通左氏春秋孫子兵法。爲人謙退不伐。行與諸將相逢輒引車避道。進止皆有表識。軍中號爲整齊。每所止舍諸將竝坐論功異常獨屏樹下。軍中號曰大樹將軍。

訓點 後漢馮異、字ハ公孫、潁川父城ノ人。好ミ讀書ヲ通ズ左氏春秋・孫子兵法ニ爲リテ人謙退ニシテ不ル伐ラ。行ヒテ與ニ諸將ト相逢バ輒引テ車ヲ避ケテ道ヲ。進止皆有リ表識ヲ。軍中號シテ爲ス整齊ト。每ニ所ニ止スル舍ニ、諸將竝ビ坐シテ論ジテ功ヲ。異常ニ獨リ屏シリゾク樹下ニ。軍中號シテ曰フ大樹將軍ト。

通釋 後漢の馮異は字を公孫といひ、潁川父城の人である。讀書を好んで左氏春秋や孫子の兵法に通じてゐた。その人がらは謙遜で人にものを誇ることをせない。外に出て諸將と出逢ふ時はいつでも、車を引きよせて道をよけた。進んで行く時も、退いて止まる時も、旗指物を立てて、行列を正しくした。それで軍中のものは皆、馮異の軍はよく整頓してゐるといつて居た。戰爭が止んで休息するごとに、諸將は

と、のふこと。
●止舍 戰が止んで休息すること。
●論功 各手柄話をすること。

語釋
●韓非子 書名。
●管仲隰朋（シフホウ） 齊の桓公に仕へた二人の賢大夫
●孤竹 國名。
●山之陽 山の南。
●山之陰 山の北。
●蟻壤 ありづか、蟻垤

竝び坐して自分の手柄話をしてゐたが、馮異は常に獨り木蔭に退いてゐた。それで軍中のものは大樹將軍といふ名をつけた。

九 管仲隨馬

韓非子曰管仲隰朋從於桓公而伐孤竹春往冬返迷惑失道管仲曰老馬之智可用也乃放老馬而隨之遂得道行山中無水隰朋曰蟻冬居山之陽夏居山之陰蟻壤一寸而仞有水乃掘地遂得水以管仲隰朋之智至其所不知不難師於老馬與蟻今人不知以其愚心師聖人之智不亦過乎

訓點 韓非子ニ曰ク、管仲隰朋從ヒテ於桓公ニ而伐チ孤竹ヲ。春往冬返リ迷惑シテ失フ道ヲ。管仲曰ク、老馬之智可キ用フト也チ。乃チ放チテ老馬ヲ而ヒテ隨フ之ニ、遂ニ得タリ道ヲ。行イテ山中ニ無シ水ヲ。隰朋曰ク、蟻ハ冬ハ居リテ山之陽ニ、夏ハ居ル山之陰ニ。蟻壤一寸ニシテ而仞有リト水ヲ。乃チ掘リテ地ニ遂

仞 周尺の八尺。
●難 「はゞかる」と訓む。

得レ水。以管仲隰朋之智、至其所不知、不難師於老馬與蟻。今人不知、以其愚心師聖人之智、不亦過乎。

通釋 韓非子に曰く、管仲と隰朋といふ二人の賢人が齊の桓公に從つて、孤竹の國を征伐し、草木の繁茂せる春往いて、草木の凋落せる冬返つたので、迷つて道を間違へた。その時、管仲が「老馬はよく道を知つてゐるからその智慧を用ひたがよい。」といつたので、そこで老馬を放つてそれについて行つて遂に道を得た。又ある山の中を行つて飲むべき水がなかつた。その時隰朋が「蟻といふ虫は冬は山の南に居り、夏は山の北に居るものである。蟻づかが一寸もあると、そこを八尺も掘ると水が出る。」といつたので、そこで地を掘つて遂に水をえた。といふことである。管仲や隰朋のやうな賢い人でも、知らないことは老馬や蟻のやうなものを師とすることを何とも思はない。しかるに今の人は愚でありながら聖人の智を師とすることをせないのは亦あやまれることではないか。と。

語釋
●鄉閭 鄉里。閭は里門。
●率物 人の先に立つて導く。
●爭訟 爭論、訴訟。
●判正 さばき。
●曉譬 さとす。
●曲直 正邪、是非。
●短 「そしる」と訓む。
●歲荒 凶作。

一〇 陳寔遺盜

陳寔在鄉閭平心率物。有爭訟輒求判正。曉譬曲直退無怨者。至乃歎曰寧爲刑罰所加不爲陳君所短。時歲荒有盜夜入其室止於梁上。寔陰見之呼子孫正色訓之曰夫人不可不自勉不善之人未必本惡習以性成遂至於此梁上君子是矣。盜大驚自投於地稽顙歸罪。寔曰視君狀貌不似惡人當由貧困。令遺絹二匹。自是一縣無盜

訓點 陳寔在鄉閭、平心率物。有爭訟、輒求判正。曉譬曲直、退無怨者。至乃歎曰、寧爲刑罰所加、不爲陳君所短。時歲荒。有盜夜入其室、止於梁上。寔陰見之、呼子孫、正色訓之曰、夫人不可不自勉。不善之人、未必本惡。習以性成、遂至於此。梁上君子是矣。盜大驚、自投於地、

梁上 はりの上。
正色 顔色を正す。
習以性成 「習性と成る」と訓む。「以」は「與」と通ず。習慣が天性となる義。
稽顙 額を地につける。顙は「ひたひ。」

稽顙歸罪。寔曰、視君狀貌、不似惡人。當由貧困。令遺絹二匹。自是一縣無盜。

（大正一〇、高校）

通釋 陳寔は自分の鄕里に居た時、心を公平にして人を導いた。村に爭ひごとや、訴へごとのある時はいつも陳寔のさばきを求めた。陳寔がその正邪曲直をさとしてやると皆、そのさばきに得心してあとで怨むやうなものはなかつた。さうして遂にはそのさばきの公平なのに感嘆して「たとひ刑罰を加へられても、陳寔にそしられるやうなことはせまい。」といふ位になつた。その頃凶作で、盜人が夜陳寔の家に入つて、はりの上にのつてゐた。寔はひそかに之を見て子や孫を呼びよせて、顔色を正しくして「一體、人たるものは自ら勉めねばならぬ。不善の人も必ずしも本から惡人といふ譯ではない。習慣が天性となつて、たうとうこのやうになるのである。あの梁上に居る人が即ちそれである。」といつて訓へた。盜人はこれを聞いて大いに驚いて、自ら下に飛び降りて、額を地にすりつけてあやまつた。その時寔は盜人に向つて「君の樣子をよく見るに、惡人のやうではない。貧困のためにこんなことをしたのであらう。」といつて絹二匹をおくらせた。此の時から縣下に盜人がなくなつた。

注意 「輒」は「その度毎に」の意
「梁上の君子」この故事から盜人の意となる。

訥 口の重いこと。
采相 相は相と同じ鋤。采相は鋤をとつて耕すこと。
負販 品物を負うて販賣すること。
挾持 携へ持つこと。

一一 董遇三餘

董遇字季直性質訥好學與兄季中采相負販常挾持經書投閑習讀。人有從學者遇不肯敎云。必當先讀百遍言讀書百遍而義自見。從學者云、苦渴無日。遇言當以三餘。冬者歲之餘夜者日之餘陰雨者時之餘。

訓讀點 董遇字季直、性質訥好學、與兄季中采相負販。常挾持經書、投閑習讀。人有從學者、遇不肯敎云。必當先讀百遍。言讀書百遍而義自見。從學者云、苦渴無日。遇言當以三餘。冬者歲之餘、夜者日之

●投閑 暇を見て。
●言 言フコヽロはと訓む。
●苦渴 苦しむこと。
●直諫 へつらはずまつすぐに諫める。
●聽朝 朝政を聽く。
●皋 おちど。
●千羊之皮云々 千枚の羊の皮衣は一枚の狐の腋の下の皮で作つた衣には及ばないといふことで大勢の愚人は一人の賢人に及ばないこと。
●唯々 はいはいと答へること。
●鄂々 諤々とも書く、眞直な言葉。へつらはない言葉

餘、陰雨者時之餘。

通釋 董遇は字を季直と云つて、性質は朴訥で學問を好んでゐた。兄の季中と鋤鍬をとつて田を耕したり、物を負うて賣り歩いたりした。常に經書を携へて、ひまを見てはくりかへし〳〵讀んだ。人の董遇の弟子となつて學ぶことを乞ふ者があると遇は肯て敎へないで「必ず先づ百遍ほど素讀せよ。」といつた。その意味は、素讀を百遍もするとその書の意味は自然に分ると云ふことである。すると從ひ學ぶ者は「讀書を百遍もしてゐる時がないのにこまる。」といふと、遇は「三餘の時を以てするがよい。それは冬は歲の餘り、夜は一日の餘り、雨降りは時の餘りである。」といつた。といふことである。

一二 周舍鄂々

晉大夫趙簡子有臣曰周舍好直諫周舍死簡子每聽朝常不悅大夫請皋簡子曰大夫無皋吾聞千羊之皮不如一狐之腋諸大夫朝徒聞唯唯不聞周舍之鄂々是以憂也

訓點 晉大夫趙簡子有臣曰周舍好直諫周舍死簡子每聽朝常不悅大夫請皋簡子曰大夫無皋吾聞千羊之皮不如一狐之腋諸大夫朝徒聞唯唯不聞周舍之鄂々是以憂也

通釋 晉の大夫趙簡子の臣に周舍といふ人があつて、遠慮なく思つたまゝ眞直に諫めることを好んだ。周舍が死んでから簡子は朝政を議する毎に、常に機嫌がわるかつた。それで諸大夫は何か自分等におちどがあるのではなからうか、もし落度があつたら仰せられたいと云つた。ところが簡子は「お前等に別におちどがある譯ではない。自分は千枚の羊の皮衣は一枚の狐の腋の下の皮で作つた衣に及ばないといふことを聞いてゐる。お前等は朝廷に出ても只はい〳〵といつてゐるのみで、周舍のやうに眞直に自分を諫めてくれない。自分は、もはや周舍の鄂々の言を聞くことが出來なくなつたから、不機嫌なのである。」と、いつたといふことである。

第四篇　論語選

論語二十篇は孔子の教誨を垂れ、或は弟子及び時人の互に論難答述せし語を孔子の歿後、門人相與に輯めて論撰したるもの也。

一　三省吾身

曾子曰吾日三省吾身爲人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳不習乎　（學而）

訓點　曾子曰、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。

通釋　曾子が云ふには「自分は毎日幾度となく我身を反省する。それはとかく人は他人のことはなほざりにし勝ちのものであるが、自分は人から相談をうけた時、それに對して十分に眞心を盡さなかつたことはなかつたか。又朋友と交つて不誠實のことはなかつたか。又先生から學んで自分がまだ十分に習熟しないことを人に傳へたやうなことはなかつたか」と。かやうに常に反省して德を進めることをつとめてゐると。

語釋
- 曾子　名は參、孔子の門人、孝を以て聞えた人。
- 三省　幾度となく反省すること。三度に限つた譯ではない。
- 謀　相談する。
- 忠　眞心をつくすこと。
- 習　習熟すること。

二　食無求飽

子曰君子食無求飽居無求安敏於事而愼於言就有道而正焉可謂好學也巳　（大正八、高校）（學而）

訓點　子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而愼於言、就有道而正焉。可謂好學也巳。

通釋　孔子が云はれるには「君子は學問に熱心なために、食物を腹一杯たべたいとも思はず、居心地のよい家に住みたいとも思はず、行を敏捷にしてぐづぐづせず、

語釋
- 居　住居。
- 有道　有道の士。學德のすぐれた人。

言語はなるべく控へ目にして失言のないやうに慎み、その上、學德の優つた有道の士について自分の行を正して行く。かやうな人は眞に學問を好む人といつてよい。」と。

三　患不知人

（學而）

子曰、不患人之不己知。患不知人也。

訓點　子曰、不レ患ニ人之不ニ己知一。患不レ知レ人也。

通釋　孔子が曰はれるには「人はとかく自分の才德などを人に知られたがるものであるけれども、たとひ人に知られないでも、自分の才德がへるわけのものでもないから、人が自分を知らないのは別に苦にするに及ばない。但、他人の人となりを知らないのを苦にすべきである。なぜなれば人を十分に知る明のない時は、自分の德をみがくべき益友を失ふ恐れがあるからである。

注意　「不己知」の句は、普通ならば客語は說明語の下に來るべきであるが、この句は打消の句であつて、尙、客語(己)が代名的であるから、客語(己)と說明語(知)との位置を倒置したのである。

四　學干祿

（爲政）

子張學干祿。子曰、多聞闕疑、愼言其餘、則寡尤。多見闕殆、愼行其餘、則寡悔。言寡尤、行寡悔、祿在其中矣。

訓點　子張學レ干レ祿。子曰、多聞闕レ疑、愼言其餘則寡レ尤。多見闕殆、愼行其餘則寡レ悔。言寡レ尤、行寡レ悔、祿在其中矣。

通釋　子張が俸祿を求めるにはいかにすべきかを孔子に尋ねた。すると孔子は次のやうに答へられた。「君子の道は言行を愼むことが一番大切である。であるから多く古今の人々の言行を聞いた中で、自分の心に疑はしいと思ふものをとりのけて、その餘の信ずべきことを、尙その上、愼んでいふやうにすれば、人にとがめられること

語釋
- ●子張　孔子の弟子。
- ●干　もとむと訓む。
- ●祿　俸祿。
- ●闕　とりのける。
- ●尤　咎。
- ●殆　危。危殆などといふ熟語がある。

とが少い。又多く見た言行の中で自分の心に不安と思ふやうなことをとりのけてその餘の安心の出來ることを、更に慎んで行ふやうにする時は、後悔することが少い。かやうに言行を慎んで、人から尤められるやうなことも少く、自ら悔いるやうなことも少かつたら、祿位は求めずとも、自然に來るものである。」と。

五　林放問禮之本

林放問禮之本子曰大哉問禮與其奢也寧儉喪與其易也寧戚

（八佾）

訓點　林放問禮之本。子曰、大哉問。禮、與其奢也、寧儉。喪、與其易也、寧戚。

通釋　林放といふ者、ある時、孔子に禮の本源について問うたところ、孔子はその問を大層おほめになつて云はれるには「まあなんとその問の大なることよ。すべて禮は華奢に流れるよりは寧ろ儉素にせよ。喪禮は哀みを主とすべきものであるから、その喪具などの整ひそなはるよりも、寧ろ十分に哀悼の誠をあらはすべきである。」と。

注意　「與……寧……」の句法をよく理解しておかねばならぬ。

語釋
- ●林放　魯の人。
- ●易　「ソナハル」と訓む、喪具などのよく整つてゐること。
- ●戚　いたみかなしむ

六　富與貴

子曰富與貴是人之所欲也不以其道得之不處也貧與賤是人之所惡也不以其道得之不去也君子去仁惡乎成名君子無終食之間違仁造次必於是顚沛必於是

（里仁）

訓點　子曰。富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是、顚沛必於是。

語釋
- ●造次　急遽苟且の時即ち餓にしてかりそめの時。
- ●顚沛　傾覆流離の際即ち危くとり亂してゐる場合。
- ●終食之間　一度の食事を終

を終へる程の短い間。

語釋
・遽　及ぶと訓む。
・躬　躬行。

通釋　富と貴とは皆人の欲する所のものであるけれども、富貴を得る正當なる道即ち仁の道を以て得たのでなければ君子は安んじて、その富貴の處に居らないのである。又、貧と賤とは人のいやがる所のものであるけれども、貧賤をうる道即ち不仁の道を以て得たのでなければ、その貧賤の處に安んじて居て、決してそこを去らないのである。君子にしてもし仁を去つたならば、いづくに君子たる名をなすことを得よう。君子は一度の食事をする程の僅かの間でも仁に違ふことがない。いかに急な場合でも必ず仁に於てして離れることなく、いかに危くとりみだしたやうな場合でも必ず仁に於てして決して之れに離れることはない。」と、孔子がいはれた。

七　恥躬之不逮也

子曰古者言之不出恥躬之不逮也　（里仁）

訓點　子曰、古者言之不レ出、恥躬之不レ逮也。

通釋　古人が妄りに言を發しなかつたのは、躬行がその言に及ばないで空言に終ることを恥ぢたからである。

注意　「言之不出」に於て「言」は客語であるから、普通ならば「不レ出レ言」といふべきであるが、この場合、「言」を強めるがために上においたから、「之」の一字を入れて説明語（不出）を下においたのである。

語釋
・訥　訥辯。
・敏　敏捷、事を行ふの敏速なこと。

八　訥於言

子曰君子欲訥於言而敏於行　（里仁）

訓點　子曰、君子欲レ訥於言、而敏於行。

通釋　君子は言葉數を寡くして、行を敏速にせんことを欲する。人は兎角言葉數が多くて、行がこれに及ばないものであるから、かやうに戒められたのである。

九　女與回也孰愈

子謂子貢曰女與回也孰愈。對曰賜也何敢望回。回也聞一以知十

語釋
- ●女　汝。
- ●愈　まさる。
- ●望　比較する意。
- ●賜　子貢の名。
- ●回　顏淵。

賜也聞一以知二子曰弗如也吾與汝弗如也　（公冶長）

訓點　子謂子貢曰、女與回也孰愈。對曰賜也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二。子曰弗如也。吾與汝弗如也。

通釋　孔子がある時子貢に「汝と顏回とどちらが學才がまさつてゐるか。」といはれた。すると子貢は之れに對して云つた。「私はどうして敢て顏回と比較することが出來ませうか。とても〳〵及ぶ所でありませぬ。顏回は一つの理を聞くと十の理を悟ることが出來ますが、私は一をきいて、やうやく二を知る位のものです。」と。そこで孔子は「いかにも汝の云ふ通り、汝は回に及ばない。自分も亦顏回には及ばないのである。」と云はれた。

參考　吾與女弗如也。と訓む説もある。これに從へば「自分は汝が自ら知る明があつて、回に及ばないと云つたは誠に尤もであるとゆるす」といふこととなる。この説でも、意味はよく通ずる。

語釋
- ●宰予　孔子の弟子で辯辭の巧みな人であつた。
- ●晝寢　寢は寢室、晝間寢室に入つてゐたのである。
- ●朽木　くちた木。
- ●雕　彫刻を施す。
- ●糞土　「ハキダメの土」

注意　「對」は目上の人に答へる時に用ひるのである。

一〇　宰予晝寢

宰予晝寢。子曰。朽木不可雕也。糞土之牆不可杇也。於予與何誅。子曰。始吾於人也。聽其言而信其行。今吾於人也。聽其言而觀其行。於予與改是。　（公冶長）

訓點　宰予晝寢。子曰。朽木不可雕也。糞土之牆不可杇也。於予與何誅。子曰。始吾於人也。聽其言而信其行。今吾於人也。聽其言而觀其行。於予與改是。

通釋　宰予がある日、書間寢室に入つてねて居つた。孔子がこれを見て、その餘りに怠惰なるを歎息して云はれるには「朽ちた木は忽ちに壞れるから彫刻を施すことは出來ぬ。又、かの糞土の牆はどんなに上塗をしても、すぐに剝げ落ちるから、粉

飾を施すことは出來ない。それと同じやうに心の腐つてゐる者には教育を施すことは出來ない。宰予の如きは實に朽木糞土の牆にも比すべき人間で、濟度すべからざるものであるから、今更ら何を責めようか、責め甲斐のない人間である。」と。孔子は更に語をついで云はれた。「自分はこれまで、人に接して、その言葉を聞くだけでその人の行もまさにかくあるべしと信じてゐた。しかるに今後自分は人の言ふ所を聽いただけではその人の行を信ずることが出來ないやうになつた。必ずその言を聽いた上、なほその行を觀て、その言行が一致してゐるか否かを確めるやうになつた。かく人を觀る見方の變つたのはこれ全く宰予の此の行からである。」といつて深く宰予を責められた。

不潔の土。
●朽「コテ」でぬること。
●誅責める。
●觀よく注意して見る。

語釋
●不遷怒俗にいふ「ヤツアリタ」をしないこと。
●短命顏回は四十二で卒した。
●今也則亡顏回は今は世になしといふ意。

一一　弟子孰爲好學

哀公問弟子孰爲好學孔子對曰有顏回者好學不遷怒不貳過不幸短命死矣今也則亡未聞好學者也

（雍也）

語釋
●簞食（タンシ）簞は竹であんだ飯を入れる器。

哀公問。弟子孰爲好學。孔子對曰、有顏回者好學、不遷怒、不貳過。不幸短命死矣、今也則亡、未聞好學者也。

通釋　魯の君、哀公がある時孔子に向つて「あなたの弟子の中で、誰が一番學問好きであるか。」と尋ねられた。すると「私の弟子に顏回といふ者がありまして、大層學問好きで、「ヤツアタリ」をするやうなこともなく、又過を重ねるやうなこともせず、實に立派な人物でありましたが、不幸にも短命で死んで今は早亡き人となりました。この他に眞に學問を好むといふ程のものは見當りませぬ。」と。對へられた。

一二　賢哉回也

子曰賢哉回也一簞食一瓢飲在陋巷人不堪其憂回也不改其樂

（雍也）

訓點　子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不

●瓢飲　瓢は「フクベ」、飲は飲物、
●陋巷　狭くきたない街

改其樂賢哉回也。

通釋 孔子が顔回をほめて云はれるには、「顔回はなんとまあ賢い人であるよ。平生食する所のものは僅に一簞の飯飲む所は僅に一瓢の飲物にすぎず、その上、住んで居る所は狭くきたない小路である。他人ならばとてもそんな貧乏生活には堪へられないであらうが、顔回は一向平氣なもので、聖賢の道を樂しんでゐる。なんとまあ賢いことであるよ。」と。

注意 「賢哉回也」を始めと終りとに、二度重ねて云はれたのは回を讃美することの切なるためである。

一三　是吾憂也

子曰德之不修學之不講聞義不能徙不善不能改是吾憂也

訓點 子曰、德之不修、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也。

（述而）

語釋
●爾　汝。
●三軍　一軍は一萬二千五百人であるが、こゝは只大軍の義。

通釋 孔子のたまはく「德を修めず、學問を講習せず、正しい道を聞いても徙ることが出來ず、不善の行があつても改めることの出來ないのは、自分の常に憂へてゐる所である。」と。

注意 「德之不修、學之不講」の德と學とは共に客語であるから普通の文章の成分の順序から云へば「不修德、不講學」とすべきであるが、こゝは德と學とを強く指定せんがために成分の位置を倒にしたのである。

一四　用之則行

子謂顔淵曰用之則行舍之則藏唯我與爾有是夫子路曰子行三軍則誰與子曰暴虎馮河死而無悔者吾不與也必也臨事而懼好謀而成者也

（述而）

訓點 子謂顔淵曰、用之則行、舍之則藏。唯我與爾有是夫。子路曰、

子行三軍、則誰與。子曰、暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也。必也臨事而懼、好謀而成者也。

●暴虎馮河　虎を手打にし、河をかち渡りすることで血氣の勇にまかせて無鐵砲なことをすること。
●懼　つゝしみおそれること。
●成　其のことを成しとげる意。

通釋　ある時、孔子が顏淵に向つて「人君がもし己れを用ひてくれたならば、出て仕へて我が道を行ひ、己れを舍てて用ひてくれなかつたならば、藏れ、すべて出處進退が宜しきにかなふのは唯、我れと汝とあるのみであるわい」といつて、いたく顏淵をほめられた。時に子路が側に在つて孔子のこの語を聞くや、突如として孔子に向つて、「先生がもし大軍を率ゐて出陣し給ふやうのことがあつたならば誰と共になさるか。」といつて暗に、その時は己れを措いて他に人がないでしようとの意を含めて云つたのである。すると孔子は「かやうな時には、自分は虎を手打にし河を徒渉するやうな無鐵砲なことをして、死しても悔ゆることのないやうなものとはことを共にしないのである。必ずや事に當つて、おそれつゝしみ、謀を好んで、それを成しとぐるやうな人とことを共にするのである。」といつて、暗に子路の血氣の勇を戒められたのである。

一五　曾子有疾

曾子有疾召門弟子曰啓予足啓予手詩云戰戰兢兢如臨深淵如履薄氷而今而後吾知免夫小子

訓點　曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄氷。而今而後、吾知免夫小子。

通釋　曾子は孔門第一の孝行の人で、平素から身體に傷をつけないやうに深く戒めて居たのである。それで病氣で將に死なうとする時、門弟子を召していふには、「蒲團を開いて我が足を視よ、我が手を視よ、その足その手のどこにも傷の痕がないであらう。詩經に十分におそれつゝしんで、深い淵に臨んで落ちんことを恐れるが如く、薄い氷をふんで陷らんことを恐れるが如くするといつてあるやうに、自分は平素十分に注意した爲にかく少しの傷もなく父母の遺體を全うすることが出來たので

語釋
●啓　開く。
●詩　詩經小雅小旻篇。
●戰戰兢兢　おそれつゝしむ貌。
●臨深淵　深い淵にのぞむ落ちんことを恐れるのである。
●履薄氷　薄い氷をふむ、陷らんことをおそれるのである。
●而今而後　今日より後。

ある。で今日將に死なんとするに當つて不孝の罪を免れ得たことを知つて誠にうれしいことであるよ。弟子共よ。」

●小子　弟子。

語釋
●六尺之孤　十五才位の孤、古は二才半を一尺とした。こゝは幼少で父のない君を指す。
●百里之命　方百里は公侯の領地、命は政令。
●大節　重大の事件。
●與

一六　六尺之孤

曾子曰可以託六尺之孤可以寄百里之命臨大節而不可奪也君子人與君子人也　（泰伯）

訓點　曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與、君子人也。

通釋　曾子が曰ふに、「こゝにある一人の人があつて、十五才位の父のない幼君を安んじて委託することが出來、方百里の大國の政事を委せることが出來、又何か國家の重大事件が起つた場合にその難局に當つて、よく其の節義を守つて志を變へないならば、その人は君子と云つてよいか、實に君子と云ふべきである。」と。

●疑　疑の辭。
●也　決定の辭。

語釋
●士　學問して智識ある者。
●弘毅　器量が大きくて強いこと。

一七　士不可以不弘毅

曾子曰士不可以不弘毅任重而道遠仁以爲己任不亦重乎死而後已不亦遠乎　（泰伯）

訓點　曾子曰、士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎。

通釋　曾子が曰ふには、「學者たるものは、器量が寛弘で、堅忍持久の節操がなければならぬ。士たるものの負擔すべき任が重くて、行く道が遠いからである。さてその任とは仁をさして云ふのである。仁は人心の全德でそれを全うせんとするのであるから、その任たる亦重いではないか。此の重任を全うせんとするには、死して後已む覺悟を要するのであるから、その道程は亦遠いではないか。それ故に弘毅のものでなければ、到底之れに耐へられないのである。」と。

一八 譬如爲山

子曰譬如爲山未成一簣止吾止也譬如平地雖覆一簣進吾往也

（子罕）

訓點 子曰、譬如爲山、未成一簣止吾止也。譬如平地雖覆一簣進吾往也。

通釋 孔子が曰はれるには、「學者が學問をするのは、たとへば山を作るやうなものである。もう一籠の土を運べば山が完全に出來上るといふ時に、氣力が衰へて、それを運ぶことを止めるならば、それは自分自ら止めたので、そのためにこれ迄の努力も徒になるのである。又たとへば地面を平にするやうなものでたとひ一籠の土でも運んで低い所に覆すならば、それだけ仕事が進んだのである。これ即ち自分自らそれだけ進んだのである。かくして止まなかつたならば遂にはその功を成就することが出來るのである。學者の學に勉むる亦かくの如くなければならぬ。」と

參考 書經にある、「九仞功虧二一簣一」といふも同じ意味である。

語釋 ●簣 「アジカ」、土を入れる籠。

一九 後世可畏

子曰後生可畏焉知來者之不如今也四十五十而無聞焉斯亦不足畏也已

（子罕）

訓點 子曰、後生可畏。焉知來者之不如今也、四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已。

通釋 孔子が曰はれるには、「後輩の年若いものどもは、なほ春秋に富み、氣力も旺盛であるから、努めて怠らなかつたならば、どんなにえらくなるかわからない。であるから年少者は輕んずる譯に行かぬ。其の將來が自分の今日の學德に及ばないといふことが、どうして分らうか、或は自分以上になるかも知れぬ。しかし若しその

語釋 ●後生 年少者、後輩といふに同じ。

ものが四十五十になつても、その令名が世に聞えない位であるならば、これ亦畏るゝに足らないのである。」とて、當に學ぶべき時に大に勉めるべきことを諭されたのである。

二〇　司馬牛問君子

司馬牛問君子子曰君子不憂不懼曰不憂不懼斯謂之君子矣乎子曰內省不疚夫何憂何懼　（顏淵）

訓點　司馬牛問ハ君子ヲ。子曰ク、君子ハ不レ憂ヘ不レ懼ル。曰ク、不レ憂ヘ不レ懼ル、斯レ謂ヒテ之ヲ君子ト矣乎ト。子曰ク、內ニ省ミテ不レ疚ラ、夫レ何ソ憂ヘ何カ懼レン。

通釋　司馬牛が孔子に君子とは如何なる人を申しますかと問うた。そこで孔子は答へて、「君子は決して憂へもせず、又懼れもせないものである。」と仰せられた。そこで牛は、又重ねて問うた。「唯憂へず懼れざるのみで君子と申されますか。」と。孔子

語釋
- 疚「ヤマシ」と訓ず

これに答へて云はれるには、「君子たるものの行は公明正大であるから、心に反省してみて、毫もうしろぐらい所がない。それ故、何も心に憂へ懼れる所はない。」と、蓋し、この時、牛はその兄が亂をなさんとしてゐたから、牛は常にこれを憂へてゐたので、孔子は牛に心配させまいと思うてかく云はれたのである。

二一　君君臣臣

齊景公問政於孔子孔子對曰君君臣臣父父子子曰善哉信如君不君臣不臣父不父子不子雖有粟吾得而食諸　（顏淵）

訓點　齊景公問ヒテ政ヲ於孔子ニ。孔子對ヒテ曰ク、君君タリ、臣臣タリ、父父タリ、子子タリト。曰ク、善哉、信ニシ如君不レ君タラ、臣不レ臣タラ、父不レ父タラ、子不レ子タラ、雖モ有リトレ粟ヲ、吾レ得テ而食ハ諸。

通釋　齊の景公が政道を孔子に問うた。孔子はそれに對へて、「政の道は外ではない君はよく君たる道を盡し、臣はよく臣たる道を盡し、父はよく父たる道を盡し、子

語釋
- 信「マコトニ」。
- 如「モシ」。
- 粟 米穀といふ程の意。

はよく子たる道を盡す。これが政治の根本であります。」と曰はれた。公はその基をきいて大いに喜び、「誠によい言葉である。まことにもし、君が君の道を守らず、臣が臣の道を守らず、父が父の道を守らず、子が子の道を守らなかつたならば、どうして國を治めることが出來ようか。たとひ多くの米穀があつても、これを食ふことは出來ない。」と云はれた。

注意　「諸」は「之乎」の合字であるから、「食諸」は「食之乎」と同じであることを忘れてはならぬ。

二二　政者正也

季康子問政於孔子孔子對曰政者正也子帥以正孰敢不正

（顏淵）

訓點　季康子問ヒテ政ヲ於孔子ニ。孔子對ヘテ曰ク、政者正也ナリ。子帥ヒテ以テ正シクセバ、孰レカ敢ヘテ不ラン正シカラ。

語釋
- 季康子　魯の上卿。

語釋
- 君子　こゝは位にある人。
- 小人　人民。
- 尙　「加フ」と訓む。
- 偃　フス

通釋　季康子が政を孔子に問うたところが、孔子はそれに對へて、「政とは即ち正といふ意である。あなたが、衆に先んじて行を正しくしたならば、下人民は皆あなたの行に倣つて誰れか正しくないものがあらうか。」と云はれた。

注意　「敢不正」は反語であつて、「敢テ正シカラザランヤ」と讀み、「不敢正」は「敢テ正シカラズ」と讀むことに注意せよ。

二三　君子之德風也

季康子問政於孔子曰如殺無道以就有道何如孔子對曰子爲政焉用殺子欲善而民善矣君子之德風也小人之德草也草尙之風必偃

（顏淵）

訓點　季康子問ヒテ政ヲ於孔子ニ曰ク、如シ殺シテ無道ヲ以テ就カバ有道ニ、何如ト。孔子對ヘテ曰ク、子爲レ政ニ、焉ンゾ用ヒン殺シ。子欲スレバ善ナリ而民善ナリ矣。君子之德ハ風也。小人之德ハ草也。草

尙之風必偃

通釋 秀康子が政道を孔子に問うて云ふには、「もし無道の惡人を殺して、有道なる善人につき親しむやうにしたらどうであらうか。」と。孔子はこれに對へて、「あなたが政をなすのに、何も人を殺す必要はない。あなたがもし自ら卒先して善を欲せられたならば、下人民も亦それに倣つて善に向ひます。君子の德は譬へば風のやうなもので小人の德は草のやうなものである。風を草の上に加へると草は風に隨つてなびきふすやうに、下人民は上人君の德に化せられるものである。」といはれた。

二四 知者不失人

子曰、可與言、而不與之言、失人、不可與言、而與之言、失言、知者不失人、亦不失言、

（衛靈公）

訓點 子曰、可與言而不與之言、失人、不可與言而與之言、失言。知者不失人、亦不失言。

通釋 孔子曰く「こゝに共に語るべき人、卽ち學德のすぐれた人があるとする。もし自分がその人と語ることをしなければ、これ人を見そこなひてその賢人を失ふこととなる。又もしこれに反して、不賢で共に語るべからざる人と語つたならば、言を失ふこととなる。（我が言は何の役にも立たないから）知者は語るべき人と、語るべからざる人とをよく察知することが出來るから、人を見そこなふこともなく、又言を失ふこともしない。」と。

二五 吾末如之何已矣

子曰不曰如之何如之何者吾末如之何也已矣

（衛靈公）

訓點 子曰、不曰如之何、如之何者、吾末如之何也已矣。

通釋 孔子曰く、「人はことをするに當つて、これをどうしたらよいであらうかと、深く考へて、もし少しでも意に解せないことがある時には、これを人に質し問ふべ

きである。しかるに深く考へもせず、質し問ふこともしないやうなものは、自分はこれをどうともすることが出來ない。」と、以て深く學者を戒められたのである。

注意　「末如之何也」の「末」は「ナシ」と訓む。「未」と混じてはならぬ。

二六　君子病無能

子曰君子病無能焉不病人之不己知也　（衛靈公）

訓點　子曰、君子、病無能焉。不病人之不己知也

通釋　孔子曰く、「君子は自分に才能のないことを憂へて、人が自分を知つてくれないことを憂へない。」と、蓋し人が自分を知ると知らないとは自分にとつて毫も損益する所がないからである。

注意　「不己知」に於て「己」は客語で「知」は説明語である。普通ならば、客語は説明語の下に來るべきであるが、この句は打消の句で、且つ客語が代名詞であるから、客語と説明語との位置を倒にしたのである。

語釋
- 一言　片言の意。
- 恕　心の如しといふ會意文字で、人の心も亦我が心の如くであらうといふ思ひやりの心。

心の如し

二七　其恕乎

子貢問曰有一言而可以終身行之者乎子曰其恕乎己所不欲勿施於人　（衛靈公）

訓點　子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。

通釋　子貢は孔子に向つて、「唯一言で終身、行つてよろしいものが御ざいますか。」と問うたところ、孔子はそれに答へて、「それは恕といふ一言であらう。恕といふ語は思ひやりといふ意で、己の心に欲しないことは、人も亦望まないものであるから、之を人に施し及ぼさないやうにすべきである。」と云はれた。

二八　不如學也

子曰吾嘗終日不食終夜不寢以思無益不如學也　（衛靈公）

訓點　子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思無益、不如學也。

通釋　孔子が云はれるには「自分は嘗て終日食はず、終夜寢ないで考へたが、遂に何の益もなかつた。やはり學ぶ方がましである。」と。

二九　割鷄焉用牛刀

子之武城聞絃歌之聲夫子莞爾而笑曰割鷄焉用牛刀子游對曰昔者偃也聞諸夫子曰君子學道則愛人小人學道則易使也子曰二三子偃之言是也前言戲之耳　（陽貨）

訓點　子之武城、聞絃歌之聲。夫子莞爾而笑曰、割鷄焉用牛刀。子游對曰、昔者偃也、聞諸夫子曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也。子曰、二三子。偃之言是也。前言戲之耳。

語釋
- 之　ユクと訓す。
- 武城　魯の邑の名、時に子游、武城の宰なり。
- 絃歌　樂器に合せて詩を歌ふこと。
- 莞爾　につこりと笑ふ貌。
- 割鷄　鷄を料理すること。
- 焉　イヅクンゾと訓す。
- 偃　子游の名。
- 君子　こゝは在位の人をさす。
- 小人　被治者即ち人民

通釋　孔子は或日門人をつれて武城に行かれた。その時邑の人々がこゝそこで樂器に合せて詩を歌つてゐる聲を聞かれた。武城は門人子游の治めてゐる邑である。そこで孔子はにつこりと笑つて「鷄のやうな小さな鳥を料理するのに、何も牛をさくやうな大きな庖刀を用ひることはいらぬ。」と云はれた。思ふにこれは武城のやうな小邑を治めるのに禮樂のやうな大道を用ひることと、こんな小邑を治めるのに、子游のやうな大才を用ひるのを惜むといふ意を兼ねていはれたのである。しかるに子游は小邑を治めるのに禮樂の必要がないといはれたやうに聞いたので、對へていふには「私は嘗て先生から承つたことがある。在位の人が道を學ぶと人民を愛し、人民が道を學ぶと、おとなしくなつて使ひやすくなると。それで自分は道を尊んで人民に禮樂を敎へてゐるのである。」と。孔子は子游の言を聞かれて門人共に向つていはれた。「汝等弟子どもよ、今偃がいつた言は誠に尤もな言葉である。自分がさきに云つた言葉は彼に戲れて云つたのである。決して誤解してはならぬ。」と。

三〇　鄙夫可與事君也與哉

子曰鄙夫可與事君也與哉其未得之也患得之既得之患失之苟患失之無所不至矣　（陽貨）

訓點 子曰、鄙夫可ニ與事ヲ君ニ也與哉。其未ダ得ルノ之ヲ也患ヒテ得ルコトヲ之ヲ。既ニ得レバ之ヲ患ヒテ失ハンコトヲ之ヲ。苟モ患ヒテ失ハンコトヲ之ヲ、無シ所ル不ル至ラ矣。

通釋 孔子がいはれるには、「心のいやしい者とは共に肩を比べて君に事へることが出來ようか、出來ない。なぜなれば、鄙夫は道義の觀念がなく只利益をうることにのみ汲々とし、まだ利を得ない時には如何にしてこれをうべきかに腐心し、既に利を得れば、之れを失ひはしないかとのみ心配する。苟も之れを失ふことを心配すると、いかなることでもしないことはない。」と。即ちそのためには同僚を陷れることもするであらう。又上官にこびへつらふこともするであらう。その他自分の地位や爵祿を保つためにはどんな手段でも選ぶ所がないであらう。

語釋
- 鄙夫　心の卑しい男。
- 無所不至　爲さゞる所なき意。

三一　女子與小人

子曰唯女子與小人爲難養也近之則不孫遠之則怨　（陽貨）

訓點 子曰、唯女子與ヒ小人ハ爲ル難シト養ヒ也近ヅクレバ之ヲ則チ不孫ナリ。遠ザクレバ之ヲ則チ怨ム。

通釋 孔子は「唯女子と小人とは實に取扱ひにくいものである。之れを可愛がつてやると無禮な行をなすやうになるし、之れを遠ざけうとんずると必ず怨みをいだくやうになるものだ。かやうな譯で實に取扱ひにくいものだ。」と云はれた。

三二　君子不施其親

周公謂魯公曰君子不施其親不使大臣怨乎不以故舊無大故則不棄也無求備於一人　（微子）

訓點 周公謂ヒテ魯公ニ曰、君子ハ不ル施ヒテ其ノ親ヲ。不ル使メ大臣ヲシテ怨ミ乎不ルヒトシテ以ヒ。故舊無ケレバ

語釋
- 女子　妻妾。
- 小人　奴僕。
- 養　取扱ふ。
- 近　近づけて愛する
- 不孫　不遜。
- 遠　遠ざけうとんずる。
- 周公　名は旦、幼主成王を輔佐す。

（魯公　周公の子伯禽。
●施　棄ツと訓む。
●以　用フと訓む。
●大故　惡逆の義。

大故則不棄也。無求備於一人。

通釋　周公、その子伯禽が魯公に封ぜられて魯に赴く時、之を戒めて、「君子の德を備へた一國の君が國を治めるには、その國と休戚を同じうする親戚と親しんで決してこれを見棄てるやうなことなく、又大臣が位に居る間は、十分にこれを信任してその言を用ひられないことを以て君を怨ましめるやうなことをせず、又舊いなじみの者は大なる惡逆の行がなければ、之れを見棄るやうなことをせず、又人を用ひるには一人のものにすべてのことが備はるやうにといふやうな無理な注文をしてはならない。」と云はれた。

三三　見危致命

子張曰士見危致命見得思義祭思敬喪思哀其可已矣　（子張）

語釋
●致命　命をなげだす。

訓點　子張曰、士見危致命、見得思義、祭思敬、喪思哀、其可已矣。

通釋　子張がいふには「士たる者は君父に危難のある場合には己の命をなげ出すことをも辭せず、利を得るに當つては、これを得ることが義にかなつてゐるかどうかを考へ、又神を祭るときには十分に敬をつくし、喪に居る時は哀しみの情をつくさんことを思ふ。この四つのことが出來れば、士と稱してよいのである。」と。

三四　日知其所亡

子夏曰日知其所亡月無忘其所能可謂好學也已矣　（子張）

語釋
●亡　無なり。自分のまだ知らない所

訓點　子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣。

通釋　子夏が云ふには「學問をする者は日々自分のまだ知らないことを知り、一方では自分の已に能くする所を忘れることなく、進みて已むことがなかつたならば、その智識は日に月に進歩するであらう。かやうな人は眞に學を好む士といつてよろしい。」と。

注意　「日知……月無……」は前にも云つた通り互文法であつて、日々月々といふやうな意味である。

第五篇　孟子選

孟子七篇、孟軻の撰述したるものにして、性善を本として仁義を説き、王道を唱へ功利を退け異端を排するなど、世道人心に益する所多く、殊に文章遒勁なり。

一　何必曰利

（卷一、梁惠王章句上）

孟子見梁惠王王曰叟不遠千里而來亦將有以利吾國乎孟子對曰王何必曰利亦有仁義而已矣王曰何以利吾國大夫曰何以利吾家士庶人曰何以利吾身上下交征利而國危矣萬乘之國弑其君者必千乘之家千乘之國弑其君者必百乘之家萬取千焉千取百焉不爲不多矣苟爲後義而先利不奪不饜未有仁而遺其親者也未有義而後其君者也王亦曰仁義而已矣何必曰利

語釋

●叟　長老の稱、孟子を尊稱したもの

●亦　古の聖王に對していふ。即ち古の聖王皆仁義を以て國を治めた今王も亦當に義を以てせらるべきなりとの意。

●大夫　國宰。

●征　取る意。

●萬乘之國　「萬乘」は兵車萬乘を出す程の大國、當時齊や楚の國のやうなもの。

●千乘之家　萬乘の國の卿大夫。

●百乘之家　千乘の國の大夫

●苟　マコトにと訓ず

（大正九、東北帝大、工專）

訓點　孟子見梁惠王。王曰叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎。孟子對曰、王何必曰利、亦有仁義而已矣。王曰何以利吾國。大夫曰何以利吾家。士庶人曰何以利吾身。上下交征利而國危矣。萬乘之國、弑其君者、必千乘之家。千乘之國、弑其君者、必百乘之家。萬取千焉、千取百焉、不爲不多矣。苟爲後義而先利、不奪不饜、未有仁而遺其親者也。未有義而後其君者也。王亦曰仁義而已矣。何必曰利。

通釋　孟子が梁の惠王に見えた。惠王がいふには「あなたは千里の道も遠しとせられないで遙々御出で下さつたが、あなたも亦他の人々と同じやうに私の國の利益をお謀り下さるでせうか。」と。すると孟子は對へて「王樣はどうして利益といふことをいふ必要がありませうか。古の聖王のやうに王樣も亦唯仁義を行ふにあるのみです。もし王は何を以て自分の國を利せようかと思ひ、大夫は何を以て吾が家を利せ

ようかと思ひ、士庶人は何を以て吾が身を利せようかと思ふやうに、上下の者が、互に利益を爭ひあつたならば、國家は危くなるのです。萬乘の大國に於て其の主君を弑する者は、必ずその臣下たる卿大夫でありませう。千乘の國に於て其の君を弑する者は必ずその大夫でありませう。一體萬乘の國に仕へてゐてその十分の一なる千乘の祿を食み、千乘の國に仕へてゐてその十分の一なる百乘の祿をうけてゐるといふことは、決して少い俸祿ではないのでありますが、まことに正義を輕んじて、只利欲にのみ走るといふと、悉く奪つてしまはないとあき足らないものです。まだこれまで仁にしてその親をすてたものはなく、義にして其の君をあとまはしにした者(疎略にした者)はないのであります。だから王樣も亦古聖王の如くに唯仁義を云はれたらよろしいので、利益のことをいはれる必要はありませぬ。」といつた。

二　以五十歩笑百歩

王好戰請以戰喩塡然鼓之兵及既接棄甲曳兵而走或百歩而後

（同　上）

止或五十歩而後止以五十歩笑百歩則何如曰不可直不百歩耳是亦走也（同上）（大正三海兵）

訓點　王好戰。請以戰喩。塡然鼓之。兵及既接。棄甲曳兵而走。或百歩而後止。或五十歩而後止。以五十歩笑百歩。則何如。曰不可。直不百歩耳。是亦走也。

通釋　王樣は戰爭がおすきであるから、戰の事を喩にひいて申しませう。太鼓の音で愈々戰鬪が始まつて、兩軍が兵刄を交へて戰ふうち、一方が旗色わるく遂に鎧をすて刀を引きずつて逃げ走り、その中、或者は五十歩にけてふみ止まり、或者は百歩にけてふみ止まつたとする、その場合に、五十歩逃げたものが、百歩にけた者を卑怯者だといつて笑つたらどうでせう。と孟子がいふと、王樣は「それはいけない。五十歩逃げた者は只百歩逃げなかつたといふだけで、敗走したといふ點に於ては同樣である。」といはれた。

語釋
- ●王　梁の惠王を指す
- ●塡然　太鼓の音。戰は初に鼓を擊ちて戰鬪を開始し、金をうちて戰鬪を終止するのであるから、塡然として之に鼓すといふのである
- ●甲兵　甲は鎧、兵は刀。

由ニ倣

語釋
●油然　雲の湧き出づるさま。
●沛然　雨の盛に降るさま。
●浡然　盛に興るさま、浡は勃に同じ。
●人牧　人君。
●由　は猶に同じ

注意　「五十歩百歩」といふ語の出典である。餘り甚しい差のないことにいふ。

三　王知夫苗乎　（同　上）

王知夫苗乎七八月之間旱則苗槁矣天油然作雲沛然下雨則苗浡然興之矣其如是孰能禦之今夫天下之人牧未有不嗜殺人者也如有不嗜殺人者則天下之民皆引領而望之矣誠如是也民歸之由水之就下沛然誰能禦之

訓點　王知夫苗乎。七八月之間旱則苗槁矣。天油然作雲、沛然下雨、則苗浡然興之矣。其如是、孰能禦之。今夫天下之人牧、未有不嗜殺人者也。如有不嗜殺人者、則天下之民、皆引領而望之矣。誠如是也、民歸之、由水之就下、沛然、誰能禦之。

通釋　王様はあの苗を御存じですか。七八月頃にひでりがつゞくと苗は萎れてしまひます。が其時、天がむら〳〵と黒雲を起し、雨が盛んに降つて來ると、苗は勢よく起つて來ます。かうなると、誰もその起上らうとする勢をとゞめることは出來ません。これと同じく、今日天下の人君の中に人を殺すことを好まないものはありませぬが、もしその中に一人でも人を殺すことを好まないものがありましたならば、天下の人民は皆頸を長くしてその君を慕ひ望むでせう。誠にこのやうであつたならば民のその君に歸服することは、丁度水が低きに流れるやうなもので誰もそれをふせぎとゞめることは出來ませぬ。

注意　この文は孟子が梁の襄王に對へた言葉の一節であつて、もし今の世に仁君が出たならば天下の民皆、歸服するであらうといふことをいつたのである。

語釋
●泰山　支那五嶽の一五嶽とは泰山

四　不爲也非不能也　（同　上）

王曰不爲者與不能者之形何以異曰挾泰山以超北海語人曰我不能是誠不能也爲長者折枝語人曰我不能是不爲也非不能也

（大正五、海軍機關）

（東嶽）衡山（南嶽）華山（西嶽）恒山（北嶽）嵩山（中央）の五つをいふ。
●北海　渤海。
●長者　目上の人。
●折枝　木の枝を折る。一説に按摩をすること。枝は肢である。四肢の關節を折りまげること。

語釋
●恒産　民の常に以て生くべき業。「定の生業。
●恒心　人の常にもつてゐる善心。
●放辟邪侈　恒産のない人民は安心して自分の家業を營むことが出來ず、偶金錢をうると直にこれを消費し遂には不正の行をして法に觸れるやうになるをいふ。

訓點　王曰、不爲者與不能者之形、何以異。曰、挾泰山以超北海、語人曰、我不能、是誠不能也。爲長者折枝、語人曰、我不能、是不爲也、非不能也。

通釋　王が「しないのと、出來ないのとはどういふ風にちがふのか。」といはれると孟子は「泰山を脇にはさんで、北海を越えようとし、人に語つてそんなことは自分には出來ないといふのは、これは誠に出來ないのであります。又長者のために枝を折ることについて、人に語つて自分にはそんなことは出來ないといふのは、これはしないのであつて、出來ないのではない。」と對へた。

五　無恒産者無恒心

無恒産而有恒心者惟士爲能若民則無恒産因無恒心苟無恒心放辟邪侈無不爲已

訓點　無恒産而有恒心者、惟士爲能、若民則無恒産、因無恒心。苟無恒心、放辟邪侈、無不爲已。

通釋　一定の産業がなくして常にかはらぬ善心を持つてゐることは、たゞ學問のある人だけが出來ることである。一般人民の如きは、一定の産業がない時には、恒心もない。かりそめにも恒心がなかつたならば、どんなむちやなことでもしないことはない。

六　得道者多助

（公孫丑章句下）

得道者多助失道者寡助寡助之至親戚畔之多助之至天下順之以天下之所順攻親戚之所畔故君子有不戰戰必勝矣。

（明治四五、東京高師）

訓點　得道者多助、失道者寡助、寡助之至、親戚畔之、多助之至、天

下順之以天下之所順攻親戚之所畔故君子有不戰戰必勝矣

通釋 正しい道を得て之を行ふ者は助が多く、之に反して道を失つた無道の者は助が少い。助の少い至極は親戚迄も之にそむき、助の多き至極は天下中の者がすべて之に從ふものである。天下の人がすべて從ふやうな勢を以て、親戚までもそむく程のものを攻めるのであるからして、君子は戰はなければそれまでだが、苟も戰つたならば必ず勝つのである。

參考 故君子有不戰戰必勝矣の朱子の註に、「不戰則已。戰則必勝。」とあるから、右のやうに解いておいたのである。

七　此則寡人之罪也　（同　上）

孟子之平陸謂其大夫曰子之持戟之士一日而三失伍則去之否乎曰不待三然則子之失伍也亦多矣凶年饑歲子之民老羸轉於溝壑壯者散而之四方者幾千人矣曰非距心之所得爲也曰今有

語釋
- ●平陸　齊の國の邑。
- ●大夫　邑宰。
- ●持戟之士　戟を持つて戰陣に立つ兵士。
- ●去之　之を殺すこと。
- ●老羸　年とつて弱いもの。
- ●轉於溝壑　餓死して葬ることが出來ず、其の尸を溝や谷にすてること。
- ●距心　大夫の名。
- ●牧之　之を養ふこと。
- ●牧　牧場。
- ●芻　草。
- ●寡人　諸侯の謙稱、德

受人之牛羊而爲之牧之者則必爲之求牧與芻矣求牧與芻而不得則反諸其人乎抑亦立而視其死與曰此則距心之罪也他日見於王曰王之爲都者臣知五人焉知其罪者惟孔距心爲王誦之王曰此則寡人之罪也

訓讀點 孟子之平陸謂其大夫曰子之持戟之士一日而三失伍則去之否乎曰不待三然則子之失伍也亦多矣凶年饑歲子之民老羸轉於溝壑壯者散而之四方者幾千人矣曰非此距心之所得爲也曰今有受人之牛羊而爲之牧之者則必爲之求牧與芻矣求牧與芻而不得則反諸其人乎抑亦立而視其死與曰此則距心之罪也他日見於王曰王之爲都者臣知五人焉知其罪者惟孔距心爲王誦之王曰此則寡人之罪也

の寡い人の意
●爲都　邑を治めること　邑に先君の廟のあるものは特に都といふのである。

語釋　孟子が齊の邑平陸に行つて、其の大夫に云ふには、「あなたの率ゐる所の兵卒が一日に三度も列を亂したならば、之を殺しますかどうですか。」と大夫がこれに答へていふには、「三度はおろか、一度でも二度でもこれを殺してしまふ。」と。孟子がいふには、「それならば、あなたの位を失ふこと（官吏が職責を全うしないことは、丁度兵卒の伍を失ふやうなものであるから、かやうにいつたのである）も亦多い。凶年饑歲になると、あなたの國民の老いて衰へてゐるものは餓死しても、葬ることが出來ないから、それを溝壑にすて、若い者は四方にちり〴〵になつて行つてしまふものが何千人あるかわからない程澤山にある。これ即ちあなたが其職を完うしないのではないか。」と。孟子のこと言を聞いた大夫は、「それは王樣の政事がわるいので、私のどうすることも出來ないことである。」と答へたので、孟子は又重ねていふには、「たとへば今こゝに他人の牛羊を託せられて、これを飼養するものがあるとする、その人は必ずその牛羊のために牧場と牧草とを求めるでせう。もしこれを求めて得られない時には、その人は牛羊をその持主にかへすであらうか、それとも亦立つて其の牛羊の死ぬるのを視てゐるでせうか。」といつたので、大夫は「あゝこれは實に自分の罪である。」といつて深く自ら責めた。後日孟子が齊王に見えていふには「私は王樣の家來で、都を治めてゐるもの五人を知つてゐますが、其の中で、眞に自分の罪を知つてゐるものは唯孔距心だけである。」といつて、さきに孔距心と語つた所を言つて王に諷する所があつた。王はその罪の本は自分に在ることを知つて、「あゝこれは自分の罪であつて、孔距心の罪ではない。」といつた。

語釋
●古之君子　眞の君子。
●今之君子　眞の君子ではない。
●辭　口實。

八　古之君子過則改之　（同　上）

古之君子過則改之今之君子過則順之古之君子其過也如日月之食民皆見之及其更也民皆仰之今之君子豈徒順之又從而爲之辭

（大正元、海兵）

訓點　古之君子、過則改之。今之君子、過則順之。古之君子、其過也、如日月之食、民皆見之。及其更也、民皆仰之。今之君子、豈徒順之、

之、又從而爲之辭

通釋　古の君子は何か過があるとすぐに之を改めたが、今の君子は過があつても之を改めることをせず、過つたまゝでそれを押通して行かうとする。古の君子の過は丁度　日蝕や月蝕のやうなものであつて、人民が皆之を見るが、一旦之を改めると人民は皆之を仰ぎ尊ぶのである。ところが今の君子はたゞその過に從つてそれを遂行するばかりでなく、又色々と口實を設けて自分の非を飾らうとするのである。

注意　「豈たゞに之に順ふのみならんや。」とよむ、呼應に注意せよ。

九　大丈夫

（滕文公章句下）

景春曰、公孫衍・張儀、豈不誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼、安居而天下熄。孟子曰、是焉得爲大丈夫乎。子未學禮乎。丈夫之冠也、父子之嫁也、母命之往送之門、戒之曰、往之女家、必敬必戒、無違夫子。以順爲正者、妾婦之道也。居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、得志、與民由之、不得志、獨行其道。富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈。此之謂大丈夫。

語釋
- 景春　齊の人。
- 公孫衍・張儀　共に魏の人で、所謂合從連衡の說を爲した人である。

訓點　景春曰、公孫衍・張儀、豈不誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼、安居而天下熄。孟子曰、是焉得爲大丈夫乎。子未學禮乎。丈夫之冠也、父命之、女子之嫁也、母命之。往送之門、戒之曰、往之女家、必敬必戒、無違。夫子。以順爲正者、妾婦之道也。居天下之廣居、立天下之正位、行天下之大道、得志、與民由之、不得志、獨行其道。富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈。此之謂大丈夫。

通釋　景春が、「公孫衍・張儀の二人は、なんと眞の大丈夫と稱すべきものではないか。一たび怒つて連衡の策を行ふと、諸侯は、それをおそれ、又、彼等が、その遊說を止めると、天下の兵亂は、火の消えたやうにやんで、天下は靜になる」といふ

- 安居　遊說を止めて、內に引つこんで居ること。
- 熄　火の消えるやうに、騷亂が鎭まること。
- 焉　イヅクンゾと訓む。
- 丈夫　男子。
- 冠　元服することで、嫁冠の命を發すること。
- 命　ゆくと訓む。
- 之　女家

女は汝なり、嫁ぎ先のこと。
●夫子　夫人。
●廣居　廣い居室で、仁に譬ふ。
●正位　正しい位で、禮に譬ふ。
●大道　大きな道で、義に譬ふ。
●得志　自分の信ずる道が用ひられて、天下の政を行ふべき地位に立つこと。

と、孟子が、「是が、どうして大丈夫と稱し得られるものであらうぞ。あなたは、まだ、禮を學んだことはありませぬか、男子が、元服する時には、父がそれを命じ、女子が嫁する時には、母が、これを命ずるのである。そして門まで之を見送つて、お前が、夫の家に嫁して行つたなら、必ず夫の意に違うてはならぬぞ。」といつて之を戒める。かやうに從順を旨とするのは、婦女子の道である。（公孫衍・張儀は、共にその時の君の意を迎合して、從横の術を說くもので、一つも義を以て君を匡すことは出來ない。只、强國に諛ひ、諸侯に阿つたゞけで、それは婦女子の旨とすべき、從順の道に似てゐる。だから、孟子は、公孫衍・張儀を妾婦の道に譬へたので、之では、どうして、大丈夫と云へようぞといふ意である）天下第一等の廣い居室（仁をいふ）に居り、天下第一等の正しい位（禮をいふ）に立ち、天下第一等の大きな道（義をいふ）を行つて、志を得た時には、その信ずる所の道を人に推し移して、民と共に、この大道をふみ行ひ、志を得なければ、その信ずる所の道を獨り守つて、その大道をふみ行つて行く。かういふ風であつたならば、富貴もその心を亂すことは出來ず、貧賤もその節操を移し易へさすことは出來ず、威武を以て臨んでも、其の

志を挫くことは出來ない。この樣なのを眞の大丈夫と謂ふべきである。」といつた。

注意　丈夫之冠也云々は妾婦の道をいはんがために對置しただけである。

一〇　何待來年　（同上）

孟子曰今有人日攘其鄰之雞者或告之曰是非君子之道曰請損之月攘一雞以待來年然後已如知其非義斯速已矣何待來年

訓點　孟子曰、今有ル人日ニ攘ム其ノ鄰之雞ヲ者ヲ、或ヒト告ゲテ之ニ曰ハク、是レ非ナリト君子之道ニ。曰ハク、請フ損シテ之ヲ月ニ攘ミ一雞ヲ、以テ待ツ來年ヲ。然ルトシテ後ニ已ム。如シ知シテ其ノ非ナルヲ義ニ、斯ニ速ニ已ム矣。何ソ待タン來年ヲ。

語釋
●損　減ずること。

通釋　孟子が言つた。「今こゝに一人の人があつて、其の人は毎日〳〵其の鄰家の鷄を盜んだ。で或人が之れに向つて、あなたの行爲は君子の道でないから、すぐにやめなさい。」と忠告すると、其の人は「今急にやめることは出來ないから、これから

はその數を減じて毎月一羽づゝを盜んで、來年になつて後すつかり已めることとしよう。」といつたとする。これは大いに誤つた考で、もし自分の行が正しくないと知つたならば、すぐさま止めるべきである。何も來年まで待つことはいらぬ。」と。

この文は孟子が例の巧妙な譬喩を用ひて、非を悟つたならば直に改めるべきものであるといふことを說いたのである。

一一　不仁者可與言哉　（離婁章句上）

孟子曰不仁者可與言哉安其危而利其菑樂其所以亡者不仁而可與言則何亡國敗家之有有孺子歌曰滄浪之水清兮可以濯我纓滄浪之水濁兮可以濯我足矣自取之也夫人必自侮然後人侮之家必自毀而後人毀之國必自伐而後人伐之太甲曰天作孽猶可違自作孽不可活此之謂也

（離婁上）

語釋

- 不仁者云々　不仁者はともに道を語るべきものでない。
- 安其危云々　仁者の危しとする所を安しとし禍の來るべきことを利あらんと誤解し、滅亡に至る道を樂しんで行つてゐる。
- 菑　災。
- 孺子　童子。
- 滄浪之水　滄浪は地名、水は川。
- 纓　冠の紐。
- 小子　孔子が門人を呼んでいつたのである。
- 自取之也　水自身の清濁が纓と足との別をとつたのである
- 太甲　書經の篇名。

訓點　孟子曰、不仁者可與言哉。安其危、而利其菑、樂其所以亡者。不仁而可與言、則何亡國敗家之有。有孺子歌曰、滄浪之水清兮、可以濯我纓、滄浪之水濁兮、可以濯我足。孔子曰、小子聽之、清斯濯纓、濁斯濯足矣。自取之也。夫人必自侮、然後人侮之、家必自毀、而後人毀之、國必自伐、而後人伐之。太甲曰、天作孽、猶可違、自作孽、不可活。此之謂也。

通釋　孟子がいふに不仁者は共に道を語ることの出來るものではない。彼等は仁者の危しとする所を安しと思ひ、禍の來るべきことを利とし、滅亡に至る道を樂しんで行つてゐる。誠に度し難きものである。しかしもし不仁者でも、諫に從ひ、善に從つてともに道を語る事が出來るなら、どうして國を亡したり、家を敗つたりすることがあらうや。童子が歌つていふには「滄浪の水が澄んだ時には我が纓を洗ふべく濁つた時には我が足を洗ふべし。」と。孔子がこの歌を聞いて、門人に向つて云ふ

には「お前方よくあの歌を聞きなさい。水が澄めば纓を洗はれ、濁れば足を洗はれるのは、これ皆水自身の清濁が纓と足とのちがひを生ずるのだ。」と。一體、人といふものは、必ず自ら侮つて後、人が之を侮り、家は必ず自ら破つて後、人が之を破り國は必ず自ら伐つて後、他の國が之を伐つのである。太甲に「天の作つた禍は、それでもまださけることが出來るが、自分から作つた禍は到底之を免れて生きてゐることは出來ぬ」といふのは、自ら取る意味をいつたものである。

一二　桀紂之失天下也　（同上）

孟子曰桀紂之失天下也失其民也失其民者失其心也得天下有道得其民斯得天下矣得其民有道得其心斯得民矣得其心有道所欲與之聚之所惡勿施爾也

語釋
●其心　民心也。
●與　タメニと讀む。
●桀紂　夏の桀王と殷の紂王、共に暴君である。

訓點　孟子曰、桀紂之失天下也、失其民也。失其民者、失其心也。得天下有道。得其民斯得天下矣。得其民有道。得其心斯得民矣。得其心有道。所欲與之聚之。所惡勿施爾也。

通釋　孟子が云つた。「夏の桀王、殷の紂王が天下を失つたのは其の人民を失つたのである。その人民を失ふとはその民の心を失つたのである。天下をうるには方法がある。その人民をえたならば天下が得られる。其の人民をうるには方法がある。その民の心をえたならば人民をうることが出來る。其の民の心をうるには方法がある。人民の欲する所は人民のために之を聚めてやり、人民のにくむ所は施さないやうにするのである。」と。

考　「所欲與之聚之」と讀んでもよろしい。そして「欲スルトコロヲ聚メテ之ヲ與ヘル」と解く。

一三　自暴自棄

孟子曰自暴者不可與有言也自棄者不可與有爲也言非禮義謂

之自暴也吾身不能居仁由義謂之自棄也仁人之安宅也義人之正路也曠安宅而弗居舍正路而不由哀哉　（大正四、東京高師）

語釋
- 暴　そこなふこと。
- 不可與有言　談ずるに足らぬこと。
- 安宅　安らかなる居所
- 曠　空にすること。

訓點　孟子曰、自暴者、不可與有言也。自棄者、不可與有爲也。言非禮義、謂之自暴也。吾身不能居仁由義、謂之自棄也。仁人之安宅也、義人之正路也。曠安宅而弗居、舍正路而不由、哀哉。

通釋　孟子曰く、自らそこなふ者は談ずるに足らないものである。又自ら身を棄てるものは、事を共にするに足らないものである。禮義の美たることを知らないでこれをそしるを自暴といひ、自分の身が仁に居り義（正義）によることの出來ぬのを自棄といふのである。仁は人の安らかな居所であり、義は人の踏むべき正しい道である。その安らかな居所をからにしてそこに住まはず、正しい道をすて、それに由らないのはなんと哀しむべきことではないか。

一四　誠者天之道也　（同　上）

孟子曰居下位而不獲於上民不可得而治也獲於上有道不信於友弗獲於上矣信於友有道事親弗悅弗信於友矣悅親有道反身不誠不悅於親矣誠身有道不明乎善不誠乎身矣是故誠者天之道也思誠者人之道也至誠而不動者未之有也不誠未有能動者也。

（明治三七、東京高師・四〇、北海農大）

語釋
- 不獲於上　上位の人に信用されないこと。
- 悅　心からよろこぶこと。
- 反身不誠　吾が身に反省して見て、善をなす心が充實してゐないこと。

訓點　孟子曰、居下位而不獲於上、民不可得而治也。獲於上有道。不信於友、弗獲於上矣。信於友有道。事親弗悅、弗信於友矣。悅親有道。反身不誠、不悅於親矣。誠身有道。不明乎善、不誠乎身矣。是故誠者、天之道也。思誠者、人之道也。至誠而不動者、未之有也。不誠、未有能動者也。

通釋　孟子曰く、下位に居て上位の人に信任せられないならば、人民を治めること

は出來ない。上の人に信任せられるのには道がある。友人に信用せられなければ上の人に信任せられることは出來ない。友人に信用せられるのに道がある。それは親に事へて悅ばれなければ友人に信用せられない。親に悅ばれるのに道がある。自分の身に反省して見て誠でないならば親に悅ばれない。吾が身を誠にするのに道がある。それは學んで善を知り、之を悅んで固く執つて行はなければ、身を誠にすることは出來ない。であるから誠は天の道であつて、身を誠にせようと思ふのは人の道である。至誠を以て人に接したならば之に感動せないものはなく、誠でなくてよく人を感動せしめるものはない。

語釋
●存乎人　人の善惡を察すること。存は在の義で、在は古文で察と通ずる
●眸　ひとみ。
●眊　目の明かでない

一五　莫良於眸子　（同　上）

孟子曰存乎人者莫良於眸子眸子不能掩其惡胸中正則眸子瞭焉胸中不正則眸子眊焉聽其言也觀其眸子人焉瘦哉

訓點　孟子曰存乎人者莫良於眸子。眸子不能掩其惡。胸中正則眸子瞭焉。胸中不正則眸子眊焉。聽其言也。觀其眸子人焉瘦哉。

通釋　孟子曰く、人の善惡を察するには、その人のひとみを見る程よいことはない。ひとみはその人の胸中の惡を掩ひかくすことは出來ない。胸中が正しい時にはひとみが明かで、胸中が正しくない時にはひとみがぼんやりとして明かでない。其の人のいふ言葉をよく聞いて、その上その人のひとみを觀たならば、人はどうして胸中の正邪を掩ひかくすことが出來ようか、決してかくすことは出來ない。

語釋
●事親　親を養ふこと。
●守身　身を不義に陷らせないこと。

一六　事孰爲大　（同　上）

孟子曰事孰爲大事親爲大守孰爲大守身爲大不失其身而能事其親者吾聞之矣失其身而能事其親者吾未之聞也孰不爲事事親事之本也孰不爲守守身守之本也　（大正三、山口高商・大正二、東京高師）

訓點　事孰爲大。事親爲大。守孰爲大。守身爲大。不失其身而能事

其親者、吾聞之矣。失其身、而能事其親者、吾未之聞也。孰不爲事、事親事之本也。孰不爲守、守身守之本也。

通釋　孟子曰く、すべて事へることの中で、何が一番大切かといふに、親に事へるのが最も大切である。守ることの中で何が一番大切かといふに、身を守るのが最も大切である。其の身を守りて(持崩さないで)よく其の親に事へる者は自分は之を聞いてゐる。がしかし其の身を守らないで(持崩して)よく其の親に事へる者は自分はまだ聞いたことがない。一體、長上を敬ふ事は何でも事へることには相違ないが親に事へるのは事へることの根本である。國を守るのでも、官を守るのでも何でも守ることには相違ないが、其の中で身を守るのは守ることの根本である。

一七　中也養不中

（離婁章句下）

孟子曰中也養不中才也養不才故人樂有賢父兄也如中也棄不中才也棄不才則賢不肖之相去其間不能以寸（大正八、東京高師）

語釋
●中　中和の氣を得た人、即ち賢人
●才　才のある人。
●如中也棄不中云々　もし賢人が愚人をすてゝ教へることをせないと賢人も賢人たる德がなく愚人に近いものになるとの意。
●其間不能以寸　其の間の差の極めて少いこと、殆ど異なる所のないこと。
語釋
●稱於水　水の德を稱する

訓點　孟子曰、中也養不中、才也養不才。故人樂有賢父兄也。如中也棄不中、才也棄不才、則賢不肖之相去、其間不能以寸。

通釋　孟子曰く、賢人は愚人を敎へ、才ある人は不才の人を敎へて、賢才の人とするものである。故に人は賢い父兄のあることを樂しみとするのである。しかるにもし賢人は愚人をすてて敎へることをせず、才ある人は才なき人をすてて敎へることがなかつたならば、賢人には賢人たる德がなく、才人には才人たる實なく、つひに賢人と愚人との間、殆ど差がないやうになつてしまふものである。

一八　水哉水哉

（同上）

徐子曰仲尼亟稱於水曰水哉水哉何取於水也孟子曰原泉混混不舍晝夜盈科而後進放乎四海有本者如是是之取爾苟爲無本七八月之間雨集溝澮皆盈其涸也可立而待也故聲聞過情君子

こと。
●混々　絶えず湧き出る形容。
●科　坎。
●放　至る。
●七八月　周の七・八月夏の五・六月頃には大雨がある。
●溝澮　澮は田間の水道
●聲聞　名譽。
●情　實

恥之

訓點　徐子曰、仲尼亟稱於水曰、水哉水哉、何取於水也、孟子曰、原泉混混不舍晝夜盈科而後進、放乎四海、有本者如是、是之取爾、苟爲無本、七八月之間雨集、溝澮皆盈、其涸也可立而待也、故聲聞過情、君子恥之。

通釋　徐子が孟子に問うていふには「仲尼(孔子)はしば〳〵水をほめて、水なる哉水なる哉といはれたが、一體仲尼は水の如何なる德をほめてかやうにいはれたのですか。」と。孟子が答へていふには「原のある水は混々と湧き出て、晝も夜も絶えず流れて行き、中途に穴があるとそれをみたして進んで遂に四方の海に至るのである。すべて本のあるものはこの通りである。孔子はこの點をとつて水をほめられたのである。かりにも本がなかつたならば七月八月の間、雨がふりつゞくと溝も田間の水道も一杯になるけれども、その水の涸れるのも早くて立つてゐて待つことが出來る

語釋
●或　惑に同じ怪しむとよむ。
●王　齊王をさす。
●暴　溫めること。
●寒　ひやすこと。
●奕　圍碁。
●數　技。
●奕秋　奕を善くするも

位である。故に人も名聲が實際以上であることは、君子は之を恥ぢるのである。(つまりかゝる名聲は本のないもので長くつゞかぬものであるから)

一九　無或乎王之不智

(告子章句上)

孟子曰無或乎王之不智也雖有天下易生之物也一日暴之十日寒之未有能生者也吾見亦罕矣吾退而寒之者至矣吾如有萌焉何哉今夫奕之爲數小數也不專心致志則不得也奕秋通國之善奕者也使奕秋誨二人奕其一人專心致志惟奕秋之爲聽一人雖聽之一心以爲有鴻鵠將至思援弓繳而射之雖與之俱學弗若之矣爲是其智弗若與曰非然也

訓點　孟子曰、無或乎王之不智也。雖有天下易生之物也、一日暴之、十日寒之、未有能生者也。吾見亦罕矣。吾退而寒之者至矣。吾如

の、名は秋。
●通國　國中にて。
●一心　他心。
●鴻鵠　大鳥なり。
●弓繳　矢に糸を結びつけたるもの。鳥を射るに用ひるイグルミのこと
●曰非然也　孟子の自問自答である。

有崩焉何哉。今夫奕之爲數小數也。不專心致志、則不得也。奕秋通國之善奕者也。使奕秋誨二人奕、其一人專心致志、惟奕秋之爲聽。一人雖聽之、一心以爲有鴻鵠將至。思援弓繳而射之。雖與之俱學、弗若之矣。爲是其智弗若與。曰、非然也。

通釋　孟子曰く、齊王の不智をあやしむな。今、天下に最も生じ易い種子があつても、僅か一日之を日に當てゝ溫め、十日の長い間これをひやしたならば決して生長することはない。それと同じく自分が齊王に見えて道を說くことは極めて稀であつて、自分が退出した後で佞人どもが王の傍に來て、王を不善の方に導くのであるから、たとひ王に善心の萌すことがあつても、自分は之をどうすることも出來ないのである。かの圍碁は小技ではあるが、專心に學ばなければ上達はしないのである。奕秋といふ人は國中にて最も奕の上手な人である。今奕秋に二人の者に奕を敎へさせると假定する。そしてその中の一人は專心に學んで唯々奕秋の敎をのみきかんと勉め、他の一人は一の心では奕を習ひながら、他の心では鴻鵠が來ようとしてゐるイグルミを引いて之を射ようなどと空想を畫いてゐる。かやうであつたならば一緒に學んでゐても、とても他の人に及ばないのである。一體これはその智が及ばないのであらうか、いやさうではない、專心にやらないからである。（即ち齊王の不智は眞の不智ではなくて、心を用ひないからであるとの意）

注意　「奕秋之爲聽」「奕秋」は客語であるから說明語「爲」の下に來るべきであるがこゝは倒置法を用ひたのである。かゝる場合客語の下に「之」を用ひるのが普通である。

●熊掌　熊の掌の肉で最も美味とするもの。

二〇　魚我所欲也　（同上）

孟子曰魚我所欲也熊掌亦我所欲也二者不可得兼舍魚而取熊掌者也生亦我所欲也義亦我所欲也二者不可得兼舍生而取義者也生亦我所欲所欲有甚於生者故不爲苟得也死亦我所惡所

●辟　避く。

惡有甚於死者故患有所不辟也如使人之所欲莫甚於生則凡可以得生者何不用也使人之所惡莫甚於死者則凡可以辟患者何不爲也由是則生而有不用也由是則可以辟患而有不爲也是故所欲有甚於生者所惡有甚於死者非獨賢者有是心也人皆有之賢者能勿喪耳

（明治四〇、東京高師●四一高等）

訓點　孟子曰、魚我所欲也、熊掌亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚而取熊掌者也。生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而取義者也。生亦我所欲、所欲有甚於生者、故不爲苟得也。死亦我所惡、所惡有甚於死者、故患有所不辟也。如使人之所欲莫甚於生、則凡可以得生者、何不用也。使人之所惡莫甚於死者、則凡可以辟患者、何不爲也。由是則生而有不用也、由是則可以辟患而有不爲也。是故所欲有甚於生者、所惡有甚於死者。非獨賢者有是心也。人皆有之、賢者能勿喪耳。

注意　孟子曰く、魚は我が欲する所である。熊の掌の肉も亦我が欲する所である。この二つの者を、同時に手に入れることの出來ない場合には、自分は、魚をさしおいても、最も美味な熊掌の方を取らうとする者である。生きるといふ事も、我が欲する所であるし、義といふものも、亦、我が欲する所のものである。若し、この二つの者を、同時に得ることの出來ない場合には、自分は、生命を捨てゝも、義を取らうとする者である。生きるといふことは、我が人情として希ふ事であるが、本心の欲するものには、更に生よりも甚しい義といふものがある。だから、どうしてでも生きて行きさへすればよいといふわけには行かぬのである。死ぬるといふことも、亦、我が人情として惡む事である。併し、本心の惡むものには、死よりも甚しい不義といふものがある。だから、患害をも避けないで、義を取ることがある。若しも各人の欲望が、生命以上のものがないといふ風であつたならば、生命を全くする爲

には、どんな不義不正な手段でも用ひるに相違ない。又、人の惡む所が、死以上のものが、ないといふ風であつたならば、患害を避ける爲には、どんな不義不正な事でも、必ずするに相違ないのである。ところが、かういふ手段によつてやると、生きることが出來るが、しかもその手段を用ひない事があり、かうすれば、それで患害が避けられるといふ事でも、爲ないことがあるのである。斯樣な譯であるから、欲する所生命より大切な者(義)があり、惡む所死よりも甚だしい者(不義)のあるといふのは、獨り賢者だけに、そんな心があるのではなくて、人には、誰にでも、皆、あるのである。只賢者は、よくこの心を失はないといふ事だけなのである。

注意　「非獨賢者有是心也」に於て、「獨り」に對して「賢者ノミ」といふ「ノミ」をおとさないやうに注意すべきである。

二一　一簞食一豆羹　（同　上）

一簞食一豆羹得之則生弗得則死嘑爾而與之行道之人弗受蹴爾而與之乞人不屑也萬鍾則不辨禮義而受之萬鍾於我何加焉爲宮室之美妻妾之奉所識窮乏者得我與鄉爲身死而不受今爲宮室之美爲之鄉爲身死而不受今爲妻妾之奉爲之鄉爲身死而不受今爲所識窮乏者得我而爲之是亦不可以已乎此之謂失其本心

語釋

- 一簞食　簞は竹器、飯をもるもの。
- 一豆羹　豆は木製の器。羹はアツモノ。
- 嘑爾　オイと呼んでどなること。
- 蹴爾　足でけること。
- 萬鍾　鍾は六斛四斗。大鍾をいふ。

訓點　一簞食、一豆羹得之則生、弗得則死。嘑爾而與之、行道之人弗受、蹴爾而與之、乞人不屑也。萬鍾則不辨禮義而受之。萬鍾於我何加焉。爲宮室之美、妻妾之奉、所識窮乏者得我與鄉爲身死而不受今爲宮室之美爲之。鄉爲身死而不受今爲妻妾之奉爲之。鄉爲身死而不受今爲所識窮乏者得我而爲之。是亦不可以已乎。此之謂失其本心。

通釋　一簞の飯、一豆のあつもの、これを得れば生き、得なければ死んでしまふ程飢ゑてゐる時でも、おいとどなつて與へると道行く人(道中の凡人)も受けないし、足蹴にしてこれを與へると、乞食でも之をいさぎよしとせないのである。(これ羞惡の本心があるからである)然るに大祿になると禮義にかなつてゐるか否かをも辨別するすることなく妄りに之をうける。一體萬鍾が我が身に何の益があるであらうか何の益する所もないのである。然るに之をうけるのは、家を美しくし、妻妾に贅澤なあてがひをし、又識り合ひの貧乏人が來つて我が救を得るがためであるか。さきにはたとひ死んでもそれを受けることをしなかつたのに、今は(大祿の場合)家を美しくするために之を受ける事をなし、さきにはたとひ死んでも受けることをしなつたのに今は妻妾に贅澤なあてがひをせんがために之を受けることをなし、さきにはたとひ死んでも受けることをしなかつたのに、今は識り合ひの貧乏人が我が救をうるがためにこれを受けることをする。これも亦已めることが出來ないのであらうか。これを本心を失ふと謂ふのである。

二二　仁人心也　(同上)

孟子曰仁人心也義人路也舍其路而弗由放其心而不知求哀哉人有雞犬放則知求之有放心而不知求學問之道無他求其放心而已矣

訓點　孟子曰、仁人心也。義人路也。舍其路而弗由、放其心而不知求。哀哉。人有雞犬放、則知求之。有放心、而不知求。學問之道無他求。其放心而已矣。

通釋　孟子曰く、仁は人の心である。義は人の踏みゆくべき路である。然るに世人はその路をすてて之に由らず、その心を放失して求めることを知らない。誠に嘆ずべきことである。人はその雞や犬が家を放れて迷ひ去ることがあると之をさがし求めることを知つてゐるにかゝはらず、我が本心が迷ひ去つてゐても之を探し求める

語釋
・放　迷ひ去ること。

ことを知らない。一體學問の道といふものは、外ではない。自ら放失した本心を探し求めるといふにすぎないのである。

二三　無名之指　（同上）

孟子曰今有無名之指屈而不信非疾痛害事也如有能信之者則不遠秦楚之路爲指之不若人也指不若人則知惡之心不若人則不知惡此之謂不知類

（明治三五、高等）

語釋
- 無名指　第四指。
- 信　伸に同じ、のぶ。
- 秦楚之路　秦は西に、楚は南にあつて、共に中國から遠に隔つてゐるから遠方の義に用ひたのである。
- 類　比なり。不知類とは比較輕重を知らないこと。

訓點　孟子曰、今有無名之指屈而不信、非疾痛害事也。如有能信之者、則不遠秦楚之路、爲指之不若人也。指不若人、則知惡之心不若人、則不知惡。此之謂不知類。

通釋　孟子曰く、今こゝに其の第四指が屈んで伸びない人があるとする。無名指は五指中で最も用のない指であるから、屈んでゐても、左程仕事の妨げになる譯でもなく又疼みがある譯でもないが、もしこれを伸してくれる醫者があると聞いたならば秦楚の路も遠しとせず、行つて指の治療をうくるであらう。これは自分の指が人に若かないのを恥ぢてである。かやうに指が人並でない時にはこれをつらく思ふことを知つてゐながら、自分の心が人に及ばない時には、それをにくむことも知らず平氣で居る。かやうなのを物の比較輕重を知らぬといふのである。と。

二四　有天爵者　（同上）

孟子曰有天爵者有人爵者仁義忠信樂善不倦此天爵也公卿大夫此人爵也古之人修其天爵而人爵從之今之人修其天爵以要人爵既得人爵而棄其天爵則惑之甚者也終亦必亡而已矣

（明治三八、仙臺醫專・大正二海軍經理）

語釋
- 天爵　天から授けられた自然に貴い位
- 人爵　人から授けた官爵、公卿大夫の類。
- 修其天爵而人爵從之

訓點　孟子曰、有天爵者、有人爵者。仁義忠信樂善不倦、此天爵也。公卿大夫此人爵也。古之人修其天爵、而人爵從之。今之人修其天

爵以要人爵既得人爵而棄其天爵則惑之甚者也終亦必亡而已矣。

自然の報酬として人爵をうくること。

●要人爵　人爵をえんために天爵を修めるのである。

通釋　孟子曰く、「爵には天爵といふものと人爵といふものとがある。仁義忠信の德をそなへて、善道を樂しんで、倦み怠る事のないのは天爵で、公卿大夫の位は人爵である。昔の人は、たゞその天爵を修めて自分の本分を盡すことにつとめるから自然に人爵も、その身につくやうになつて來るので、自分では、最初から人爵を得ようとは考へて居ないのであつた。然るに、今の人は、人爵を得んがために天爵を修めるのである。そして、そんな人は、既に人爵を得ると、最早天爵を棄てゝ修めないといふのは、實に心得ちがひのひどいものである。こんな事をしてゐると、遂には、一旦得た人爵をも、きつと失ふに至るのである。」と。

二五　生於憂患而死於安樂

（告子章句下）

孟子曰舜發於畎畝之中傅說舉於版築之間膠鬲舉於魚鹽之中管夷吾舉於士孫叔敖舉於海百里奚舉於市故天將降大任於是人也必先苦其心志勞其筋骨餓其體膚空乏其身行拂亂其所爲所以動心忍性曾益其所不能人恆過然後能改困於心衡於慮而後作徵於色發於聲而後喻入則無法家拂士出則無敵國外患者國恆亡然後知生於憂患而死於安樂也

（明治三九、札幌農大・明治四三、東北農大・大正二、廣島高師）

訓點　孟子曰、舜發於畎畝之中、傅說舉於版築之間、膠鬲舉於魚鹽之中、管夷吾舉於士、孫叔敖舉於海、百里奚舉於市。故天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行拂亂其所爲、所以動心忍性、曾益其所不能、人恆過、然後能改、困於心、衡於慮、而後作、徵於色、發於聲、而後喻、入則無法家拂士、出則無敵國外患者、國恆亡、然後知生於憂患而死於安樂也。

○舜　舜は歷山で耕してゐたが、三十才の時登庸せられた。

●畎畝　田畠。

●發　興すこと。擧用せられること。

●傅說　人夫となつて城壁を築いてゐた版は土を夾む工事。

●膠鬲　商は亂世に遭して魚鹽・販賣してゐた。

●拂亂

もとり亂れて、意の如くならぬこと。
●曾益　曾は增に同じく無いものを增し加へること。
●法家　法度を以て君をたゞす大臣の家柄。
●拂子（ヒツシ）　拂は弼に同じ、輔弼の士。
●入出　內外の意。

通釋　孟子曰く、「舜は田畠の間から擧用せられて天子となり、傅說は城壁を築く人夫の中から拔擢せられて殷の相となり、膠鬲（カウカク）は魚鹽を販賣してゐたのを、周の文王に擧げ用ひられ、管仲は、獄官の中からあげられて齊の宰相となり、孫叔敖は南海の濱からあげられて楚の令尹となり、百里奚は市中からあげられて秦の穆公の宰相となつた。故に天が或大きな任務を聖人賢人に降さうとする時には、必ず先づ、その人を困窮の地に置いて、その人の心志を苦しませ、その人の筋骨をつからし、その人の身體を飢やし、膚を膚せさせ、その身を無一物として生活を困難ならしめすべて己がなさんとする所と違つてもとり亂れ自分の意の通りにはさせぬのである。これは、天が、その人の心を動かし、その性を忍耐强くさせ、さうして、本來出來ないことを增益充實させる譯なのである。すべて人は常に過失が有つて、さうして後に、よくその爲す所を改める者である。心に困しみ、慮にさからつて、意の如くならぬやうになつた後に、能く奮發し、その苦心の程度が顏色聲音にまであらはるゝに至つて始めて、能く大悟するものである。國家も亦その通りで、國內には、法度を以て、君をたゞす所の大臣家や輔弼の賢臣がなく、國外に於いては、敵國外患の心配がなく無事に日を送つてゐると、其の國は、いつも亡びるものである。此等の事によつて個人も國家も憂患によつて生き、安樂によつて死するものであるといふことが分る。

二六　舜之居深山之中

（盡心章句上）

孟子曰舜之居深山之中與木石居與鹿豕遊其所以異於深山之野人者幾希及其聞一善言見一善行若決江河沛然莫之能禦也

（大正五、高等）

語釋
●深山之中　舜が歷山に耕してゐた時をさす
●沛然（ハイ）　水の勢よく流れる形容。

訓點　孟子曰、舜之居深山之中、與木石居、與鹿豕遊。其所以異於深山之野人者幾希。及其聞一善言、見一善行、若決江河、沛然莫之能禦也。

通釋　孟子曰く、舜が歷山で耕してゐた時は木石と居り、鹿豕（ロクシ）と共に遊んで居た。そ

の時の舜の有樣は深山の野人と異なる所は殆んど希であつた。しかし舜が一たびつの善言を聞き、一つの善行を見るに及んでは、その應ずることが甚だ速かであることは、譬へば楊子江や黃河を決り開いて、水が勢よく流れて行つて、誰もよくこれをふせぎとゞめる者がないといふやうな有樣であつた。（聖人は一たび感觸する所があると、その應ずることが甚だ速かで通ぜざる所のないことをいつたのである）

參考　若下決二江河一沛然上莫二之能禦一也　と訓んでもよろしい。

二七　孳孳爲善

孟子曰雞鳴而起孳孳爲善者舜之徒也雞鳴而起孳孳爲利者跖之徒也欲知舜與跖之分無他利與善間也

訓點　孟子曰、雞鳴而起、孳孳爲善者、舜之徒也。雞鳴而起、孳孳爲利者、跖之徒也。欲知舜與跖之分、無他。利與善間也。

語釋
●孳孳　勤めること。孜々。
●蹠（セキ）　又跖とも書く、盜跖といふ古の大盜。

通釋　孟子曰く、雞が鳴いて起きてから、孜々として善をなすものは未だ聖人の域に達せずとも亦舜の徒である。又雞が鳴いて起きてからせつせと利をはかつてゐるものは未だ盜跖までには至らずとも亦盜跖の徒である。大聖人たる舜と、大惡人たる跖との分れる所は外ではない、唯利と善との間である。

第六篇　十八史略選

元の曾先之の撰七巻。史記漢書以下十有八史の概要を編年體に記述せるもの也。

一　老子

老子者楚苦縣人也李姓名耳字伯陽又曰字聃爲周守藏吏孔子問焉老子告之曰良賈深藏若虛君子盛德容貌若愚孔子去謂弟子曰鳥吾知其能飛魚吾知其能游獸吾知其能走走者可以爲網游者可以爲綸飛者可以爲矰至於龍吾不能知其乘風雲而上天也今見老子其猶龍乎

（大正四東京高商）

訓點　老子者楚苦縣人也。李姓名耳、字伯陽又曰、字聃。爲周守藏吏。孔子問焉。老子告之曰、良賈深藏若虛、君子盛德、容貌若愚。孔子

語釋
- 守藏吏　圖書室の役人。
- 良賈　良い商人
- 綸　釣絲。
- 矰　いぐるみ　絲を矢に結び飛鳥を引搦め捕へる仕掛けもの。

去謂弟子曰、鳥吾知其能飛、魚吾知其能游、獸吾知其能走。走者可以爲網、游者可以爲綸、飛者可以爲矰。至於龍、吾不能知其乘風雲而上天也。今見老子其猶龍乎。

通釋　老子は楚の苦縣の人である。姓は李、名は耳、字は伯陽といひ、又の字を聃と云つた。周の藏書室の役人であつた。孔子が周に往つて禮の事を問うた。すると老子が答へていふには「富んでゐる商人は、深く其の商品をしまひ込んで、一見殆ど空つぽのやうにしてゐる。それと同じく道德のすぐれた人は、如何に德が盛んであつても、その容貌は、まるで愚人のやうなものである」といつた。孔子は此處を去つてから、門人等に謂ふのに鳥は、能く空中を飛ぶものであることを知つて居る。魚は、能く泳ぐものであることを知つて居る。獸は、能く地上を走るものであることを知つて居る。走るものは網で捕へることが出來る。泳ぐものは釣糸に餌を附けて釣りあげることが出來る。飛ぶものは矰にて射て捕へることが出來るが、龍だけは、自分もどうしたら好いか到底知ることが出來ない。それは變化自在で時には風

雲に乘じて天にまで上るといふからだ。今日あの老子を見るに、丁度龍のやうなものであらうか自分にはとても老子の眞相を測り知ることができない」と。

二　田單火牛

時齊城惟莒即墨不下即墨人推田單爲將軍身操版鍤與士卒分功妻妾編於行伍收城中得牛千餘爲絳繒衣畫五彩龍文束兵及其角灌脂束葦於尾燒其端鑿城數十穴夜縱牛壯士隨其後牛尾熱怒奔燕軍所觸盡死傷而城中鼓譟從之聲振天地燕軍敗走七十餘城皆復爲齊

（大正四年海機）

訓點　時齊城惟莒即墨不下。即墨人推田單爲將軍。身操版鍤與士卒分功、妻妾編於行伍。收城中得牛千餘。爲絳繒衣、畫五彩龍文、束兵及其角、灌脂束葦於尾、燒其端、鑿城數十穴、夜縱牛、壯士隨、

語釋
- 操―持つこと
- 版―築墻の板
- 鍤―土工の「すき」築城の具
- 編於行伍　伍は五人。行は二十五人。編は組入れる。隊の列中に入れる。
- 絳繒衣　赤色の帛の衣。
- 龍文　龍の模樣。

其後牛尾熱、怒奔燕軍。所觸盡死傷。而城中鼓譟從之。聲振天地。燕軍敗走、七十餘城皆復爲齊。

通釋　この時に、齊の城は、たゞ、莒と即墨との二城だけが下らなかつた。即墨の人は、田單を總大將として、防戰につとめたのである。田單は自分から板や鋤をとつて、士卒と共に城壁の普請をし、その妻や妾をば、軍隊の列中に編入して、戰鬪に從事させた。又、田單は、城中から、千餘頭の牛を徵發し、それに、赤絹の着物を着せ、五色の繪の具で龍の模樣を畫き、刀を牛の角に縛り附け、又油をそゝいだ葦を、その尾に結びつけ、城壁に數十の穴をあけ夜になつて、牛の尾に束ねた葦に火をつけて、之を城穴から驅り出し、血氣盛の兵をして、その後からついて行かせた。牛は、尾が熱くてたまらぬので、怒り狂うて、燕の軍隊を目がけて驅出したが、之に觸れたものは、殘らず、死んだり、傷をうけたりした。そして、城中の兵士は、太鼓をたたいて、牛の後から進擊し、鬨の聲は、天地を震動させる程であつた。それで、燕軍は、大敗北をして、七十餘城は、皆再び、齊の所有となつた。

語釋
- 灌脂　油を流しかける
- 縱―放つ。
- 鼓譟　太鼓をたたきやかましくさわぎたてる。

參考　「莒」は今の山東省莒縣。「即墨」。今の山東省即墨縣。「田單」戰國時代齊の人。

三　爲鷄口無爲牛後

洛陽人蘇秦游說秦惠王不用乃往說燕文侯與趙從親燕資之以至趙說肅侯曰諸侯之卒十倍於秦幷力西向秦必破矣爲大王計莫若六國從親以擯秦肅侯乃資之以約諸侯蘇秦以鄙諺說諸侯曰寧爲鷄口無爲牛後於是六國從合。（明治三五、海機四一、陸士）

訓點　洛陽人蘇秦游說秦惠王不用乃往說燕文侯與趙從親燕資之以至趙說肅侯曰諸侯之卒十倍於秦幷力西向秦必破矣爲大王計莫若六國從親以擯秦肅侯乃資之以約諸侯蘇秦以鄙諺說諸侯曰寧爲鷄口無爲牛後於是六國從合。

語釋
- ●遊說　諸國に出でて說き勸めてまはる
- ●從親　合從して親密にする。同盟する。
- ●資之　蘇秦に旅費を給與する。
- ●六國　韓、魏、趙、燕、楚、齊、
- ●擯　排斥する
- ●鄙諺　世俗の諺　俚諺に同じ。
- ●從合　聯盟する。

通釋　洛陽の人、蘇秦は、秦に行き、惠王に說き勸めて、採用せられんことを求めたが、用ひられなかつた。そこで、去つて燕の文侯に說き、趙と合從して、親密にするやうに勸めた。すると文侯は之に贊成して、蘇秦に旅費を給して、趙に行かせた。蘇秦は、趙王肅侯に說いて、「只今、諸侯の兵は秦の兵に十倍してゐます。若し諸侯が、力を併せて、西に向つて秦を攻めたならば、秦は、きつと破れるにきまつてゐます。私は、あなたのために計るに六國が、同盟して、秦をしりぞけるにこしたことはありませぬ。」といつた。そこで肅侯も其の意に贊成して旅費を給與し諸侯に約束せしめた。蘇秦は俚諺を以て諸侯に說いていふのに「いつそのこと鷄口となつても牛の尻になるな」（意は寧ろ大國に從はんよりは小國の主となれ）と盛に六國從親の利なることを說き立てたので六國は此に盟約を結ぶに至つた。

參考　「寧爲鷄口無爲牛後」。蘇秦が韓の宣惠王に說いた時の語。史記正義に曰く「鷄口雖レ小猶進レ食。牛後雖レ大乃出レ糞也」と。小なるも潔くして上に立ち、大なるも卑汚の地には居るべからざるに喩ふ。

語釋

- 嫂 ―兄の妻。
- 從約長 韓、魏、趙、燕、楚、齊の同盟の盟主
- 輜重 衣服の車―輜 雜物の車―重 荷物車
- 昆弟 昆―兄 兄弟である。
- 側レ目 見ぬやうにして見る。ひそかに見る。
- 取レ食 食物を進める。
- 倨 ―傲慢
- 季子 蘇秦の字。一說に嫂の小弟を呼ぶ語。
- 輕易 馬鹿にする。
- 喟然 深く嘆く貌。
- 負郭田 郭は外城。負はそむく、城外の田。
- 二頃 一頃は百畝。

四 蘇秦幷二相六國一

蘇秦爲從約長幷相六國(北報趙王乃)行過洛陽車騎輜重擬於王者蘇秦之昆弟妻嫂側目不敢仰視俯伏侍取食蘇秦笑謂其嫂曰何前倨而後恭也嫂曰見季子位高金多也蘇秦喟然歎曰此一人之身富貴則親戚畏懼之貧賤則輕易之況衆人乎且使我有洛陽負郭田二頃豈能佩六國相印乎 (三四海機、四二外語、大正四東高師)

訓點 蘇秦爲從約長、幷相六國。行過洛陽。車騎輜重、擬於王者。昆弟妻嫂、側レ目不敢仰視。俯伏侍取食。蘇秦笑謂其嫂曰、何前倨而後恭也。嫂曰、見季子位高金多也。蘇秦喟然歎曰、此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之。況衆人乎。使我有洛陽負郭田二頃、豈能佩六國相印乎。

通釋 蘇秦は從約の長になつて、六國に幷せて宰相となり、途次洛陽を通り過ぎた。其行列の馬車、騎馬武者、荷物等は、さながら王者にもひとしかつた。蘇秦の兄弟も、目を側ててまともに蘇秦の方を見ずにぬすみ見しながら、うつむき伏して食を奉つた。そこで蘇秦は笑つて曰ふやう「どうして前には倨り高ぶつて自分を馬鹿にし、今度は恭しく自分を遇するのか」と。兄嫁はそれに答へて「お前の位が高く金の澤山あるのを見るからである」といつた。それを聞いて蘇秦は深くなげいて曰ふには「同じ一人の身でありながら、富貴であれば親戚の者でさへもおそれ、貧賤であれば馬鹿にするのである。まして世間一般の人はなほ更の事だ。若し自分に洛陽郭外の田二町近くも有つたならば、どうして能く六國の宰相の印を佩びられようか。必ずその財産に滿足して奮發心も起らず、今日のやうな大事業をなすことが出來なかつたであらう。」と。

五 管鮑之交

管仲字夷吾嘗與鮑叔賈分利多自與鮑叔不以爲貪知仲貧也嘗

謀事窮困鮑叔不以爲愚知時有利不利也嘗三戰三走鮑叔不以爲怯知仲有老母也仲曰生我者父母知我者鮑子也桓公九合諸侯一匡天下皆仲之謀一則仲父二則仲父　（四三、外國・五海經）

訓點 管仲字夷吾、嘗與鮑叔賈、分利多自與。鮑叔不以爲貪。知仲貧也。嘗謀事窮困。鮑叔不以爲愚。知時有利不利也。嘗三戰三走。鮑叔不以爲怯。知仲有老母也。仲曰、生我者父母、知我者鮑子也。桓公九合諸侯、一匡天下、皆仲之謀。一則仲父、二則仲父。

通釋 管仲は字を夷吾といつた。嘗て鮑叔と共に商賣をし、その利益を分配する時に、管仲は、自分で多くの分前を取つた。然るに、鮑叔は、管仲を貪慾な人と思はなかつた。なぜなれば管仲の貧乏であることを知つてゐたからである。又、管仲は、嘗て、鮑叔と共に、或事業を企てて失敗して、困窮した。この時も、鮑叔は、管仲を愚鈍な人とは思はなかつた。これは、時に利と不利とのあることを知つてゐたからである。又、嘗て三度戰爭をして、三度ながら敗走した。然るに、鮑叔は管仲を卑怯な奴だとは思はなかつた。管仲に老母があることを知つてゐたからである。かやうな次第であつたから、管仲も、深くその情誼に感謝して「我を生んでくれたものは父母であり、我を知つてくれる者は、鮑子である」といつた後、管仲は、鮑叔の推薦によつて、齊の桓公の補佐となつて、桓公を天下のはたがしらとした。桓公が、諸侯を連合し天下の亂れてゐるのを正したのは皆、管仲の計劃であつた。それ故、桓公は、深く管仲を信用し、一にも仲父、二にも仲父といつて何事も管仲を相談相手とした。

語釋
- 賈　古註に行くを商といひ、居るを賈といふ。店を構へて商賣すること。
- 九合　九＝糾（タダス）正し合す、連合の義。
- 一匡　匡は正す、天下を統一してただしくする。
- 仲父　父は尊稱仲は名

六　刎頸之交

秦王約趙王會澠池相如從及飲酒秦王請趙王鼓瑟趙王鼓之相如復請秦王擊缶爲秦聲秦王不肯相如曰五步之內臣得以頸血濺大王左右欲刃之相如叱之皆靡秦王爲一擊缶秦終不能有加

語釋
- 瑟（シツ）＝二十五弦琴
- 鼓＝彈くこと

●缶、酒を盛る土器「ほとぎ」
●秦聲 ―秦のはやりうた。
●上卿 家老の上席なるもの
●右、古昔右を以て上とす
●爭レ列 坐席の上下を爭ふ
●舍人 ―家人即ち臣僕。
●廷叱 ―朝廷にて群臣の前で叱責する。
●駑 ―馬の鈍なるもの轉じて人の鈍なもの意氣地なしの意。
●肉袒負レ荊 肉袒は衣を脱いで肉をあらはす降伏の義。負レ荊荊はいばら罪を謝して荊で打たれんことを請ふの意。
●刎頸之交 生死をひとしくせんと約し、頸を刎れらるとも悔なきほど親密な仲。

於趙趙亦盛爲之備秦不敢動趙王歸以相如爲上卿在廉頗右頗曰我爲趙將有攻城野戰之功相如素賤人徒以口舌居我上吾羞爲之下我見相如必辱之相如聞之每朝常稱病不欲與爭列出望見輒引車避匿其舍人皆以爲恥相如曰夫以秦之威相如廷叱之辱其羣臣相如雖駑獨畏廉將軍哉顧念强秦不敢加兵於趙者徒以吾兩人在也今兩虎共鬪其勢不俱生吾所以爲此者先國家之急而後私讐也頗聞之肉袒負荊詣門謝罪遂爲刎頸之交

（明治三五・海機、同三八・陸士。同三九海兵。同四〇・東京外語。四五・米澤高工。）

讃點 秦王約趙王會澠池相如從及飯酒秦王請趙王鼓瑟趙王鼓之相如復請秦王擊缶爲秦聲秦王不肯相如曰五步之内臣得以頸血濺大王左右欲刃之相如叱之皆靡秦王爲一擊缶秦終

不能有加於趙趙亦盛爲之備秦不敢動趙王歸以相如爲上卿在廉頗右頗曰我爲趙將有攻城野戰之功相如素賤人徒以口舌居我上吾羞爲之下我見相如必辱之相如聞之每朝常稱病不欲與爭列出望見輒引車避匿其舍人皆以爲恥相如曰夫以秦之威相如廷叱之辱其羣臣相如雖駑獨畏廉將軍哉顧念强秦不敢加兵於趙者徒以吾兩人在也今兩虎共鬪其勢不俱生吾所以爲此者先國家之急而後私讐也頗聞之肉袒負荊詣門謝罪遂爲刎頸之交

通釋 秦の昭王は趙の惠文王と約して、澠池で會合した。藺相如が趙王に從つて行つた。さて酒盛をするに及んで、秦王は趙王に瑟を彈ぜん事を請うた。趙王はこれを彈じた。すると今度は相如が秦王に對して缶を擊つて秦のはやりうたをうたつて貰ひたいと請うた。所が秦王はそれを承知しなかつたので、相如が云ふには、「臣

と王との距離は極めて近いのですよ。臣はこの頸の血を以て大王に濺ぎ掛けませうぞ」と。（この請を容れずんば、急に大王を刺さん、王の生命は臣が手中に在り。）秦王のお側の者は、相如を殺さうとしたが、相如が之を叱りつけると、皆たぢ〳〵と醉いて了つた。秦王も仕方なしに一度缶を擊つた。この樣な有樣で、秦はたうとう其會見の終るまで、趙に威力を加へて辱しめる譯に行かなかつた。趙の方でも盛に警備してゐたので、秦は敢て手出しをせずに退いた。趙王は國へ歸つて、相如を上卿とした。そこで廉頗の上に位する事となつたので、頗がいふには「我は趙の大將となつて、城を攻めたり、野に戰うたりした勳功がある。然るに藺相如は本來賤しい身分の者であるのに、只口先だけで自分の上に居る。己は彼の下となる事を羞ぢるからして、若し相如に會うたならば、必ず之を辱しめてやらう」と。相如は之を聞いて、朝するたび毎にいつも病と稱して、廉頗と席の高下を爭ふ事を欲しなかつた。又途に出て廉頗の來るを望み見ると、いつでも車を引かせて、わき道に避け隱れた。相如の召使の者共は皆それを恥辱と思つてゐたので、相如がいふには「自分は秦のやうなあの强大な威力に對してすら、之を朝廷の上に叱咤して、其多くの家來を辱しめたではないか。如何に身不肖であつても、何でたゞ廉頗將軍だけをおそれようか。思ふに　强い秦の國が敢て兵を趙に加へて攻めて來ないのは、只吾と廉頗との二人が居るからである。今二つの虎が共に鬪つたならば、勢ひ兩方共に無事に生きてはゐまい。吾が斯うして廉頗を避けてゐるのは、國家の急務を先にして、私の恨を後にするのである」と。廉頗はこれを聞いて、はだをぬいで肉をあらはし、荊を負うて、相如の門に參つて罪を謝し、たうとう二人は深い交りを結んだ。

參考　「瑟」は琴の類、琴より大なるもの。二十五絃は正則だが後世は二十七絃又は二十三絃、十九弦等をも用ふといふ。

「缶」は「缶即盎也、大腹而斂口」といつて口が窄り腹の膨れたもの。缶を擊つことは秦人が酒漿を盛る器物を樂器の代用とした所より行はれたものらしい。

注意　「其勢二不俱生一」は生くることを俱にしない。どちらか一方は斃れて一方が生きる。

「其勢俱不レ生」は生きざることを俱にす。どちらも斃れる。

「輒」其度毎にの意。

七　漂母飯韓信

初淮陰韓信家貧釣城下有漂母見信饑飯信信曰吾必厚報母母怒曰大丈夫不能自食吾哀王孫而進食豈望報乎淮陰屠中少年有侮信者因衆辱之曰若雖長大好帶劍中情怯耳能死刺我不能出我胯下信孰視之俛出胯下蒲伏一市人皆笑信怯

（明治三八高等・明治四三陸士）

訓點　初淮陰韓信家貧、釣城下。有漂母。見信饑、飯信。信曰、吾必厚報母。母怒曰、大丈夫不能自食。吾哀王孫而進食。豈望報乎。淮陰屠中少年、有侮信者。因衆辱之曰、若雖長大好帶劍、中情怯耳。能死刺我。不能出我胯下。信孰視之、俛出胯下蒲伏。一市人皆笑信怯。

語釋
- 淮陰（ワイイン）　今の江蘇省淮安府清河縣の地。
- 漂母　布さらしの婆。
- 哀　―氣の毒に思ふ。
- 王孫　貴人の子孫。公す若様の意。ここは韓信をさす。
- 屠中（トチュウ）　屠は「ほふる」獸類の皮を剝ぐを職とするものの住む町。
- 因衆　大勢を恃む（タノ）。
- 中情　―心の中。內心。
- 怯　臆病。卑怯。
- 胯　―股
- 俛　―俯かがむ。
- 蒲伏　匍匐に同じ。腹這ふ
- 一市人　全市の人。

通釋　最初、淮陰の人韓信は、その家が非常に貧であつて、城下で釣をしてゐたするると、その川で洗濯してゐた老婆が、韓信の餓ゑてゐるのを見て、氣の毒に思ひ飯を食はせた。そこで韓信は大いに喜んで、「自分は、他日、屹度、お前さんに手厚くお禮をしますよ」といつた。ところが、老婆が腹を立てて、「あなたは、男子と生れながら、自分で衣食することが出來ないで、ひもじさうにしてゐるのを氣の毒に思つて飯を惠んだだけである。どうして、報酬などを望まうや。」といつた。又、淮陰城下の賤しい人間共の住む町の若者共が、韓信を馬鹿にして、その仲間の大勢居るのを賴りにして、韓信を辱しめ、「お前は、身體は立派で、好んで劍を腰にさげてゐるが、內心は臆病であるに相違ない。それとも命を惜しまぬ覺悟なら、その劍を拔いて、おれ達を刺して見よ。若し、おれ達を刺すことが出來ねば、おれ達の股の下をくぐれ」と罵つた。韓信は、暫くぢつと見て居たが、まもなく俯して腹這になつて股をくぐつた。町中の人は皆これを見て韓信の臆病なのを見て嘲り笑つた。

參考　「王孫」―韓信は王孫ではないが、此の頃は諸侯が秦に亡ぼされた後とて貴人の子孫などの沒落したものが多くあつた。漂母もこの意で信を指して「王孫」とい

つたらしい。

熟視―よく忍んだ狀があらはれてゐる。

八　燕雀安知鴻鵠之志哉

陽城人陳勝字涉、少時與人傭耕輟耕之隴上悵然久之曰苟富貴無相忘傭者笑曰若爲傭耕何富貴也勝大息曰嗟呼燕雀安知鴻鵠之志哉

（大正五海兵）

訓點　陽城人陳勝字涉、少時與人傭耕。輟耕之隴上、悵然久之、曰、苟富貴、無相忘。傭者笑曰、若爲傭耕、何富貴也。勝大息曰、嗟呼燕雀安知鴻鵠之志哉。

通釋　陽城の人の陳勝、字は涉といふ者、若い時人に雇はれて耕作をして居たが或日耕作を中止して田の中の小高き處に往き、長時間恨みなげいて考へこんで「も

語釋
- ●與レ人　人のために
- ●傭耕　人に雇はれて耕作に従事し賃をとること。
- ●輟　―やめる
- ●隴上　隴＝壟　田中の高處。
- ●悵然　うらみなげくさま。

し自分が富貴の身となつたら、お互に忘れはせぬぞ」といつた。傭者が笑つていふには「お前はたかが日傭取の人夫ではないか、どうして富貴の身となることが出來るものか」と。勝は大きなためいきをついて「さて〳〵燕や雀などの小鳥にひとしい人どもは、どうして鴻や鵠のやうな大きな鳥にも比すべき大人物の精神が分るものか」といつた。

語釋
- ●鴻鵠　鴻は水鳥の一種雁より稍大。鵠は「くぐひ」共に大鳥。
- ●吳中　吳の土地
- ●避レ仇　復讐されることより逃れる。
- ●書　―書法
- ●劍　―劍術
- ●印綬

九　學萬人敵

項梁者楚將項燕之子也嘗殺人與兄子籍避仇吳中籍字羽少時學書不成去學劍又不成梁怒籍曰書足以記姓名而已劍一人敵不足學學萬人敵梁乃敎籍兵法會稽守殷通欲起兵應陳涉使梁爲將梁使籍斬通佩其印綬遂舉吳中兵得八千人籍爲裨將時年二十四

（明治四二海機）

印は官印綬は印を身に佩ぶるためのうちひも。官の證。
●裨將 裨は補、副將の意。

訓點 項梁者、楚將項燕之子也。嘗殺人、與兄子籍、避仇吳中。籍字羽。少時學書不成、去學劍、又不成。梁怒。籍曰、書足以記姓名而已、劍一人敵、不足學、學萬人敵。梁乃教籍兵法。會稽守殷通欲起兵應陳涉、使梁爲將、梁使籍斬通、佩其印綬、遂舉吳中兵得八千人。籍爲裨將。時年二十四。

通釋 項梁は、楚の將、項燕の子である。嘗て、人を殺したが、その、復讐を恐れて、兄の子の項籍と吳の土地へ逃げこんで居た。項籍は、字を羽といひ、幼い時書を學んだが、一向に上達しなかつた。次には、劍術を學んだが、之も、亦、物にならなかつた。そこで、項梁が怒つたところ、項籍は、「書は、姓名を記すことが出來れば澤山だ。又、劍術は、一人の敵を相手とする術に過ぎない。だから、どちらも學ぶに足らぬ。それで、自分は、萬人を相手とする兵法を學びたい。」といつた。そこで、項梁は、項籍に兵法を敎へた。その後、會稽の大守の殷通といふ者が

兵を起して、陳涉に應じようとし、項梁をして大將とならせた。項梁は、項籍をして、殷通を斬らしめ、その印綬を佩びて、自ら會稽の守となり、遂に、吳中の兵を全部集めて、八千人を得たが、項籍は、その副將となつた。其の時、年が二十四であつた。

語釋
●關中 中原。四圍關あり以て名づく。
●阻レ山 山でたちふさぐ
●四塞之地 四方のふさがつた土地。東は函谷關。西は散關。北は蕭關。南は武關。關所で固む。
●肥饒 土地肥沃。

一〇 沐猴而冠

韓生說項羽關中阻山帶河四塞之地肥饒可都以覇羽見秦殘破且思東歸曰富貴不歸故鄉如衣繡夜行耳韓生曰人言楚人沐猴而冠果然羽聞之烹韓生

（明治四四小檜高商）

訓點 韓生說項羽關中阻山帶河四塞之地肥饒可都以覇羽見秦殘破且思東歸曰富貴不歸故鄉如衣繡夜行耳韓生曰人言楚人沐猴而冠果然羽聞之烹韓生

作物豐富。
●覇 ―はたがしら、大名の長。
將軍。
●殘破
そこなひやぶる
●東歸
東の方楚に歸る
●衣繡夜行
如何に美しいとも目につかぬ。
●沐猴而冠
楚人猴を沐猴といふ。人が如何に立派な衣服をつけても其の心が人でないことにいふ。ここでは楚人の性野卑なるをいふ。

通釋 韓生といふ者が項羽に說いていふには關中は山で立ち塞がれ、又河を帶び四方には關所があつて固めた土地で、其上地味が肥えて作物も饒であるから、此處に都を定めてはたがしらとなるべきであると。然るに羽は關中が戰爭の爲にそこなひやぶれた有樣を見て、そこに都を奠めようとする意思はなく、且つ東の方故鄉に歸りたいと思つて、いふには「富貴となつて故鄉に歸らないのは、丁度繡取りのした立派な著物を著て、暗夜に步くやうなもので、誰も見て呉れる人もなく、つまらないことだ」と。そこで韓生は「世間の人が、楚人は猿が冠をかぶつた樣なものであると言つたが、如何にも其の通り野卑な根性である」といつたから、項羽は之を聞いて怒つて韓生を烹殺してしまつた。

一一 發縱指示

剖符封功臣鄼侯蕭何食邑獨多功臣皆曰臣等被堅執銳多者百餘戰少者數十合蕭何未嘗有汗馬之勞徒持文墨議論顧反居臣等上何也上曰諸君知獵乎逐殺獸者狗也發縱指示人也諸君徒能得走獸耳功狗也至如蕭何功人也群臣皆莫敢言

（三、漢機）

訓點 剖レ符封ス功臣ヲ。鄼侯蕭何食邑獨リ多シ。功臣皆曰ク、臣等被レ堅執レ銳ヲ、多キ者ハ百餘戰、少キ者モ數十合。蕭何ハ未ダ嘗テ有ラ汗馬之勞。徒ニシテ持シテ文墨ヲ議論スカヘ。顧ルハ反居ル臣等ノ上ニ何ソ也。上曰ク、諸君知レルヲ獵ヲ乎。逐ヒ殺スル獸者ハ狗也。發縱シテ指示スルハ人也。諸君徒ニ能ク得ル走獸ヲ耳。功ハ狗也。至レバ如キニ蕭何ノ功人也。群臣皆莫シ敢チテ言フモノ。

通釋 「わりふ」を割いて手柄のあつた家來達に領地を與へた。其時酇侯（蕭何は酇に封せられた）の蕭何は、領地が他の人人よりも非常に多かつたから、他の功臣どもは、皆不平で、高祖に向つていふには「臣等は堅い鎧を著、鋭い武器を持ち、多き人は百餘度も戰ひ、少き人も數十度の戰爭をしました。然るにあの蕭何は一度も馬に汗をかかせて戰場を驅けまはつた骨折もなく、文墨を持つて議論した丈であ

語釋
●剖レ符
符は「わりふ」諸侯を封ずる時竹の長さ六寸のものを分けて二片とし半分をその人に與へる。封侯の証である。
●食邑
所領の土地。
●被レ堅執レ銳
堅い鎧を着け鋭利な刀を持つ。
●汗馬之勞
馬に汗かかせて戰場に奮戰すること。
●文墨
かきもの筆墨。

るのに、反つて我我共の上に居るといふはどういふ譯でありますか」と。高祖がいふには「君達はあの獵といふものを知つて居るであらう。獸を逐ひかけて殺すものは狗である。狗の繩を解いて逐ひ放しあれだこれだと指圖するものは人である。君達はたゞ原野を驅けて獸を獵つたに過ぎないから、手柄は狗の働に過ぎぬが、蕭何は君達の上に立つて君達を指圖して手柄をさせたのだから、手柄は犬を指圖した人といはねばならぬ」と。そこで羣臣どもはその理に服して、だれも一言もいふものがなかつた。

●發縱　繋いである綱を解いて犬を放つこと
●指示　手で獸の居り場所を示す。

語釋
●上（シヤウ）―漢の孝武帝をさす。
●文學　文學に堪能な人
●欲云云―唐虞の政に倣はんとするといふ意を略す。
●唐虞之治　堯舜のよく治まりたる政治。
●戇（トウ）　馬鹿正直なこと
●社稷之臣（シヤシヨクノ）　國家の重任を負うてその安危に任ずる臣。
●如レ發レ蒙（シカハツスルガヲ）　蒙は物の上のかぶせもの。發は開く。かぶせものを取り除くやうに骨の折れぬこと。

一二 黯之戇也

上方招文學嘗曰吾欲云云汲黯曰陛下內多欲而外施仁義奈何欲效唐虞之治乎上怒罷朝曰甚矣黯之戇也他日又曰古有社稷臣黯近之矣淮南王安謀反曰漢廷大臣獨汲黯好直諫守節死義如亟相公孫弘等說之如發蒙耳

（八、陸士）

新點　上方招文學嘗曰、吾欲云云。汲黯曰、陛下內多欲、而外施仁義、奈何欲效唐虞之治乎。上怒罷朝曰、甚矣、黯之戇也。他日又曰、古有社稷臣、黯近之矣。淮南王安謀反。曰、漢廷大臣、獨汲黯好直諫、守節死義。如丞相公孫弘等說之如發蒙耳。

通釋　帝は文學に堪能なる士を招き、或時「吾は云々しようと思ふ」と仰せられたのに、汲黯は「陛下は內心非常に慾が深いのに、表面丈は仁義を施したまふのである。どうしてそんなことであの堯舜の時代の樣な立派な政治がまねられませうか」といつたから、帝は怒つて、其日の政務を罷めて奧へ引き込まれ、侍臣に向つて「汲黯は何とまあひどく馬鹿正直な者であるよ。」といはれたがその後又、「昔には國家と休戚（よろこびとかなしみ）を同じうする臣があつたといふが、汲黯はそれに近いだらう」と。いはれた。淮南王安が謀反した時、いふには「漢の朝廷の多くの大臣中で、たゞ獨り汲黯だけが直諫を好み節操を守り、道理の爲には生命をも惜まない氣概があるが、丞相の公孫弘等になるとこのもの等を說き伏せることは易々た

るもので、丁度、物の『かぶせ』を取除くやうなものだ。」と。

參考 社は土地の神稷は五穀の神轉じて國家の意となる。

「方」「マサニ」「アタル」方今の義、さしあたつて居るの意である。

其の他「アタル」と訓ずる字には、中、當、直、丁、などがある。

中は的中の中で、矢が的にあたること。從つてきつぱりあたる意。

當は向ふとこちらが相あたるの意である。直は當に近く、丁も相あたる意。丁レ憂—父母の喪にあたりあふの義。

語釋
- ●從容（ショウヨウ）ゆつたりと落着きはらつた貌
- ●多多益辨 辨—理也兵が多ければ多いほど

一三 多多益辨

上嘗從容問信諸將能將兵多少上曰如我能將幾何信曰陛下不過將十萬上曰於君何如曰臣多多益辨上笑曰多多益辨何以爲我禽曰陛下不能將兵而善將將此信所以爲陛下禽且陛下所謂天授非人力也

（三六・海機、四四・熊本高工、元、新潟醫專）

うまく處理する
- ●天授 天が人君としてこしらへて與れたの意。
- の人力 人間業

訓讀 上嘗テ從容トシテ問フ信ニ諸將ノ能クタルヲ將ヲ兵ニ多少ヲ。上曰ク如ハ我ガ能クスルヲ將ヲ幾何ニ。信曰ク、陛下ハ不レ過ギルニ將ヲ十萬ニ。上曰ク、於ハ君ニ何如ト。曰ク、臣ハ多多益辨ズト。上笑ヒテ曰ク、多多益辨ズルトガ何ぞ以テ爲ルトガ我ガ禽ヲ。曰ク、陛下ハ不レ能ハクルシ將ヲ兵ニ而テ善クス將ヲ將ヲ、此レガ信ガ所ナリシ以ニ爲ル陛下ノ禽ト。且ツ陛下ハ所ニ謂ル天授ニ、非ラ人力ニ也ト。

通釋 漢の高祖が或時從容として韓信に諸將の兵に將たる多少を尋ねられた。その時高祖はいはれるには「我れなどは幾人の兵に將たることが出來るだらうか」と。信がいふには「十萬人の大將たるに過ぎませぬ」と。高祖がいはれるには「君はどの位であるか」と。信がいふには「私は多ければ多いほど益々都合よく用ひます」と。高祖は笑つて「多ければ多いほど益々都合よく用ひるなら、何故我が捕虜となつたか」と。信がいふには「陛下は兵の將と爲ることは出來ませぬが、其かはり立派に大將を爲ることがお出來になります。是が私の捕虜と爲つた譯であります、其上陛下は、天から授つた好運があつて天子ともなられたので、決して人間業ではあ